《第2部》

中学校・高等学校 教員養成課程 外国語（英語）

第１章　コアカリキュラムに関する諸調査

1. コアカリキュラムの先行実施と妥当性・効果の検証

1.1　目的

2017年11月に文部科学省が公表した「教員養成・研修　外国語（英語）コア・カリキュラム」の「中等教員養成課程　外国語（英語）コア・カリキュラム」（以下，コアカリキュラムとする）には，大学の教職課程で共通に習得すべき資質能力が示されている。コアカリキュラムは「英語科の指導法」（8単位程度を想定）と「英語科に関する専門的事項」（20単位程度を想定）で構成されている。2019年4月から，そのコアカリキュラムに基づいて各大学の教職課程が編成され，文部科学省による課程認定が行われた。本調査の目的は，「英語科の指導法」や「英語科の専門的事項」などを含む，コアカリキュラムに基づいた新たな教職課程の効果を検証することである。

1.2　先行研究

コアカリキュラムに関する先行研究については，本報告書の第1部第1章（p. 2）にまとめられているように，初等教員養成課程に着目したものは散見される一方で，中等教員養成課程に着目したものは少ない。この理由の1つには，コアカリキュラム策定のタイミングが小学校における外国語（英語）の教科化に伴う教職課程の改訂と重なったことに加え，中等教員養成課程の見直しの程度が初等教員養成課程のそれと比べて小さかったことも影響を与えていると考えられる。

本研究では，コアカリキュラムに基づいた新しい教職課程でのカリキュラム全面実施に先立ち，その有効性を間接的ではあるが検証することを目的としている。

1.3　研究方法

◆参加者

教職課程の授業科目をほぼ履修し終わった，国立大学2校（A大学[UA]，B大学[UB]）及び私立大学4校（C大学 [UC]，D大学 [UD]，E大学 [UE]，F大学 [UF]）に在籍する学部学生199名が，同意をした上で本研究に参加した。その内訳は，UA79名，UB82名，UC14名，UD18名，UE5名，UF1名であった。

◆研究材料及び研究手順

コアカリキュラムに含まれる項目の理解度や身につけた知識・技能について自己評価をしてもらうアンケート調査（Google Formsを利用したオンラインアンケート）を実施した。アンケートには，英語科の指導法に関する項目及び英語科の専門的事項に関する項目の理解度についての自己評価に加え，自己評価の結果を考察するための参考情報として，学生自身が英語力向上のために努力してきたことや，大学での模擬授業及び教育実習の成果と課題，そして教員免許取得に関わる大学の授業についての感想，そして中・高等学校の英語科の教員を目指すにあたって，自分に不足していると思う知識や技術をたずねた。

アンケート掲載サイトのURL及びQRコードが掲載された依頼文書をメールなどで配信し，協力を依

頼した。アンケートには以下に関する質問が含まれていた。

(1) 英語科の指導法（30問，5段階で自己評価）
(2) 英語科の専門的事項（「英語コミュニケーション」の能力ならびに「英語学」「英語文学」「異文化理解」についての知識・理解）に関する質問（15問，5段階で自己評価）
(3) 現在の段階での進路希望（1問。択一式）
(4) 英語力向上のため自助努力（1問。複数選択）
(5) 大学の授業で行った英語の模擬授業の成果及び課題（自由記述）
(6) 教育実習の成果及び課題（自由記述）
(7) 中高英語の教員免許取得に関わる大学の授業の成果及び課題（自由記述）
(8) 今の自分に不足していると思う知識や技術（自由記述）

1.4　結果

◆回答者の基本情報

回答者の学年内訳は，4年生（あるいはそれ以上）66名，3年生74名，2年生59名であった。そのうち，中学校のみで教育実習を行った学生は63名，高等学校のみで教育実習を行った学生は15名，中高の両方で教育実習を行った学生は9名，まだ教育実習を行っていない学生は112名であった。

＜１＞英語科の指導法

表1に英語科の指導法に関する項目30項目の平均点と標準偏差（SD）を示す。平均が3.5以上であった項目は，平均が高い順に，「5. 次期学習指導要領の3つの資質・能力について理解している。」（平均：3.73, SD：1.07），「25. 外国語（英語）科の学習指導案を作成することができる。」（平均：3.54, SD：1.21），「11. 英語でやり取りすることの指導の在り方について理解し，授業指導に生かすことができる。」（平均：3.53，SD：0.97），「6. 5つの領域別の学習到達目標設定の在り方について理解している。」（平均：3.51，SD：1.02）であった。一方，平均が3未満だった項目は2つあり，「1. 中学校及び高等学校の外国語（英語）の学習指導要領について理解している。」（平均：2.92，SD：0.98），「4. 年間指導計画の立案の仕方について理解している。」（平均：2.50，SD：1.05）であった。学習指導案の作成についてはある程度の到達感を感じている一方で，年間指導計画の立案については理解が十分ではない傾向が見られた。

表１　英語科の指導法に関する項目の平均点と標準偏差

（N = 109）

英語科の指導法に関する項目	平均	*SD*
1. 中学校及び高等学校の外国語（英語）の学習指導要領について理解している。	2.92	0.98
2. 中学校及び高等学校の外国語（英語）の教科用図書（教科書）について理解している。	3.07	1.03
3. 単元計画の立案の仕方について理解している。	3.16	1.13
4. 年間指導計画の立案の仕方について理解している。	2.50	1.05
5. 次期学習指導要領の3つの資質・能力について理解している。	3.73	1.07
6. 5つの領域別の学習到達目標設定の在り方について理解している。 【注：5つの領域…聞くこと，読むこと，話すこと（やり取り），話すこと（発表），書くこと】	3.51	1.02
7. 小・中・高等学校を通した英語教育の在り方の基本について理解している。	3.22	0.98
8. 小学校の外国語活動・外国語の学習指導要領や教科用図書等の教材について理解している。	3.08	1.12
9. 英語を聞くことの指導の在り方について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.38	0.88
10. 英語を読むことの指導の在り方について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.36	0.94

11. 英語でやり取りすることの指導の在り方について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.53	0.97
12. 英語で発表することの指導の在り方について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.44	0.92
13. 英語を書くことの指導の在り方について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.25	0.96
14. 英語で聞いた内容を他者に口頭で説明するなど，複数の領域を統合した言語活動の指導の在り方について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.29	0.99
15. 英語の音声的な特徴に関する指導の在り方について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.23	0.94
16. 英語の文字の指導の在り方について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.03	0.95
17. 英語の語彙・表現に関する指導の在り方について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.23	0.92
18. 英語の文法に関する指導の在り方について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.22	0.99
19. 異文化理解に関する指導の在り方について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.48	1.09
20. 教材及びICTの活用の仕方について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.34	1.04
21. 英語でのインタラクションについて理解し，授業指導に生かすことができる。	3.40	1.04
22. ALT等とのティーム・ティーチングによる指導の在り方について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.09	1.03
23. 生徒の特性・習熟度への対応について理解し，授業指導に生かすことができる。	3.24	1.06
24. 学習到達目標に基づく授業の組み立てについて理解し，授業指導に生かすことができる。	3.23	0.99
25. 外国語（英語）科の学習指導案を作成することができる。	3.54	1.21
26. 観点別学習状況の評価に基づく評価規準の設定や評定への総括について理解している。	3.07	1.13
27. 観点別学習状況の評価の在り方について理解している。	3.17	1.02
28. パフォーマンス評価の在り方について理解している。	3.14	1.00
29. 生徒の言語能力の測定と評価の在り方について理解している。	3.03	1.00
30. 第二言語習得理論と，英語教育におけるその活用について理解している。	3.13	1.10

＜２＞英語科の専門的事項

表2に英語科の専門的事項に関する15項目の平均と標準偏差を，「英語コミュニケーション」「英語学」「英語文学」「異文化理解」のカテゴリー別に示す。「英語コミュニケーション」及び「異文化理解」に関する項目については，概ねすべての項目において平均が3.5前後であったのに対し，「英語学」に関する3項目のうち，「英語の音声の仕組み」と「英語の歴史的変遷及び国際共通語として英語の実態」に関する項目は，平均が3.0程度にとどまり，「英語文学」に関する3項目については，すべて平均が3を下回っていた。

＜３＞現在の段階での進路希望

回答者のうち，約28％（55名）が小学校教員希望，約40%（70名）が中学校あるいは高等学校の教員希望，約32%（65名）がそれ以外の進路を希望していた。

表２　英語科の専門的事項に関する１５項目の平均と標準偏差

（N = 199）

英語コミュニケーションに関する項目	平均	*SD*
31. 様々なジャンルや話題の英語を聞いて，目的に応じて情報や考えなどを理解することができる。	3.48	0.93
32. 様々なジャンルや話題の英語を読んで，目的に応じて情報や考えなどを理解することができる。	3.64	0.91
33. 様々な話題について，目的や場面，状況等に応じて英語で発表ができる。	3.36	0.98
34. 様々な話題について，目的や場面，状況等に応じて英語でやり取りができる。	3.41	0.94
35. 様々な話題について，目的や場面，状況等に応じて英語で書くことができる。	3.50	0.91
36. 英語で聞いた内容を他者に口頭で説明するなど，複数の言語領域を統合した言語活動を遂行することができる。	3.28	0.95

英語学に関する項目	平均	*SD*
37. 英語の音声の仕組みについて理解している。	3.19	1.01
38. 英語の文法について理解している。	3.44	0.88
39. 英語の歴史的変遷及び国際共通語としての英語の実態について理解している。	3.03	1.00
英語文学に関する項目	平均	*SD*
40. 文学作品において使用されている様々な英語表現について理解している。	2.74	1.00
41. 文学作品で描かれている，英語が使われている国・地域の文化について理解している。	2.82	1.05
42. 英語で書かれた代表的な文学について理解している。	2.80	0.96
異文化理解に関する項目	平均	*SD*
43. 世界の文化の多様性や異文化コミュニケーションの現状と課題を理解している。	3.45	1.03
44. 多様な文化的背景を持った人々との交流を通して，文化の多様性及び異文化交流の意義について体験的に理解している。	3.53	1.10
45. 英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化について基本的な内容を理解している。	3.24	1.00

＜４＞英語力向上のため自助努力

Q47「これまでに自身の英語力向上のために，何か努力してきたことはありますか？ある場合は具体的に書いてください。（複数回答可）」への自由記述回答に出現したキーワードの頻度を表3に示す。高頻度のキーワードを含む記述内容には，資格試験に挑戦する，英会話教室などに通う，留学する，洋画などの視聴覚教材を活用する，などが挙げられる。一方でこの質問に対して無回答だった参加者が約27%（55名）おり，これらの学生は英語力向上のために特に自助努力をしていないと思われる。

表３　英語力向上のための自助努力の内容と頻度（複数回答可，有効回答者数137，無回答者数55）

項目	人数	項目	人数
資格	43	多読・速読 リーディング	12
学会・セミナー	1	発音・音声 シャドーイング リスニング	11
留学 帰国子女	26	ライティング	3
洋楽洋画 動画 ニュース	23	単語・表現	11
大学授業	17	文法	4
英会話 ネイティブ等交流	30	その他自習	13
塾アルバイト	2	無回答	55
音読	9		

＜５＞大学の授業で行った英語の模擬授業の成果及び課題

Q48「大学の授業で行った英語の模擬授業を振り返って，その成果及び課題について，自由に感想を書いてください。」への回答結果について，成果に関する記述を含んだ回答と，課題・問題点についての記述を含んだ回答をテキストデータ化し，それぞれについてテキスト分析用ソフトウェア「KHコーダー（https://khcoder.net/）」を用いて頻出語の抽出と共起ネットワークの作成を行い，回答にどのような傾向が見られるかを考察した。ただし，データとなった記述の分量はそれほど多くないため，あくまでも暫定

的な解釈になっていることにご留意頂きたい。また，結果を解釈するにあたり，キーワード分析の問題点（例えば，文脈を度外視した同一単語のカテゴリー化）については留意をしたが，図表ではその点が反映されにくいため，解釈に際しては実際の引用部分（原文ママ）も併せて参照されたい。

表4及び図1に，成果に関する記述を含んだ回答の分析結果を示す。頻出語の中でも「**授業**」「**模擬**」「**行う**」「**課題**」といった語句，「**考える**」「**実際**」「**生徒**」といった語句が共起していることから，大学で行った模擬授業を通して学生たちは実際に自身で授業を行うことを通して自らの課題に気づく経験をし，それを成果と捉えている様子がうかがえる。このことは「**模擬授業**を**行う**ことで，自身の**課題**点を洗い出すことができた。また，他者の**模擬授業**を受けることで授業作りのヒントを得ることもできた（UC1）」「**模擬授業**を通して自分の強みや弱みを把握できた（UA58）」「何度も**模擬授業**実践をし，たくさんの人の模擬授業を見て様々なアイデアが得られた（UA9）」という回答にも表れている。また，「マイクロティーチングをして，**実際**に授業を運営する側の**考える**ことの多さを実感した。やってみて初めて気づくことが多く，たくさんの気づきを得られた（UA50）」「自分たちで試行錯誤して作る模擬授業は難易度は高く感じたが，それ以上に，**生徒**の興味の引きつけ方などをよく**考え**て授業を作れるようになり，達成感も得られる物であった（UC2）」「最初は自分自身のことで精一杯で，**生徒**役の人の表情などに気を配れなかったのですが，何度かやる中で**生徒**の反応や表情をしっかり見るようにして，どのような展開にしていくべきか**考え**られるようになりました（UC6）」「**生徒**に質問するペースや間，**実際**のインタラクションを体験的に経験することで，授業の構想を練りやすくなった。また，**考えて**いるだけでなく実践することで，以前よりも授業のアイディアが豊富になった（UC7）」という回答にあるように，模擬授業を複数回行うことで，生徒の目線で考えることができるようになったと感じているようだ。

また，共起ネットワークではその性質上検出されていないが，「**授業**」という語に関しては，ほかにも「具体的な**授業**の進め方がわかった（UE7）」「細かい注意すべきことや，目的を持って**授業**を組み立てることを学ぶことができた（UE43）」「模擬授業の実践をしてみることで，**授業**の流れや目標に沿った内容を考える力を養うことができた（UA8）」のように，授業計画に関する学びに言及する回答も少なくなかった。

表４　模擬授業の成果に関する回答における頻出語（頻度５以上，サンプル総語数150）

順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度
1	授業	91	10	課題	12	17	難しい	7	24	人	5
2	模擬	26		思う	12	20	作る	6		全体	5
3	考える	21	12	感じる	11		準備	6		多い	5
4	自分	19	13	実践	9		必要	6		知る	5
	生徒	19		理解	9	24	イングリッシュ	5		様々	5
6	行う	15	15	時間	8		機会	5		力	5
7	指導	14		得る	8		教育	5		練習	5
8	実際	14	17	実習	7		経験	5		話す	5
9	英語	12		前	7		自信	5			

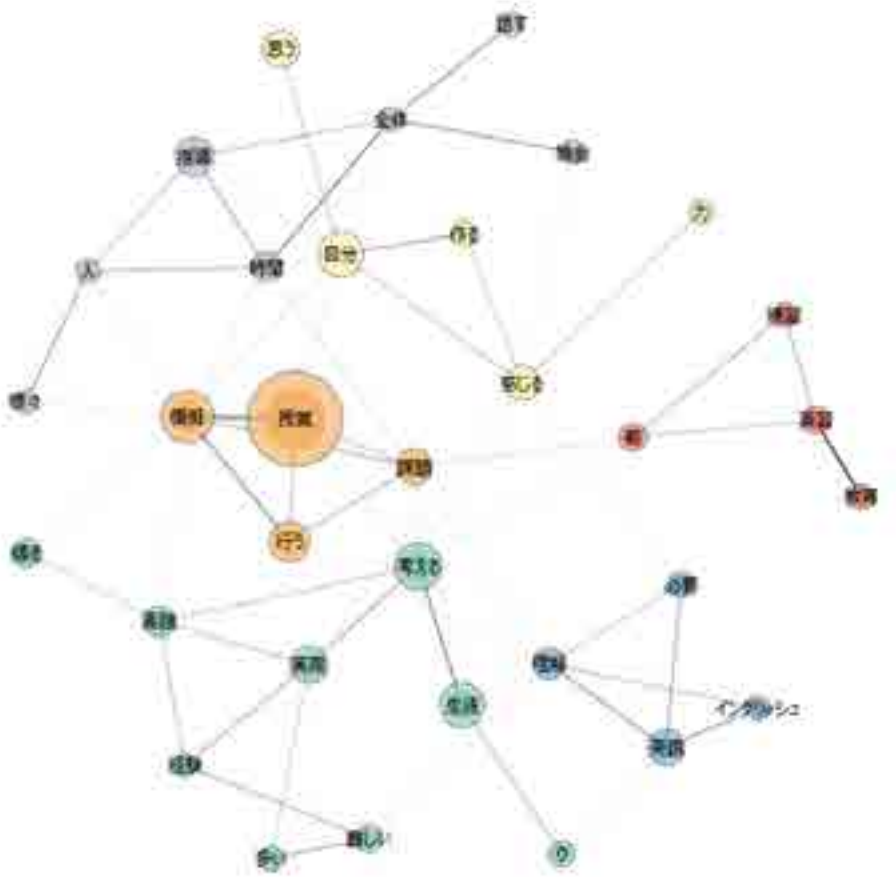


図１　模擬授業の成果に関する回答をもとにした共起ネットワーク（頻度５以上の単語を抽出）

表5及び図2に，課題・問題点に関する記述を含んだ回答の分析結果を示す。頻出語の中で共起している語句として「**難しい**」「**英語**」「**実際**」の3語がある。これらに関連する回答を見ると，模擬授業で経験したことと，教育実習で目の当たりにした実際の児童・生徒の様子との乖離を課題として挙げている記述が多く見られた。例えば，「模擬授業と実習は違うなと感じた。**実際**に中学生を前にしないと，どういう手だてが必要かイメージしにくかった（UA22）」「**実際**の児童の反応は現場でないとなかなか把握することは**難しい**ので，模擬授業だけでは不安である（UA70）」といった回答が該当する。児童・生徒の実態を知るには実際の授業を数多く見ることが不可欠であるが，大学の授業内でその機会を十分に確保することは，授業時間に限りがある中では厳しい。それゆえに，教育実習で実際に教壇に立ったときに，児童・生徒が自分の想定外の反応をすることはある程度は避けられず，またそれが実習の意義の1つでもあるわけだが，教壇に立つ前にできるだけ多く児童・生徒の現状に触れる機会を確保するための対策が必要とされている。また，英語で授業を行うことへの不安に関する回答も散見され，例えば「全部**英語**で授業したかったが，**難し**かった（UA44）」「日本語を使わずに，**英語**で授業をしたらかなり**難し**くて，つらかった（UA67）」といった回答や，「英語でとっさにリアクションをするのが**難し**かった（UE10）」「自身の**英語**の力を鍛える必要を感じた（UE42）」「**難しい**表現や文法の説明を行う際の**英語**での説明が課題（UB14）」「大学生を相手にしているため，中学生や高校生の**英語**のレベルを意識して授業をすることが**難しい**（UA21）」のように，実際に模擬授業をやってみることで，自身の英語力の課題が浮き彫りになったようだ。

次に，「**指導**」「**時間**」「**自分**」「**行う**」の4語に注目して回答を見てみると，これらの単語の共起はあまり

見られなかったが，模擬授業のやり方についての記述の中にこれらの単語が多く出現していた。例えば，「模擬授業では**時間**を省略して授業流れ（ママ）だけを行うという感じであったので，自分の発音や声の大きさや前からの見え方などのような細かい部分も**指導**して頂きたかった（UE61）」「授業1回分を通して**行った**ことはないため，全体的な**時間**配分などの理解に課題があると考えている（UE11）」「どうしても**時間**の都合上，1人で全部を考えたり実施することができないので，グループで少し考えるぐらいで終わってしまうのが少し課題（UE19）」「どうしても複数人での模擬授業となるので，本当に個々人のやりたい授業ができなかったり，上手くいかないこともあるので，やり方に課題を感じます。**時間**と人数の関係で難しいですが…（UE15）」のように，1人で50分授業すべてを計画・実行する機会の必要性に言及する回答が見られた。受講者数が少ない場合は，各学生に1コマ分（50分間）の授業を1人で担当させる模擬授業を行うことも不可能ではないが，どの大学でもそれができるわけではないため，学生1人当たりが担当する模擬授業の時間が短い中でも，50分間通して授業を1人で行うことを想像して取り組めるような工夫が求められる。

表５　模擬授業の課題・問題点に関する回答における頻出語（頻度５以上，サンプル総語数150）

順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度
1	授業	92	11	時間	13	19	前	7	27	作る	5
2	難しい	38	12	行う	12		文法	7		場面	5
3	英語	34		自分	12		話す	7		説明	5
4	模擬	30	14	指導	11	24	進める	6		全体	5
5	生徒	25	15	実習	8		内容	6		多い	5
6	実際	24		反応	8		イングリッシュ	5		大学	5
7	思う	17		必要	8	27	クラス	5		得る	5
8	考える	15		理解	8		違う	5		発音	5
9	課題	14	19	実践	7		教える	5		流れ	5
	感じる	14		人	7		効果	5			

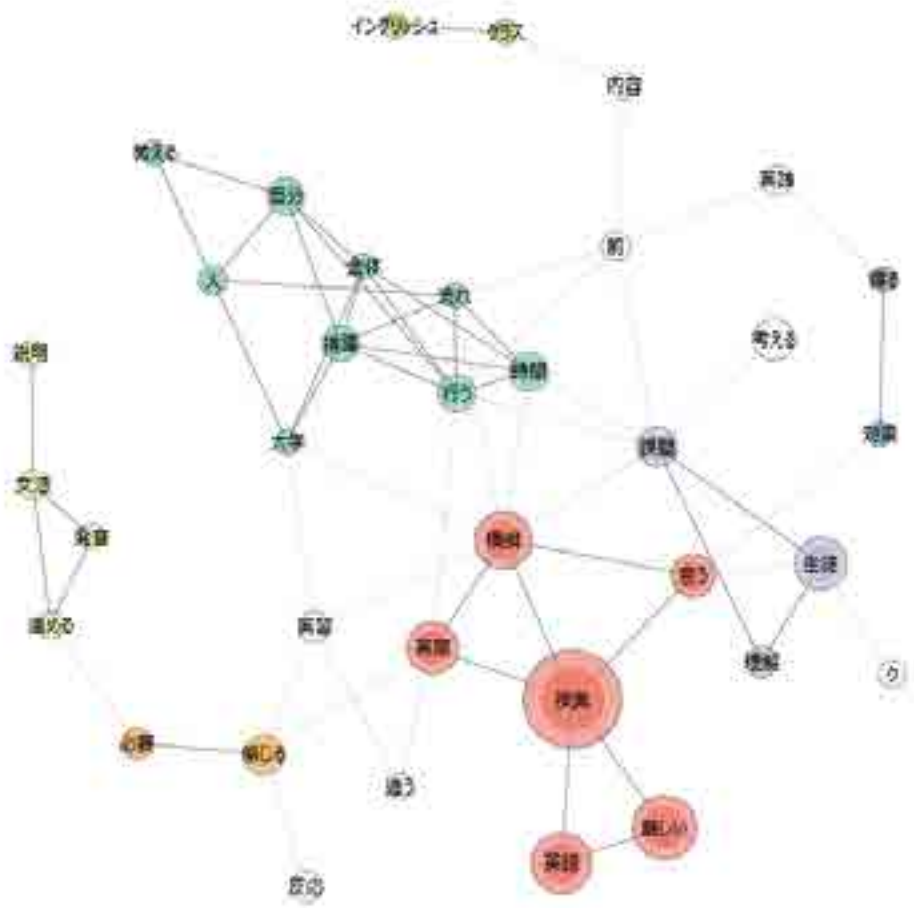


図２　模擬授業の課題に関する回答をもとにした共起ネットワーク（頻度５以上の単語を抽出）

＜６＞教育実習の成果及び課題

Q49「中学校あるいは高等学校での教育実習を振り返って，その成果および課題について，自由に感想を書いてください。」への回答結果について，成果に関する記述を含んだ回答と，課題・問題点についての記述を含んだ回答をテキストデータ化し，それぞれについて頻出語の抽出と共起ネットワークの作成を行い，回答にどのような傾向が見られるかを考察した。

表6及び図3に，成果に関する記述を含んだ回答の分析結果を示す。共起ネットワークの中でも特に頻度が高く結びつきも強く示されている「**授業**」「**生徒**」「**実際**」の3語を参考に回答内容を見てみると，実際に生徒を相手に授業をすることによる気づきについての記述が多く見られた。例えば「**実際**の**生徒**を目の前にして**授業**を行うので，日ごとにどうすれば能力を伸ばせるのか，わかる**授業**になるのかということを悩み，考えることができた（UA4）」「**実際**の中学生の自分の**授業**への生の反応が見られたことが嬉しかったです。わかった時にはとても良い反応をしてくれたり，わからないなと思ったらあまり前を見なくなってしまったりと，しっかり**授業**を考えて構想していくことの大切さに気づきました（UD6）」「反省し改善すること，**授業**を**実際**の**生徒**を相手に実践することで自分の計画がいかに自分本位であるかに気づくことができた（UB64）」のように，生徒の反応を見ながら自身の授業計画や指導技術について試行錯誤できたことを成果と捉えている記述が多く見られた。

また，「**感じる**」「**理解**」「**難しい**」「**行う**」といった語句に関しては，これらの単語すべてが共起する回答はそれほど多くは見られなかったが，それぞれ生徒理解に関する記述の中で出現しており，「生徒**理解**

の重要性について体験的に**理解**できた（UB69）」「生徒の**理解**度をはかりつつアドリブをきかせて教えていくことに，難しさを**感じる**と同時にやりがいも**感じ**ました（UB80）」「（生徒が）**理解**しているかどうかの確認をその都度していくことが大切だと**感じた**（UB28）」といった回答に加え，「実際に，生徒を相手に授業を**行う**ことの**難し**さを感じた。解説がもっと必要な部分，むしろ軽めの解説で後にフォローできる部分など，模擬授業ではない授業経験の大切さを**感じ**た。その中でも，自分が準備をしてきた授業で，**理解**できたと伝えてくれる学生もおり，この仕事のやりがいの1つを**感じる**ことができた（UD8）」「実際の生徒を目の前にして授業を行うにあたり，何に留意して行うべきかを**理解**することができた（UA14）」「授業を**行う**上で指導しなくてはならない責任と，全員がわかる授業をするための手立てについて身をもって学ぶことができてよかった（UA8）」「パートナーと何回も模擬授業を**行い**，疑問に思ったところは先生にアドバイスをもらって変えていきながらベストな授業ができるように準備した。生徒から楽しかったと言われたときは達成感を**感じた**（UB25）」といった回答から，教育実習を通して学生たちは，生徒をよく観察・理解し，個に応じた指導を考えていくことの大切さとやりがいを実感したようだ。

表６　教育実習の成果に関する回答における頻出語　（頻度５以上，サンプル総語数150語）

順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度
1	授業	48	8	反応	9
2	生徒	38		理解	9
3	実際	20	13	考える	8
4	英語	14		行う	8
5	感じる	13		大切	8
6	自分	11	16	実践	7
7	指導	10	17	作る	6
8	課題	9		教育	5
	学ぶ	9		思う	5
	難しい	9		対応	5

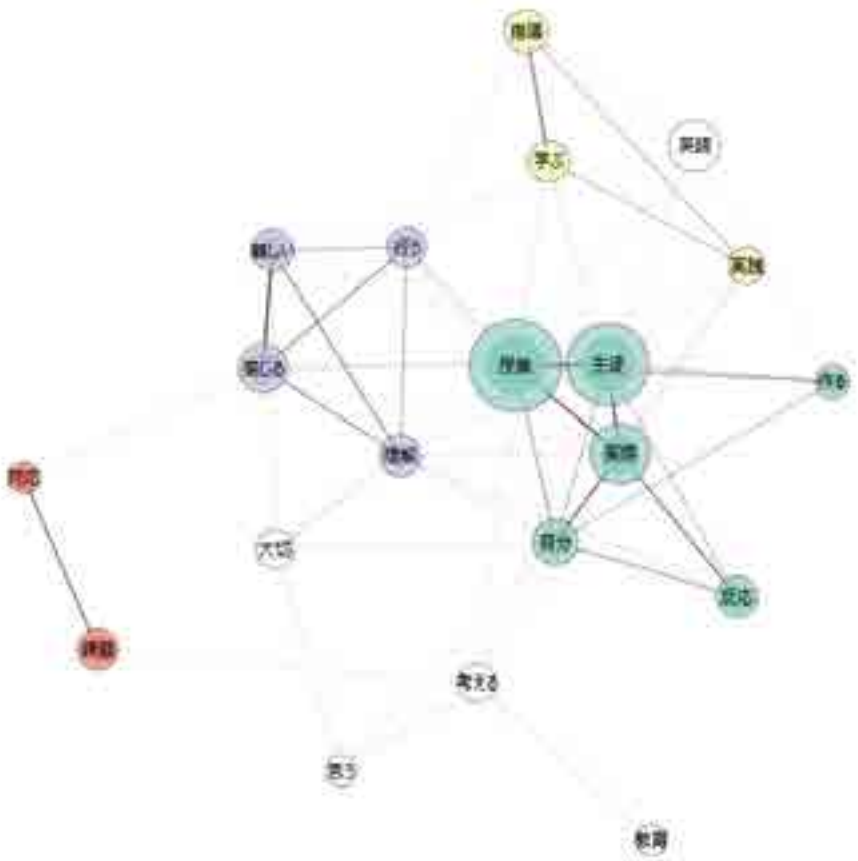


図３　教育実習の成果に関する回答をもとにした共起ネットワーク（頻度５以上の単語を抽出）

次に，表7及び図4に，課題・問題点に関する記述を含んだ回答の分析結果を示す。頻出語上位2つの「**生徒**」「**英語**」「**感じる**」「**難しい**」という語句を含む回答を見てみると，「**生徒**との関わりかたの**難しさ**を学んだ（UB71）」「短い期間で**生徒**の信頼を得ることは難しかった（UB66）」のように生徒との信頼関係構築に課題を感じたと思われるものや，「**生徒**とのコミュニケーションを重要視したり，**生徒**の反応を適切に捉えながら帯活動を進めるようにするのが**難しく感じた**（UA17）」「**英語**の学習に対して消極的な**生徒**を指導するのが**難し**かった（UA7）」「**生徒**との関わりが**難しい**なと**感じた**。理解しているかどうかの確認をその都度していくことが大切だと**感じた**（UB28）」「高校では習熟度別クラスがあり，**生徒**の実態に合わせて授業ができなかったので，課題として残った（UB62）」といったクラス間や生徒間の差違への対応を課題と感じている様子がうかがえるものがあった。さらに，「終えなければいけない範囲が設定されている中で，**生徒**のペースにあわせた指導が実施できなかったことが1番大きな課題と**感じ**ました（UB65）」という記述に見られるように，学年で決められている授業進度と，自分が担当する生徒の学習のペースの折り合いをどのようにつけていくかに悩んだ学生もいたようで，これは大学の授業では実感することが難しく，実習ならではの気づきであろう。

図4の共起ネットワーク上で結びつきが示されている「**授業**」「**作る**」「**思う**」に関する記述については，「課題としては，何クラスもあるとそのクラスによって雰囲気が全く違い，同じ内容であっても少しずつ**授業**を変えたり工夫したりすることが出来なかったことです。クラスの雰囲気によって，その生徒たちに合わせた**授業**を**作って**いけるようにしていきたいです（UD6）」「生徒に話してほしいことを話させる活動を**作る**ことがとても難しいと**思った**。インタラクションを生徒同士で行わせるように**授業**を進行する

ことに課題を感じた（UB47）」「学力差に配慮した**授業**を行うことが難しいと感じた（UD9）」「英語で進行することに，生徒が抵抗をしているようでなかなか「英語で**授業**」することは厳しかった（UD10）」のように，生徒の個人差への対応，大学で学んだ指導法に抵抗を示す生徒への対応，授業中に生徒同士の英語によるインタラクションを充実させることの難しさを課題として挙げる記述が見られた。

表７　教育実習の課題・問題点に関する回答における頻出語（頻度５以上，サンプル総語数150）

順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度
1	生徒	28	9	大切	6
2	授業	24	10	反応	6
3	感じる	15	11	理解	6
4	英語	14	12	考える	5
5	課題	12	13	作る	5
6	難しい	12	14	思う	5
7	指導	8	15	実際	5
8	自分	8			

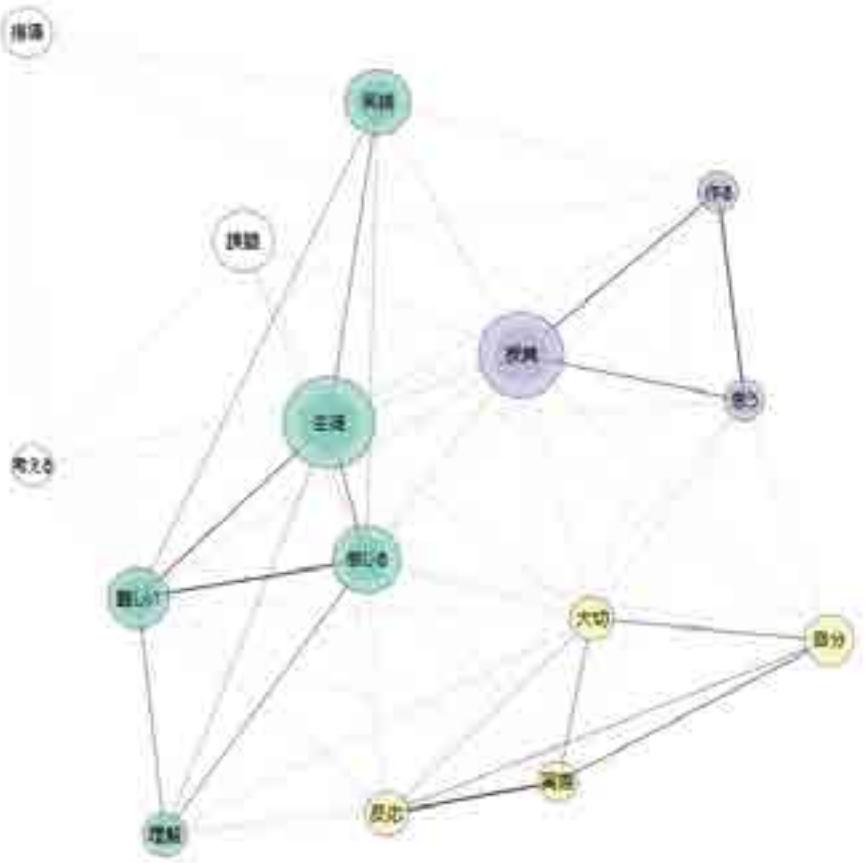


図４　教育実習の課題・問題点に関する回答をもとにした共起ネットワーク
（頻度５以上の単語を抽出）

＜７＞中高英語の教員免許取得に関わる大学の授業の成果及び課題

Q50「（あなたがこれまでに受けてきた）中高英語の教員免許取得に関わる大学の授業について，「役に立った」と感じることや，「改善した方が良い」と思うことがあったら書いてください。」に対する回答については，「役に立った」に関する記述及び「改善点」に関する記述を含んだ回答におけるキーワードを抽出し，その頻度を数えた。表8と表9にそれぞれの結果を示す。

表８　「役に立った」に関する回答に出てきた頻出キーワード

小中連携	SLA	指導法 指導要領 教科書	模擬授業	授業（活動） 体験 実践例	英コミ系	言語学 （音声学含む）	文学	その他
1	4	33	22	4	4	13	1	8

表９　「改善点」に関する回答に出てきた頻出キーワード

指導法・模擬授業関連	専門的事項関連	授業の進め方関連	その他
20	8	1	7

「役に立った」に関する回答には「指導法，指導要領，教科書」及び「模擬授業」に関するキーワードが多く，実際の回答を見ても，教科の指導に関する科目（例：英語科教育法など）において具体的な指導のアイディアを学んだり模擬授業をしたことが役に立ったと書いている学生が多かった。また，数はそれほど多くはなかったが，教科教育法の授業中に「評価」や「第二言語習得」について学んだことが役に立ったという記述も見られた。また，それらの次に頻度が高いのが「言語学（音声学含む）」に関する記述だが，これについては「音声学についても学んでから自分の発音が一気に変わったと感じることができた」といった回答や，「英文法の授業で，自分が生徒の時には丸暗記していた事項を，実はこう教えた方が良いと習ったことが役に立ったと感じる」といった回答にあるように，英語を教える上で言語学に関する知識が有用であることを実感しているようだ。

一方で，教科の専門的事項の中で「英語コミュニケーション」「（英語）文学」「異文化理解」に関して言及した回答は他の項目と比べて少なかったことから，学生が教職課程において専門的事項について学ぶことの意義を実感できるように，指導法に関する科目と専門的事項に関する科目で学ぶ内容を関連づけさせるための工夫がより一層求められる。。

一方，改善点に関する回答の中では「指導法・模擬授業」に関する内容がもっとも多かった。実際の回答例を見てみると，「もっと実践的なことを学びたかった」という表現が散見された。この「実践的」がどのようなことを意味しているかは回答者によって異なる可能性があるが，良い授業例を見る機会や模擬授業の機会を増やして欲しい，（グループワークではなく）ひとりで授業計画を立てたり模擬授業を行ったりする機会が欲しい，といった内容を示していると推察できる。

＜８＞今の自分に不足している知識や技術

Q51「中高の英語科の教員を目指すにあたり，今の自分に不足していると思う知識や技術はありますか。ある場合は具体的に書いてください。」に対する回答におけるキーワードを抽出し，その頻度を数えた。表10に結果を示す。

表10　今の自分に不足している知識や技術に関する回答に出てきた頻出キーワード

無回答	英語力 4技能 語彙・文法	指導法	特別な支援 個に応じた指導	評価・テスト	その他
82	89	35	3	4	14

もっとも頻度が高かったのは「英語力」に関する記述で，これには音声学や英文法に関する知識と，会話力（流暢性），そして生徒の発言に臨機応変に対応する英語力に関する内容が含まれていた。これらはQ48，Q49の回答結果にも通じるところがあり，英語を「教える」場合に必要となる音声や文法に関する知識や，生徒に伝わるように自分が話す英語を調整する力の育成が求められる。

1.5　まとめ

学生の視点から見た大学における教員養成の課題として，大学の授業を通して学んだことと実習あるいは就職後に教壇に立ったときに直面する現実とのギャップをどのように埋めていくかということが浮き彫りになった。中・高等学校における授業で臨機応変に対応する力を身につけるには，現職教員としての指導経験や研修が不可欠だが，大学の教員養成課程において，そのための素地を作ることはできる。例えば，英語を「教える」ために必要な英語運用能力の育成や，模擬授業の充実，教科の指導法と専門的事項の関連付け（教科の指導法において専門的事項への適切な言及を行ったり，教科の指導に資する専門的事項の知識を身に付けさせたりすると）などが具体策として考えられる。

2. 大学教員対象のアンケート調査

2.1　目的

本調査の主な目的は次の2点である。

(1) 中・高等学校英語科教員養成課程の授業科目（英語科の指導法，英語に関する専門的事項）における授業運営や指導上の工夫及び問題点・課題に関する情報を収集すること

(2) 中・高等学校英語科教員養成課程におけるカリキュラム構成や，上記以外の科目における外国語に関する内容の取扱いなどに関する情報を収集すること

2.2　研究方法

◆参加者

中等教育英語教員養成課程を持つ，のべ104大学の148名の教員から回答を得ることができた。

◆研究材料と研究手順

各大学の教職課程の授業担当者を対象に，授業運営や指導上の工夫及び問題点・課題に関する情報を収集する目的で，アンケート調査（Google Formsを利用したオンラインアンケート）を実施した。

中等教育英語教員養成課程が設置されている388大学宛てに，アンケートのURL及びQRコードが掲載された依頼文書を郵送し，協力を依頼した。当初，回答期間は1ヶ月程度を想定していたが，より多くの回答を得るために期間をさらに1ヶ月ほど延長した。

本調査では以下の3種類のアンケートを実施した。

(1) 中等教員養成課程の概要　（以下，「概要調査」）（想定回答時間：10分）

(2)「英語科の指導法」または同等の科目について（以下，「指導法調査」）（想定回答時間：20分～ 30分）

(3)「英語科の専門的事項」または同等の科目について（以下，「専門的事項調査」）（想定回答時間：20分）

各アンケートの質問内容を以下に要約して示す。

(1) 概要調査

・英語教育に関する内容をより深く学べる科目について
・教科指導と教科専門の融合科目について
・教育実習校との連携について
・「教育実習の事前事後の指導」の授業における，英語教育や英語に関する専門的事項の扱い
・「教職実践演習」の授業における，英語教育や英語に関する専門的事項についての扱い
・教職課程の特定の科目の履修または単位取得の要件（英語資格試験のスコアの取得等の条件）
・教育実習事前指導への履修登録や実習への参加の要件（英語資格試験のスコアの取得等の条件）
・学生の英語力向上のための取り組み

(2) 指導法調査

・コアカリキュラムの学習項目を網羅するための工夫
・複数の教員で同一科目の授業を担当する場合の，担当者間の連携
・大人数のクラス（50名程度以上）での工夫

・中等教員養成コアカリキュラムの「英語科の指導法（8単位程度を想定）」に含まれる項目について，授業実施上・指導上の「工夫」及び「問題点あるいは課題」

(3) 専門的事項調査

このアンケートでは，以下のそれぞれの科目について，「教職に資する指導上の工夫」及び「授業実施上，指導上の問題点あるいは課題」をたずねた。

・「英語コミュニケーション」に関する科目
・「英語学」に関する科目
・「英語文学」に関する科目
・「異文化理解」に関する科目

2.3　アンケートの結果

3種類のアンケート（概要調査，指導法調査，専門的事項調査）における回答者の延べ数はそれぞれ36名，55名，57名であった。また大学数でみるとそれぞれ19校，48校，37校であり，大学数ベースの回収率はそれぞれ4.9%，12.4%，9.5%であった。

＜１＞概要調査

概要調査には，以下の8つの質問が含まれていた。質問文とあわせて，表11に回答結果を示す。

Q1:　英語科の指導法に関する科目以外に，英語教育に関する内容をより深く学べる科目（例：第二言語習得，評価論，Classroom Englishなど）を設定していますか？

Q2:　中等教員養成課程において，今年度，教科指導と教科専門の融合科目を設けていますか。

Q3:　英語教育に関することで，教育実習校との連携で工夫していることはありますか。

Q4:　「教育実習の事前事後の指導」の授業において，英語教育や英語に関する専門的事項についての内容を扱っていますか？

Q5:　「教職実践演習」の授業において，英語教育や英語に関する専門的事項についての内容を扱っていますか？

Q6:　教職課程の特定の科目の履修または単位取得の要件として，英語資格試験のスコアの取得等の条件を設定していますか。（例：英検準1級取得，TOEIC L&Rテスト730点以上取得，資格試験の得点を成績評価の一部に組み込む，など）

Q7:　教育実習の履修登録や実習参加の要件として，英語資格試験のスコアの取得等の条件を設定していますか。（例：英検準1級取得，TOEIC L&Rテスト730点以上取得，資格試験の得点を成績評価の一部に組み込む，など）

Q8:　中高（英語）教員免許取得を目指している学生の英語力向上のために，何か大学として特別な取り組みをしていらっしゃいますか。

各質問に対する回答の度数を表11に示す。

表11　概要調査における回答の度数分布

（N = 36）

	Q1		Q2		Q3		Q4	
はい	21	（58.3）	4	（25.0）	10	（27.8）	19	（52.8）
いいえ	15	（41.7）	21	（58.3）	26	（72.2）	17	（47.2）
わからない	—		11	（30.6）*	—		—	
	Q5		Q6		Q7		Q8	
はい	24	（66.7）	24	（30.6）	11	（30.6）	19	（52.8）
いいえ	12	（33.3）	12	（69.4）	25	（69.4）	17	（47.2）
わからない	—		—		—	—	—	—

注：（ ）内の数値は割合（%，小数点以下第二位を四捨五入）
　　*「わからない」の選択肢はこの質問のみ

各質問に「はい」と回答した場合には，具体的な内容も記述してもらった。その内容も含めて，以降では各質問の回答結果を概観する。

(1) Q1 英語教育に関する内容をより深く学べる科目について

回答者のうち，英語科の指導法に関する科目以外に，「英語教育に関する内容をより深く学べる科目を設定している」と回答したのは58％で，具体的には，英文法，第二言語習得，メディア英語，英会話，英作文，英文学，異文化コミュニケーション，心理言語学，社会言語学といった内容を扱う科目が挙げられた。また，教育学部のカリキュラムとして，「英語科の指導法」に関する科目に加えて，さらに英語教育について学ぶための独自の科目が複数用意されている大学もあった。

(2) Q2 教科指導と教科専門の融合科目について

約9割の回答者が，融合科目を設定していない，あるいは設定の有無は不明と回答した。融合科目を設定しているとの回答においては，融合科目の具体例として，「教科専門の知識を活かして教材開発や教材研究を行い，模擬授業を実施する」という授業や，「毎回異なる文法事項を題材として取り上げ，提示方法と言語活動について演習を行う」という授業の例が挙げられた。

(3) Q3 教育実習校との連携について

回答者のうち28％が教育実習校（以下，実習校）との連携で工夫していると回答した。工夫の具体的な内容については，学生がボランティアとして実習校に出向く，実習校で開催される公開授業などに参加する，実習校の教員を大学の授業に講師として招く，実習校との事前説明会を開催する，などが挙げられた。また，カリキュラム上の工夫として，2年次に実習校で観察実習をさせたうえで，3年次に本実習を実施している大学があった。

(4) Q4「教育実習の事前事後の指導」の授業における，英語教育や英語に関する専門的事項の扱い

回答者のうち53％が事前事後指導の授業で英語教育や英語に関する専門的事項を扱っていると回答した。時間数については大学による違いが大きく，最も少ない大学では1時間（回），最も多い大学では15時間（回）であった。また，内容については「指導案作成と模擬授業」という回答がほとんどで，ごくわずかであるが「授業参観」や「実習校の教員による講義」を行うという回答もあった。

(5) Q5「教職実践演習」の授業における，英語教育や英語に関する専門的事項についての扱い

回答者のうち67％が教職実践演習の授業で英語教育や英語に関する専門的事項を扱うと回答した。時間数については，最も少ない大学では1時間であり，3 ～ 5時間（回）程度，7 ～ 10時間（回）程度という大学が複数あり，最も多い大学では15時間（回）であった。内容については教育実習の振り返りや模擬授業，授業参観などが含まれる。

(6) Q6 教職課程の特定の科目の履修または単位取得の要件

この質問に「はい」と回答した大学は2割程度であった。具体的な要件については，英検2級，TOEIC 500点～ 630点以上という大学もあれば, IELTS 5.5以上（あるいはTOEIC 700点以上, TOEFL iBT 70以上，英検準1級以上）といった高めの基準を設けている大学もあった。

(7) Q7 教育実習の履修登録や実習参加の要件

この質問に「はい」と回答した大学は3割程度であった。具体的な要件については，英検2級（あるいはTOEIC 500点）以上という回答がほとんどであった。

(8) Q8 学生の英語力向上のための取り組み

学生の英語力向上のために大学として何らかの取り組みをしていると答えた割合は約50%で，具体的な内容としては，教員採用試験対策プログラムを挙げている大学が多かった。ほかには，英語資格試験の対策講座の開設やe-learningの環境整備，英語話者が常駐する空間設定とその利用の推奨，日本語禁止で英語のみで過ごすIntensive Courseの受講の推奨，海外留学の推奨などが挙げられていた。

＜２＞ 指導法調査

本アンケートの冒頭には以下の3つの質問が含まれていた。

Q1:　限られた授業時間の中でコアカリキュラムの学習項目を網羅するために工夫していることはありますか？（例：扱い方に軽重をつけている）
Q2:　複数の教員で同一科目の授業を担当する場合，担当者間の連携を図っていますか。
Q3:　大人数のクラス（50名程度以上）での指導方法，宿題あるいは授業時間外で取り組む課題，評価などで工夫されていることはありますか。

表12　英語科の指導法調査における回答の度数分布

（N = 55）

	Q1		Q2		Q3	
はい	34	(66.7)	18	(32.7)	6	(10.9)
いいえ	21	(33.3)	4	(7.3)	3	(5.45)
該当なし	—		33	(60.0) *	46	(83.6) *

注：( ) 内の数値は割合（%，小数点以下第二位を四捨五入）
*「該当なし」の選択肢はこの質問のみ

各質問に「はい」と回答した場合には，具体的な内容も記述してもらった。その内容も含めて，以降では各質問の回答結果を概観する。

(1) コアカリキュラムの学習項目を網羅するための工夫

約4割の回答者が何らかの工夫をしていると回答した。具体的な内容としては，学習項目ごとに軽重

（強弱）をつけて時間配分をする，事前にレポート課題などを課し，授業中にはそれをもとに討議するといった反転授業をする，複数の項目を結びつけて一度に教える（例：領域の指導法と評価法），といった工夫が挙げられた。

(2) 複数の教員で同一科目の授業を担当する場合の，担当者間の連携

34%の回答者が担当者間で連携するための工夫をしていると回答した。具体的には，授業で扱う内容が科目間で重複しすぎないように担当者間で相談する，共通テキスト・シラバスを用いる，授業の進捗をお互いに報告し合う，授業で使用するハンドアウトなどの教材を共有する，といった工夫が挙げられた。

さらに，英語科教育法に関する工夫として，受講生を2グループに分け，ある曜日には教授法を，別の曜日には授業実践というように，モジュールを分けて展開するといった方法や，講義を行う際は非常勤講師と専任教員がティーム・ティーチングで担当し，模擬授業に関する内容を扱う際はクラスを分割してそれぞれの教員が少人数指導をするといった方法を取り入れている大学もあった。

(3) 大人数のクラス（50名程度以上）での工夫

今回の調査の回答者の中で大人数クラスを担当しているのは13%程度にとどまった。授業中の工夫としては，学生が発言するときにマイクを使わせて教室内に声が届くようにする，ペアやグループで意見交換する時間を設ける，といったことが挙げられた。

また，毎授業後に学生による振り返りを実施し，そこで出た質問や意見に次の時間に答えるといった方法や，学生に何か発表させる際には教室を複数用意し，少人数グループに分割してプレゼンテーションを行うといった方法を取り入れているという回答もあった。

(4) 中等教員養成コアカリキュラムの「英語科の指導法（8単位程度を想定）」に含まれる項目について，授業実施上・指導上の「工夫」及び「問題点あるいは課題」

これ以降，コアカリキュラムの「英語科の指導法」に含まれる5つの学習内容について，授業の実施・運営において工夫していることと，授業実施・運営における問題点あるいは課題を自由記述式により回答してもらった結果を，「課題・問題点」と「工夫」に分類して示した上で，考察を加える。

①「学習内容1．カリキュラム／シラバス」の各学習項目について，授業の実施・運営において工夫していること，授業の実施・運営における問題点あるいは課題

コアカリキュラムの学習項目
(1) 学習指導要領
(2) 教科用図書
(3) 目標設定・指導計画
(4) 小・中・高等学校の連携

表13 「学習内容１．カリキュラム／シラバス」に関する課題・問題点及び工夫

課題・問題点	工夫
（1）学習指導要領	
・小学校の学習指導要領まで扱う時間がない ・指導要領の内容が濃いため，すべてを網羅できない ・重要ポイントを要領よく説明するのが難しい	・事前学習として学習指導要領を熟読させることで，授業の効率化を図る ・指導要領の歴史や主たる改訂の要点や流れ，評価の観点の具体化を解説，またその趣旨を踏まえた授業実践をビデオで紹介している ・実際の教科書を用いて指導案を執筆させる中で指導している
（2）教科用図書	
・高等学校用の教科書は種類が多く選定に迷う ・全容の提示や説明が難しい	・戦後から今日まで刊行された英語教科書の分析をさせている ・検定教科書の編集員を務めている教員が授業を担当する ・3社以上の教科書を使用して模擬授業を行う
（3）目標設定・指導計画	
・十分な時間の確保が難しい	・学生間で指導案を検討させる機会を作ることで，学生の判断力を高める ・指導案を作成して模擬授業を実施し，その後検討会を行う ・学習到達目標を言語活動として具体化して設定し，ゴールからのバックワードデザインで中，長期的な指導計画や授業過程を構築するよう指導する
（4）小・中・高等学校の連携	
・小中高の連携について具体的な議論を展開した文献が見つからない ・小中高の連携について何をテーマにすればよいかわからない ・学生に紹介できる具体的な取り組み事例を探す時間的余裕がない。モデルケースが収集されたWebsiteがあるとよい	・小学校英語の授業履修を奨励 ・小中高の授業ビデオ観察と分析を通して，校種間の違いを意識させる ・小中の指導経験をもつ教員が担当し，外部講師による講義の機会も設ける ・各校種の授業見学の実施
その他	
・受講生の志望校種がバラバラなので，関心や英語力もばらつく ・理解にとどまり，知識を授業づくりに活用する力を身につけさせる時間がない	

注：表内の記載は，一部回答原文の内容を簡略化して示している

課題として挙がっている主な点としては，(1) 学習指導要領のポイントをどのように理解させるか，(2) 目標設定や指導計画の作成方法に関する扱い方，(3) 小・中・高等学校の連携についての具体的な指導方法，などがある。

(1) については，予習課題として学習指導要領を熟読させた中からポイントを絞って解説することのほかに，学習指導要領に沿って実践されている中・高等学校の授業の映像を用いて具体的なイメージを持たせたり，学習指導要領の目標やねらいに即した指導案を書かせたりするなどが報告されている。文献をもとにした概念理解を，実際の教室での指導実践と結びつけていくことで，学習指導要領に書かれた指導目標の理解を促進することが可能になるだろう。(2) についても，指導目標を設定して，その目標を達成するための指導計画の作り方の理解を深めるためには，学生自身が指導案を作成し，その指導案をもとに言語活動を含む模擬授業を実施し，その後の授業での検討を行うことが不可欠であると考えられる。(3) の校種間の連携に関しても，大学での授業担当者の専門分野によっては，十分に指導を行えない

という問題点がある。文献による理解だけでは限界もあり，小・中・高等学校の授業見学を実施することが理想ではあるが，学生が授業見学に行く時間を設定することは困難であるため，映像による授業観察と分析を通して，連携の在り方を学生自身に実感させることが提案されている。それぞれの校種で使用されている教科用図書（教科書）からの学びとともに，こうした授業の実践例から連携の在り方について学生自身の認識を高めていくことが必要であろう。

全体を通して，授業作りの知識の獲得から活用までの指導時間の確保が難しいという点が指摘されているが，授業映像の視聴を事前課題として課し，授業時間には学生同士のディスカッションを中心とするなどの工夫も必要になってくるであろう。

②「学習内容2．生徒の資質・能力を高める指導」の各学習項目について，授業の実施・運営において工夫していること，授業の実施・運営における問題点あるいは課題

コアカリキュラムの学習項目
(1)　聞くことの指導
(2)　読むことの指導
(3)　話すこと（やり取り・発表）の指導
(4)　書くことの指導
(5)　領域統合型の言語活動の指導
(6)　英語の音声的な特徴に関する指導
(7)　文字に関する指導
(8)　語彙・表現に関する指導]
(9)　文法に関する指導
(10) 異文化理解に関する指導
(11) 教材研究・ICT等の活用
(12) 英語でのインタラクション
(13) ALT等とのティーム・ティーチング
(14) 生徒の特性や習熟度に応じた指導

表14　「学習内容2．生徒の資質・能力を高める指導」に関する課題・問題点及び工夫

課題・問題点	工夫
(1)～(9)	
・学生が経験してきた指導法に縛られている ・指導内容が多く，深い所まで指導できない（ALTとのTTまで扱えない） ・学生の基礎学力の不足 ・領域統合型の言語活動の指導については，教科書教材のタスク化が難しい ・文法項目のすべては網羅できない	・学生自身がこれまでに受けてきた英語の授業を振り返る時間を設け，新たに授業で学ぶ指導法や活動と比較させながら学習を進める ・英語ゲームや授業中の活動や課題を，学生自身に企画させる ・実習校となる附属中学校の英語教諭，また，公立学校で指導的立場にあるベテラン英語教師からご指導をいただく <5領域の指導> ・検定教科書を使った授業を想定し，50分の授業の中でどのスキルやどの知識をどの局面に織り込んで教えるかという具体的な方法が身につくように指導している ・日本語の使用を一切禁止する「英語集中演習」という授業を通して，学生自身に英語を使いながら学ぶ体験をさせることで，指導法の学びにつなげることを目指している ・英語の音声的な特徴に関する指導については，「発音」の授業で，英語の音素の音声的特徴を理解し，聴解して耳を鍛え，さらに実際の練習や録音演習を通して身体的に定着させるような指導を行っている

	・映画を通じて，特徴的な英語表現を音声，文化的側面から指導する ・深い読みを促すための推論発問を考えさせる ・英語のミニディベートを体験させ，自分たちのパフォーマンスを録音し，活動後に大学の授業サイトにアップし，自らのパフォーマンスをモニターできるようにする <文法指導> ・教師として生徒を指導するための語法文法理解について取り上げて指導する ・検定教科書を用いた導入方法について，実演あるいはDVDで紹介したり，個別指導をしたり，学生同士で討議させたりする
（10）異文化理解に関する指導	
	・1年の学部科目で海外フィールドワークを経験しているため，それを踏まえた異文化理解の指導法を考えさせている ・外部講師の招聘
（11）教材研究・ICT等の活用	
・実践しながら学習させる時間がない ・ICTは地方自治体によって環境が異なるため，指導が難しい	・ICTは日進月歩のため，追いつけない ・指導者自身が授業中に積極的に活用する ・ICTの活用を模擬授業のテーマとしている
（12）英語でのインタラクション	
・学生の能力を高めきれない	・実際に教科書を用いた指導例を紹介することに加えて，個別指導，学生同士の討議，DVDの活用により指導の充実を図る
（13）ALT等とのティーム・ティーチング	
・ALTを大学の授業に招いて学生と交流させたいが，教育委員会の協力を得られず難しい ・職場でのALTの位置づけや個人の資質に差があるので，大学での指導が難しい	・ICTの活用を模擬授業のテーマとしている
（14）生徒の特性や習熟度に応じた指導	
・生徒が実際にいないので難しい ・習熟度に応じた指導を学生自身が経験していないので理解させることが難しい ・実際の生徒は多様なので，大学での授業で具体的な場面を想定しにくい	
その他	
	・英語科指導法Iは理論重視，英語科指導法IIは実践重視，のように科目によって扱う内容を分けている

注：表内の記載は，一部回答原文の内容を簡略化して示している

一番の課題と考えられるのは，指導項目が多岐にわたっているため，それぞれの項目を十分に扱う時間を確保できないということである。例えば，ICTの活用やALTとのティーム・ティーチングなどの項目にまで時間が割けない，文法項目すべてを網羅することができないという事情もあると考えられる。ICTやALTの活用については，それ自体を模擬授業のテーマとして実施することや，指導者自身がICTを使って指導の様子を学生に学ばせることも提案されている。文法項目に関しても，模擬授業を学生に割り当てる際に，異なる文法項目の範囲を指定して言語活動を設定させる中で，模擬授業の指導と合わせて学生自身の文法力の向上の機会とすることも考えられるであろう。

また，学生自身が中学校や高等学校で受けてきた授業経験が限られていることもあり，目指すべき授業のイメージを捉えることができないという課題もある。これに対しては，学生自身の学習経験を振り

返る時間を設定することが提案されている。大学の英語科指導法担当教員から紹介された指導法や，映像で視聴する中・高等学校の授業における指導法と，学生自身の学習経験を比較することで，それぞれの指導方法のメリットやデメリットを考察し，より良い指導方法を考えることも可能になるであろう。

もう1つの大きな問題と考えられるのが，学生自身の英語運用能力不足による指導方法についての理解や実践の困難さである。英語力の不足のために，英語でインタラクションを行うことに困難を生じたり，言語活動を設定したりすることが難しいということが指摘されている。指導法の学びと同時に，学生自身が英語力を高めるための努力を行うことが求められるが，教員からの働きかけとして，学生自身が模擬授業の中で英語運用能力不足を実感する場面を設けたり，英語のミニディベートなどを体験させ，そのパフォーマンスの録画を学生が振り返り，再検討できるようにしたりすることで，指導力を支える英語運用能力向上への動機づけとすることも提案されている。

③「学習内容3．授業づくり」の各学習項目について，授業の実施・運営において工夫していること，授業の実施・運営における問題点あるいは課題

コアカリキュラムの学習項目
(1) 学習到達目標に基づく授業の組み立て
(2) 学習指導案の作成

表15 「学習内容３．授業づくり」に関する課題・問題点及び工夫

課題・問題点	工夫
・到達度のばらつきが大きい ・授業時間が足りないため，複数回指導案を書かせることができないし，模擬授業の時間が十分に取れない ・指導に時間がかかるので，どうしても課外の時間を使うようになり，授業担当者の負担が大きい ・「(1) 学習到達目標に基づく授業の組み立て」は重要ではあるが，大学生の間には達成できないのではないかと考える（実際に中学で3年間指導した後に，ようやくイメージが湧くのではないか） ・学校現場での授業体験の機会が少ない ・提出された学習指導案にどのタイミングでどの程度添削を施すべきか悩む ・オムニバス形式の授業の場合，他の教員がどのような指導案のテンプレートを使って指導しているかについて情報共有が十分でないため，学科で統一する必要があるように感じている	・様々な授業案を比較分析させる ・各学生が出した指導案を全員で検討し，討議し，修正して再提出させる ・英語科教育法関連のテキストに掲載されている指導案をまずは真似をして作成させ，それに基づいて模擬授業を行う（50分授業を2人で分けて担当する）。その後，今度は1人で，中学校あるいは高校の検定教科書から1レッスン選んで指導案を作成し，50分間模擬授業を行う ・指導案を英語と日本語で書く機会を与える ・標準的な学校で検定教科書に基づいて教える際の指導案の「ひな型」を示し，それを利用して模擬授業のための指導案を作成させる。模擬授業終了後に指導案を修正させる。修正後の指導案をデジタル化してクラス内でシェアする モデルとなる指導案を提示して，それに沿って作成させる（1回目は日本語で，2回目は英語で作成させる）

注：表内の記載は，一部回答原文の内容を簡略化して示している

問題点としては，指導案に関しては作成と添削に時間がかかることが挙げられている。これらに対する工夫として，「ひな型」を与え真似をさせる，さまざまな指導案を比較分析させる，指導案をデジタル化してクラス内でシェアすることが提案されている。

到達目標についての工夫に対して記述がほとんど見られなかったが，この点については，学習指導要領，目標設定・指導計画を扱う項目の際に関連して扱うことができる。例えば，目標が単元レベルで単元指導計画や指導案でどう表されるかを具体的に示し，学生にイメージを持たせることが考えられる。また指導案の添削については，教員が全てを添削するのでなく，学生が作成した一例を示し，クラス全

体で到達目標とそれを達成するための指導案になっているかを検討し，その後各学生が自分の設定した到達目標と指導案を修正するというような工夫が考えられる。

④「学習内容4．学習評価」の各学習項目について，授業の実施・運営において工夫していること，授業の実施・運営における問題点あるいは課題

コアカリキュラムの学習項目
(1) 観点別学習状況の評価，評価規準の設定，評定への総括
(2) 言語能力の測定と評価（パフォーマンス評価等を含む）

表16 「学習内容４．学習評価」に関する課題・問題点及び工夫

課題・問題点	工夫
・評価規準の設定や評価が難しく，指導に苦慮している ・どこまで指導すべきか苦慮している ・自分で工夫する能力が問われるため，学生の到達度がバラバラ ・授業時間が少ないため，評価の指導まで手がまわらない ・模擬授業で生徒役が少ないため，十分に評価できない ・定期テストの作り方は，体験的，実習的な授業ができない ・実際の中高生のパフォーマンスが見えないので，評価技術の指導は難しい	・実際に中学校で使用した観点別評価の例など，具体例を示す ・現役教師を外部講師として招き，講義してもらう ・実際に指導案を作成する中で，指導目標と活動と評価がつながるように意識させている ・授業内で発音，リーディングテストなど，様々なテストを個人又はグループで作成し，発表・議論させている ・多肢選択式テストにおける不適切な選択肢の修正をさせる ・言語テストを取り上げて，良問及び悪問を指導する ・読みと書きのテスト問題作成演習に取り組ませる ・「教科教育法」のまとめとなる「教科教育法Ⅳ」では，学習評価を重点的に取り扱っており，定期考査の作成やパフォーマンステストの方法，CAN-DOの作成とそれに基づく評価などを理論的・実践的にしている ・パブリックスピーチの授業で，学生が実際に即席スピーチ，準備したスピーチなどを順次行い，それらをすべてビデオ録画し，DVDに焼いて学生に渡し，自分自身で映像を見て振り返りレポートを書く機会を与えている

注：表内の記載は，一部回答原文の内容を簡略化して示している

問題点としては，評価に関して時間を割くことができない，パフォーマンス評価についてイメージが持てないなどがある。一方，工夫としては，「授業づくりの項目と連動させ，実際に指導案を作成する中で，指導目標と活動と評価がつながるようにする」，「具体的なテスト問題を見て，良問，悪問を考える」ことなどが提案されていた。

学習評価だけを単独で扱うのではなく，授業作りの項目と連動させることが効率的である。例えば，指導と評価は一体であるので，授業づくりの項目で指導した後，それをどう評価するかを考えさせることができる。また，授業観察の際に，現場の教師はどのように評価しているかも観察させ，それを模擬授業などでも生かすように指導するとよいのではないだろうか。

⑤「学習内容5．第二言語習得」の学習項目について，授業の実施・運営において工夫していること，授業の実施・運営における問題点あるいは課題

コアカリキュラムの学習項目
(1) 第二言語習得に関する知識とその活用

表17 「学習内容５．第二言語習得」に関する課題・問題点及び工夫

課題・問題点	工夫
・学生が理論の重要性を理解できない ・理論と実践の乖離が起きやすい ・「聞くだけで英語がぺらぺら」などの市販の教材と，第二言語習得研究の成果を活かした学びとの違いを指導することは，理論上は理解できても，実践となると難しい ・日本にいるので現実性に欠ける ・第二言語習得に関する知識を授業づくりに活かせる力を身につけさせる時間がない ・詳細まで扱う時間がない ・内容が広すぎて，どこまで教えるべきか迷う ・第二言語習得を専門とする授業担当者がいない ・第二言語習得に関する洋書をテキストとして使用する場合，英語力の面で読みこなすのが厳しい学生もいる ・外国人教員が主にSLAに関する科目を担当しているが日本人のSLAではないのが気になっている	・第二言語習得に関する知識の習得にあたり，チーム基盤型学習（Team-Based Learning: TBL）を取り入れて授業を実施している（チーム基盤型学習とは，学生がチーム内でメンバーとディスカッションを行うことと，チーム同士でディスカッションを重ねることが中心となる学習方法） ・具体物，具体例の提示や，体験型授業を心がけている ・第一言語習得の講義担当教員と連携 ・母語習得と外国語習得における相違点を対比している ・第二言語習得理論と過去の教授法を対比させ，長所・短所を論じさせている ・第二言語習得理論に依拠している指導法や技術については，明示的に解説する ・外国語習得の基礎知識を，応用言語学の理論に基づいて説明する ・学生自身のこれまでの英語学習（あるいは英語以外の外国語学習）と関連づさせて理論の理解を促す ・言語習得論の知見を教室指導にどう活かすか，グループ討議する ・近年の第二言語習得研究を取り上げて紹介する ・第二言語習得関連の文献で取り上げられている授業例を，実演（模擬授業）させる ・専門科目で対応する（概論で扱う・他授業との関連性を意識させる，など）

注：表内の記載は，一部回答原文の内容を簡略化して示している

問題点は，(1) 対象となる範囲が広い，(2) 教職課程に専門の教員が配置されていない，(3) 理論の重要性を（学生が）理解できない，などに集約される。これらに対する工夫として，(A) 教室への応用に的を絞り限定的に取り扱う，(B) 教職課程科目以外に設定された英語教育の専門科目との連携を図る，(C) 学習者のこれまでの英語（あるいは英語以外の言語の）学習と関連づけて理解を促す，(D) 知識の伝授のみにならないようグループ討議などを取り入れる，などが提案されている。実践と理論の乖離を起こさないよう「教室場面に焦点を当てたSLA」(Classroom SLA) を中心に取り扱い，その他の部分は教職課程科目以外に設定された英語教育の専門科目で扱うという考え方は，限られた時間とリソースの有効利用として一考に値する。また，とかく知識の伝達になりがちな領域ではあるが，事例（例えば誤りの訂正など）をあげて議論させ，その答えとして理論や実証研究がどのような情報を提供しているかを確認させるような教え方は，動機づけの面でも，実践との関連づけの面でも有効と考えられる。

コアカリキュラムでは，具体的な学習項目の提示に加えて，それらの項目を学習する過程において，教員の講義にとどまることなく次の学習形態を必ず盛り込むことが推奨されている。

①授業観察：授業映像の視聴や授業の参観
②授業体験：授業担当教員による実演を生徒の立場で体験
③模擬授業：1単位時間（50分）の授業或いは特定の言語活動を取り出した模擬授業
手順例：計画→準備→実施→振り返り→改善

そこで本調査では，これらの3つの項目について実施上の工夫について自由記述による回答を得た。以降，その結果を報告する。

⑥授業観察

◆回数

今回の調査協力者からの回答では，学期に1～2回程度が多く，多い大学では年に7回程度という回答もあった。

◆実施方法

実施方法としては，以下のものが挙げられた。

・授業映像を視聴させる
・現職教員を大学に招いて学生を対象に模擬授業をしてもらう
・近隣の学校や大学附属校に出向いて授業見学をさせる
・近隣の学校などで行われる公開授業研究会への参加を促す
・授業中に授業映像を視聴する時間が取れないため，授業外の課題として課したり（例：英語教育関連学会の研究大会や公開授業に参加させてレポートを提出させる），授業映像の視聴を学生に奨励することで補っている

さらに，ある大学では，年に1度，学科主催の英語教育研究大会を開催し，卒業生の現職教員を招いてのビデオによる授業研究と協議や，外部講師による講演を行う取り組みをしているとの回答があった。このようにカリキュラム外に授業観察の機会を設けることで，授業時間の不足を補う工夫も選択肢の1つとして考えられる。

⑦授業体験

◆回数

今回の調査協力からの回答では，学期に数回程度が多く，多い大学では2回に1回，毎回という回答もあった。

◆実施方法

学期に1～2回という場合は，授業担当者が50分の授業を通して実演するケースが多い。それよりも多く実施する場合は，1回あたり20分程度，授業中に行う個々の活動（例：Warm Up, Oral Introduction, 音読指導など）を体験させるケースが多い。また, DVD教材の視聴で代用する場合もある。年に3～4回，実際の授業を見学する機会を設けた上で，授業中に授業担当者が50分の授業を実演しているとの回答もあった。

⑧模擬授業

◆回数

模擬授業の回数については，以下のような回答があった。

a. 学期に1 ～ 2回

b. 学期に3 ～ 5回

c. 毎授業

d. 学生1人あたり学期に2回

e. 学生1人あたり学期に5回（3年次前期に集中して実施）

学期に1 ～ 2回程度という回答がもっとも多かった。また，1回あたりの模擬授業の長さについては，10 ～ 20分程度で授業の一部分の模擬授業を行うという回答がもっとも多く，長い場合は50分の模擬授業を実施しているという回答もあった。

◆実施方法

模擬授業の実施方法については，以下のような回答があった。

a. 1人で7分

b. 各学習項目について，学生全員が10分～ 15分

c. 1人で20分～ 30分

d. 1人で40分

e. 2人1組で15 ～ 20分

f. 2人1組で30分

g. 3 ～ 4人グループで20 ～ 40分

h. 3 ～ 5人グループで50分

i. 指導法別模擬授業と言語活動別模擬授業をTT形式で実施

模擬授業を行う科目が複数の学期にまたがって開講されている場合は，例えば, 3年次は3 ～ 4人グループで一時間分（例えば，50分），4年次は個人で15分，のように段階を踏んで進めている大学もあった。さらに，前期と後期の授業のつながりを意識して，前期には個人で文法事項導入のマイクロティーチングを行い，後期にグループで一時間分（例えば，50分）の模擬授業を実施している大学もあった。

模擬授業を行う科目が複数ある場合は，例えば，ある科目では50分の模擬授業を行い，別の科目では，授業内のパート（帯活動，文法指導，語彙指導，読解指導，定着のための練習の指導，発信の指導など）に分けて，十分に指導ができるまで全員に練習をさせ，特色のある学校を想定した指導方法につても考えさせるなど，基本的な学校とは異なるバリエーションを取り扱うという進め方もある。

さらに，学生が模擬授業をする前にTA（Teaching Assistant）に相談したり，授業担当教員から指導を受けたりすることができるようにしている大学もあった。

◆模擬授業へのフィードバックをする際の工夫

模擬授業へのフィードバックの工夫としては，模擬授業映像の活用，ピア・フィードバック，授業者自身の振り返り，そして担当教員からのフィードバックなどがあった。それぞれについて，以下に例を挙げる。

＜模擬授業映像の活用＞

a. 模擬授業をビデオ撮影し，模擬授業終了後にそれを見直しながら討議する。

b. 模擬授業の映像をインターネット上に限定公開でアップロードし，学生がいつでもどこでも視聴できるようにしている。また，映像のアップロードを伝えるメールに授業担当者からの授業へのコメントを記載している。（※この授業映像のアップロードを学修支援課が代行してくれる大学もあり，これは授業担当教員の負担軽減につながっている。）

＜ピア・フィードバック＞

評価者：

a. クラスメート（模擬授業に生徒役として参加した学生全員，あるいはコメント担当の学生による評価）

b. 教育実習経験者の4年生による評価

評価方法：

a. 数値による評価（例：5段階評価）

b. コメント（口頭あるいは記述による）

フィードバックのタイミング：

a. 模擬授業直後にその場で口頭でコメントする

b. コメントシートに感想を記入し，授業者に渡すか授業担当者に提出する

c. 模擬授業終了後にグループに分かれ，模擬授業を担当した学生を囲んでディスカッションする

＜授業者自身の振り返り＞

a. 模擬授業終了後に授業ビデオを見直して反省点をレポートにまとめて提出する

b. 模擬授業の映像を見て，良かった点と改善できる点，今後の課題を自身でまとめて提出する。それに対して，授業担当教員がコメントを書いて返却する

c. クラスメートなどからもらったフィードバックと自身の反省をまとめて，授業担当教員に提出する

＜授業担当教員からのフィードバック＞

a. 模擬授業後にその場で口頭でフィードバックをする

b. 模擬授業のビデオを後日見直して，個別にフィードバックをする

c. 授業の振り返りのための個別面談を行う

d. 模擬授業の前に指導案を作成させる過程で，授業担当教員から指導する

＜３＞専門的事項調査

本アンケートの冒頭には以下の3つの質問が含まれていた。

Q1: 限られた授業時間の中でコアカリキュラムの学習項目を網羅するために工夫していることはありますか？（例：扱い方に軽重をつけている）

Q2: 複数の教員で同一科目の授業を担当する場合，担当者間の連携を図っていますか。

Q3: 大人数のクラス（50名程度以上）での指導方法，宿題あるいは授業時間外で取り組む課題，評価などで工夫されていることはありますか。

各質問に対する回答の度数を表18に示す。

表18　英語科の専門的事項調査における回答の度数分布

（N = 57）

	Q1		Q2		Q3	
はい	35	(61.4)	20	(35.1)	21	(36.8)
いいえ	22	(38.6)	5	(8.8)	3	(5.3)
該当なし	—		32	(56.6)	33	(57.9)

注：( ) 内の数値は割合（%，小数点以下第二位を四捨五入）
　　Q1には「該当なし」の選択肢なし

各質問に「はい」と回答した場合には，具体的な内容も記述してもらった。その内容も含めて，以降では各質問の回答結果を概観する。

(1) コアカリキュラムの学習項目を網羅するための工夫

限られた授業時間の中でコアカリキュラムのすべての項目を扱うための工夫として，以下のような内容が回答記述文中に見られた。

1. 扱いに軽重をつけたり，コアカリキュラムの学習項目ごとの内容を精選したりする
2. 英語学などの専門的事項を扱う授業では日本語のテキストを使うことで授業内容を容易に理解できるようにする
3. 事前に予習課題を課したり，自主学習の課題を出すなどして，授業外で学ばせる内容と，授業中に扱う内容に分けている
4. 質問を出欠カードに記入させ，次の授業でまとめて回答させる
5. 綿密な授業計画を立てて，できる限りシラバス通りに授業を進めるように努力する
6. 他の英語科教員と分担して（お互いの授業を合わせて）学習項目を網羅するようにしている

(2) 複数の教員で同一科目の授業を担当する場合の，担当者間の連携

今回得られた回答では，コーディネーターを配置する，共通シラバスを作成する，授業内容（評価方法，課題など含む）や学生状況についてメールなどで情報交換・意見交換する，といった工夫が挙げられた。一方，特にふだんは連携せず，「期末試験を行う」という点のみ統一しているという大学もあった。

(3) 大人数のクラス（50名程度以上）での工夫

授業中の工夫として，次のような内容が挙げられた。

1. 教員の講義後，グループ討議を行い，最終的にはクラス全体で討議する
2. 毎授業後にコメント用紙に感想や質問を記入させる
3. 授業中に課題に取り組ませる
4. グループワークと講義の時間を明確に分け，私語で講義が聞こえないことを防ぐ
5. 一方的な講義にならぬよう，学生の討議，発表の場を設ける
6. ゲストスピーカーを授業に招き，授業時間内に質問を収集し，それに答えてもらう

一方，授業外の工夫としては，次のような内容が挙げられた。

1. 反転授業を行う
2. 予習課題を課し事前に提出させる
3. 授業外課題として，講義内容に関する論述を課す

4. 授業内容の理解に役立つと思われる課題を選んで提出をさせる
5. 教育支援サービス（例：manaba）使用し，小テストを行うことで学習の定着化を図る
6. LMS（学習プラットフォーム）を使用し，課題や活動に取り組ませる
7. 教員のオフィスアワーを充実させる

（4）中等教員養成コアカリキュラムの「英語科の専門的事項」に含まれる項目について，授業実施上・指導上の「工夫」及び「問題点あるいは課題」

これ以降，コアカリキュラムの「英語科の専門的事項」に含まれる5つの学習内容について，授業の実施・運営において工夫していることと，授業実施・運営における問題点あるいは課題を自由記述式により回答してもらった結果を，「課題・問題点」と「工夫」に分類して示した上で，考察を加える。

①「英語コミュニケーション」に関する科目

「英語コミュニケーション」の学習項目
（1）聞くこと
（2）話すこと（やり取り・発表）
（3）読むこと
（4）書くこと
（5）領域統合型の言語活動

表19　「英語コミュニケーション」に関する課題・問題点及び工夫

課題・問題点	工夫
・学生のモチベーション ・4技能すべてを扱うことの難しさ（教えることが多すぎる） ・大量の課題を返却する際に，1回で終わらないこともある。細やかな指導の難しさ ・学生の英語力の差 ・学力差があり，習熟度別にしているが，学力の低い学生への手厚い指導が必要になる ・受講生によって理解や作業の進度に差があるため，課題の時間配分に苦慮 ・短い時間で精読の方法を身につけることが難しい ・履修人数の多さ	・授業外の課題としてTEDを毎日1時間視聴させ，要約などを書かせ，次の授業で提出 ・提出された課題にきちんとコメントをし，やりっぱなしにしない ・ペアによる討議（内容に関するペア・グループ討議で発信力を高める） ・毎時間即席のスピーチ練習 ・全員に話す機会を設けることで英語使用に慣れさせる（英語に討議，英作文） ・受講生の自発的な表現を尊重し，自力で改善できるように指導 ・英文の精読，辞書の使用法の指導 ・英語圏の社会，歴史，宗教を中心に言語の裏にある幅広い文化を習得させる ・ニュースや映画を用い，なるべく自然な速さの英語を扱うようにしている ・学生自身が中，高に経験しなかった領域統合型の授業を体験させている ・教科書本文を用いた，領域統合型の言語活動の方法を指導 ・EFLの授業と，Basic Academic English Skillsのクラスを設けている

注：表内の記載は，一部回答原文の内容を簡略化して示している

課題として挙がっている主な点としては（1）学生の英語力の差への対応，（2）履修者の多さや授業時間の制約への対応，などがある。

（1）については，例えば授業中に扱う教材のバリエーションを持たせることで，たとえ毎回の授業で

すべての学生のレベルに合う教材を扱うことはできなかったとしても，15回分の授業が終わった段階で，それぞれの学生が自分のレベルに見合った成長を実感することができるかもしれない。また，ペアやグループの作り方を工夫することで学生同士の間での学びあいの機会を確保し，相互の成長を促すこともできる。

（2）については，授業中に学生が英語を使う時間を最大限に増やす努力はもちろんのこと，英語力を伸ばすには授業時間だけでは到底足りないことを学生に自覚させ，例えば動画視聴などの課題を出すことで，授業外でも継続的に英語に触れる機会を設け，さらにはそれが自学自習の習慣形成につながるように促していく必要がある。

②「英語学」に関する科目

「英語学」の学習項目
（1）英語の音声の仕組み
（2）英文法
（3）英語の歴史的変遷，国際共通語としての英語

表20　「英語学」に関する課題・問題点及び工夫

課題・問題点	工夫
（音声系） ・実際に発音をさせるのが良いが，大人数の講義だと演習を取り入れるのが難しい ・音声学を専門とする教員不足 ・そのときは出来ても，身についていないせいか，学んだ内容を忘れている	（音声系） ・世界の英語には様々なバリエーションがあること，日本語との対比を意識させている ・音声の仕組みを声帯の動きを目視と触診で確認することで理解を促している ・映画を用いて書き取りを行わせ，音声記号で書く練習，音素，音節に分ける練習 ・かるたを使ったフォニックスの指導 ・意味と構造を生徒に伝える教師の模範音声能力の育成や，語と語の連結による音変化への習熟と歌やチャンツを用いた活動をしている ・各音素の授業で理論を学んだ後，それらが含まれる真正の素材をモデルに各自が15分間練習し，その後一斉に録音した音声ファイルを教員が持ち帰り，フィードバックする
（文法系） ・中高で「英文法は難しい，無味乾燥なルールの暗記」といった印象を刷り込まれた学生が多く，英語学を敬遠する者が多い。相対的に学生の語法文法理解は不十分 ・設備制限で，ICTを思うように活用できない	（文法系） ・学習者に文法を説明できるまでを目標としている（単語の成り立ち，文構造の理解） ・中学校の教科書から例文を取り出す ・英文法の面白さを体感できる活動を取り入れる ・教師として生徒を指導するための専門的な語法文法理解について取り上げるとともに，Michael Swanなどの信頼できる文献を紹介し，活用するよう指導 ・専門的な内容になりすぎないようにしている ・グループ活動などと組み合わせ，模擬授業を経験させている。指導要領と連動させている ・文構造，品詞，内容語や機能語の区別を考えさせる

（歴史系） ・教職課程を履修しない学生が大多数なので，興味関心にも答えなければならなく，扱うトピックの取捨選択が難しい ・EFLとしての英語を考えさせ，ネイティブ英語について批判的考察を実践する ・時間が足りず，内容が薄くなる ・課題の答えを，ネットで検索し，そのまま提出する癖が身についている	（歴史系） ・ビデオを見せ，歴史的流れを説明している ・英語の歴史を通して現在の英語を説明できるような知識をつけさせている ・歴史的変遷や語源などを現代英語と対比させている
（その他） ・可能な限り討議を取り込むようにはしているが，分量のこともあり中々時間を割けない ・教えることが多すぎて，授業時数が足りない ・概論のため，1つの分野を深く掘り下げるのではなく，広い分野の入門的な内容を関連づけるのに苦慮 ・学生の英語力の低下傾向で，そもそも発音や文法に関する事項の指導が難しい。また，文構造など抽象的内容が以前と比べ理解できないなどの問題があり，授業自体の維持が難しい	（その他） ・可能な限り英語教育に関連づけをしている ・受講生が日ごろ疑問に感じている点と各項目を関連づけて，英語の特徴を理解させる ・ただ知識を学ぶのみならず，スキルとして身につくような活動，時間を設ける

注：表内の記載は，一部回答原文の内容を簡略化して示している。

音声系の課題として，学生に正しい発音を身につけさせることの難しさが挙げられている。これに対しては，「音の違いや調音法の違いなどを映像や図解を通して理解させる」「正しい音をたくさん聞かせる」「学生が発音した音声を録音させ，それに対してフィードバックを与える」といった方法を組み合わせることが工夫として考えられる。

文法系については，学生の「文法は難しい」という先入観を打ち消し，英語を教える際に文法知識を活用することができるようにするために，実際に中学校や高等学校で用いられている教科書本文を例文として利用することで，英語学の授業と中高における英語の指導を結びつけるイメージを持ってもらえるようにしたり，教員になってからも引き続き参照できる優れた文献とその使い方を指導することで，学生自身が自らも学びを深めていくことができるようにしたりする工夫が考えられる。

英語史を取り扱う際には，視聴覚教材を活用したり，歴史的変遷や語源を参照しながら現代英語を向き合わせることで，学生の興味を引きつけるとともに英語史を学ぶことの意義を実感させたい。また，世界では外国語として様々なバリエーションの英語が使われている現状に目を向けさせることで，学生たちに自分が英語を教える際に何をどこまで生徒に求めるかを考えさせたい。

③「英語文学」に関する科目

「英語文学」の学習項目
（1）文学作品における英語表現
（2）文学作品から見る多様な文化
（3）英語で書かれた代表的な文学

表21　「英語文学」に関する課題・問題点及び工夫

課題・問題点	工夫
・優れた作品は難解になりがちで，学生が本当に理解できるか不明 ・学生は精読の訓練をほとんど受けたことがないので，基本的な「読み」の訓練に時間をとられる ・代表的な作品を読めるほどの英語力や時間的余裕がない ・作品選びが難しい，担当者の力量不足，文化理解として文学を扱い，語学力を高めるために文学を扱う，両方の目的に資する素材選択が難しい ・英語で書かれた代表的な文学についての扱いが本学では弱い ・18世紀以前の文学を扱う際，学生は古い時代の英語に慣れていないので，現代英語とのギャップを埋めるのに苦労する ・なるべく標準的な英語が使われる作品を素材とするようにしている ・短い時間で多くの作品を取り上げるため，知識の定着を図るのに苦労するが，演習のように取り上げる作品を限定すると学習内容も限られるので，そのバランスをとるのに苦労	・演習科目にてできるだけ異なる時代や地域の様々な作品を読み，原文や翻訳も参照しつつ，作品中の様々な表現，レトリック，象徴などについて学習できるように工夫 ・オリジナルとretold版の英文を比較させ，パラフレーズやretold，要約の仕方を学ぶ ・朗読の音声教材を活用し，基本的リズムに触れさせている ・文学を読む事と，英文の意味を単純に理解することの違いがわかるように指導 ・物語の抜粋を精読して，語彙や語法など語学的な力と文脈から意味を理解する文学的力のそれぞれを意識しながら英文を読むようにしている ・作品解釈を通して文化的背景に関心が向くようにしている ・日本人とは異なる発想や価値観を，作品を通して理解させるようにしている ・演習はできるだけ人種やジェンダーの多様なありかたを扱う作品を選ぶ ・短い時間で情報を多く吸収できるよう，スライドで音声や画像，映像を提示し，配布資料で作品抜粋を行い，原点の味わいとコンテクストを学べるようにしている ・小説ではなるべく中編で代表的なものを選んでいる ・文学史の重要度よりは，日本でも知名度が高そうなもの，学生が読んで楽しめそうな内容の作品を選ぶ。語学的に難易の高いものは避け，内容理解まで余裕をもって進める作品を選ぶ。半期に短編を数編読むペースで計画を立て，映像なども活用する ・学生はそもそも文学作品をほとんど読んだことがなく，まず親しませることが大事 ・原文の活用，文学を体系的にとらえる資料の活用 ・背景情報を多く提示し，内容に深みを持たせている ・実際に多くの作品に触れることを推奨している ・多様な英語表現に習熟できるよう，複数のジャンルを取り上げている

注：表内の記載は，一部回答原文の内容を簡略化して示している。

「文学作品は学生にとって難しすぎる」「文学作品を精読するために必要な英語力が備わっていない学生がいる」ということが課題として挙げられており，関連して「取り扱う文学作品を決めるのに悩む」こともあるようだ。これに対しては，そもそも英語の文学作品を読む経験をほとんどしてこなかった学生が多いことを考慮し，学生にとってなじみのある作品を最初に取り上げたり，作品を読み進めやすいように背景情報をヒントとして与えたりすることで，学生に文学作品を読むことの体験を積ませることから始めると良いかもしれない。また，文学作品を通して多様な発想や価値観に触れさせることも重要である。

④「異文化理解」に関する科目

「異文化理解」の学習項目
(1) 異文化コミュニケーション
(2) 異文化交流
(3) 英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化

表22 「異文化理解」に関する課題・問題点及び工夫

課題・問題点	工夫
・内発的動機づけの問題 ・受講学生が多く，個々の学生のレベルに合わせられない（異文化交流の方法が限定） ・講義形式で異文化交流を図る方法が不明（授業内だけで異文化理解は難しい） ・相手大学とのリエイズなど，教員の負担が大きい ・留学生との交流の授業の運営が年によって留学生が忙しかったりで難しい	(1) に関すること ・多言語の動画や資料を用いて，日本語で対話の時間を設ける ・海外に留学した日本人学生に異文化理解を話してもらう (2) に関すること ・国際交流や在日外国人支援を行っているゲストを招き，交流している ・海外で仕事をした経験のある人を講師で招く ・海外からの留学生に日本での異文化体験を話してもらう (3) に関すること ・学外ゲストを招き，中高における異文化理解の重要性を具体的に知る機会を設ける ・写真，映像を多く用いる （共通） ・動画を活用 ・英語によるやり取りを行う ・国際ビジネス界で行われている内容を自らの体験を基に学生に伝える ・英語圏のみならず，非英語圏の地域文化学習も行う。非英語圏の人々との英語での意思疎通の機会も増えている（アジア圏も意識している） ・留学生，異文化でフィールドワークをしている日本人大学院生を招き，討議する機会を設けている ・異文化理解レベルにとどまらず，世界情勢に目を向けるようにしている ・オンライン国際連携に取り組んでいる。豪や香港の大学と共通のテーマについてお互いの国，文化について教え合い，比較させる。相手大学とライブでつなぎ，発表させる ・(1) についてはテキストを用い，(2) では留学生を入れて，(3) では学生のレポートを書かせ，クラスで発表させている

注：表内の記載は，一部回答原文の内容を簡略化して示している

異文化理解を扱う際の最大の課題は，異文化交流の機会をどのように確保するかである。授業担当教員は，人材確保とスケジュール調整の負担を感じているようだ。これについては，例えば，大学の留学生課などの部署と連携して大学に在籍している留学生とつないでもらったり，オンラインのビデオ通話を利用したりするなどの工夫が考えられる。

(5) 中高（英語）教員免許取得を目指している学生の英語力向上のための工夫

今回の調査協力校で実際に行われている取り組みには，以下のようなものがあった。

1. 英語漬けの環境を作る

・授業を英語で行う

・英語のみを使用する機会を確保する（英語話者が常駐し英語のみを使用する空間を提供する，留学生と交流するカフェを開設する，毎日英語のみで約1週間活動する授業を開講する，英語集中演習の企画や運営参加を推奨する）

・e-learning（例：アルクNetAcademy）の活用を推奨する
・長期休みに課題図書を購読させ，レポート課題を課す

2. 英語試験関連

・TOEIC IPを無料受験させる
・英語担当教員が民間試験等に対応した指導を行う
・取得スコアによる単位認定や表彰を行う

3. 採用試験対策関連

・模擬試験を実施する
・外部講師による対策講座を開催する
・合宿・週1回の勉強会を開催する

4. 海外留学関連

・教育学科では9カ月の留学制度を必修とする

2.4　まとめ

本調査では，各大学で行われている様々な工夫について情報を集めることができた。その一方で，受講者数が多いクラスへの対応，授業時間数の不足への対応，学生の英語力やモチベーションの個人差への対応，模擬授業の実施，専門的事項を教職にどう関連づけていくか，などについては課題があると感じている大学教員が少なからずいるということもわかった。それぞれの大学が置かれている状況が異なる中で，コアカリキュラムという共通の枠組みを幅広く具現化するためには，シラバスの構成や授業の実施方法に柔軟性が求められる。

3. 大学教員対象の聞き取り調査

3.1　事例収集の概要

中・高等学校教員養成課程における外国語（英語）コアカリキュラム記載の学習項目を，すでに大学の授業で試行的に扱っている具体的事例を収集するため，大学教員対象のインタビュー調査を行った。2018年度に，本科研メンバー7名からなる「コアカリ試行情報収集グループ」を立ち上げ，情報収集の方針・方法案についてグループ内で議論をし，最終的に科研メンバー全員が参加する全体会議において，その方針・方法案が了承された。コアカリに掲げてある各学習項目に対応する事例をすべて網羅することは現実的に難しいため，各大学においてコアカリを実施する上で大学教員が最も頭を悩ませると思われる項目や，教員が情報として知りたいと思うであろう項目に絞り込むこととした。また，2019年度より外国語（英語）コアカリキュラムに基づく授業が各大学で開始されたとしても，教科専門科目や教科教育科目は大学2年次以降（本科研の最終年度となる2020年度以降）に開設される場合が多く，外国語（英語）コアカリキュラムに対応した授業の実際の事例を集めることは難しいと思われたため，2018年度や2019年度の時点で，各大学で行われている授業内容や授業運営上の工夫のうち，コアカリ対応授業実施においても役立つと思えるような情報についても積極的に集め，調査結果として記載することとした。
実際のインタビューにおいて，外国語（英語）コアカリキュラム記載のどういった学習項目に焦点を合わせて聞き取りをするかは，各聞き手に一任するものの，聞き手となる科研メンバーがインタビューを進行するにあたって参考となるような質問項目集があったほうがよいという意見が多数あり，コアカリ試行情報収集グループメンバーを中心に，インタビューの際に聞き手が適宜参照できる共通資料「実施情報収集における聞き取り項目」（第1章第3節3.2参照）を作成した。

インタビュー対象者は，近年出版されている外国語（英語）コアカリキュラム対応の書籍の執筆者や，本科研メンバーの知人の大学教員を中心に選定した。また，外国語（英語）コアカリキュラムによって領域名が「英米文学」から変更になった「英語文学」については，特に注目度が高いと判断し，本科研プロジェクト主催「英語教員養成コアカリキュラム・研究フォーラム」（2019年9月22日実施）でシンポジウム「教員養成課程における英語文学の在り方」を開催し，登壇していただいた高橋和子氏（明星大学教授），池田栄一氏（東京学芸大学名誉教授）も本調査のインタビュー対象者としてここにまとめて報告をする。

さらに，本科研メンバー自身が，それぞれの勤務する大学での授業で従来から取り組んでいることが，コアカリ対応授業で扱う内容・方法としても参考になる部分も多く，また，その時点ですでにコアカリ記載の学習項目を意識した授業を先行実施している場合もあったため，本科研メンバー数名もインタビュー対象者として含め，情報を提供してもらった。

選定されたインタビュー対象者には，コアカリ試行情報収集グループのメンバーを中心にインタビューの依頼をし，対面やオンライン，メール上でインタビューを実施した。

3.2　事例収集の質問項目

事例収集の質問項目は，インタビューを実際に行う前に上述された方法でリストアップされ，インタビューの際に聞き手が手元に持つ共通資料「実施情報収集における聞き取り項目」としてまとめられた。この資料では以下のように，その聞き取り項目を「英語科の指導法」「英語学」「英語文学」「英語コミュニケーション」「異文化理解」の枠組みで整理した。

英語科の指導法（初等・中等共通質問事項）

【履修者数】

・毎年の履修者数は1クラスにつき，おおよそ何名ですか。

【履修条件・単位取得条件としての英語力】

・科目の履修または単位取得の要件として，一定水準の英語資格試験のスコアの取得（例えば，英検準1級，TOEIC L&Rテスト730以上）などを設定されていますか。

【学習指導案の作成】

・大人数の場合，指導案の添削をどのように行っていますか。

【ICTの活用】

・どのようなICT機器を扱っていますか。

【ALT等とのティーム・ティーチング】

・「ALT等とのティーム・ティーチング」では何をどの程度まで教えていますか。

【模擬授業】

・模擬授業は学生1人当たり何分くらいの授業を何回実施していますか。

・大人数または少人数の場合，模擬授業の実施方法に何か工夫をされていますか。

・学生同士の学びあいを促進するために工夫されていることはありますか。

・模擬授業に対するフィードバックは，教員と学生から，それぞれどのような方法で行っていますか。模擬授業を見た学生から建設的な意見を引き出すために授業観察力を養う工夫は何かありますか。

・ALTとのTTの模擬授業では，外国人教師や留学生の協力を得ていますか。それとも学生がALT役をしていますか。

・模擬授業の映像を撮影した後，どのような方法で活用していますか。

【授業観察】

・実際に学校現場を訪問し授業見学をしていますか。それとも映像等を用いていますか。

【授業担当者】

・複数の教員で指導法を担当する場合，どのような連携を行っていますか。

英語科の指導法（中等に特化した質問事項）

【授業で使用しているテキスト】

・指導のためのテキストはありますか？　書名と出版社を教えていただけますか。

【英語による授業展開】

・授業を英語で行えるよう，英語でインタラクションする力どのように身につけさせていますか。

【ICTの活用】

・ICTを活用した指導法では，どのような取り組みをされていますか。工夫されている点はありますか。

【学習評価】

・「学習評価」に関しては，何をどの程度まで教えていますか。

英語学

【外国語科の授業に資する英語学的知見】

・英語教育に資する英語学を教える上で，心がけていることや工夫をされていることはありますか。

【英語の音声の仕組み】

・教員としての音声学の指導として，工夫していることはありますか。

【英語の文法】

・英文法をコミュニケーションの視点から教えるために，どのような工夫をしていますか。

【英語の歴史的変遷】

・「英語の歴史的変遷」の中で，英語教師が知っておくべき最低限の事項はどのようなことですか。

【国際共通語としての英語の実態】

・「国際共通語としての英語の実態」に関しては，何をどの程度まで教えていますか。

英語文学

【外国語科の授業に資する英語文学的知見】

・英語教育に資する英語文学を教える上で，心がけていることや工夫をされていることはありますか。

・文学作品を中高の英語の授業で扱う場合の指導法などを取り上げる機会はありますか。

【文学作品】

・授業ではどのような文学作品を扱っていますか。またその作品を選んだのはなぜですか。

【その他】

・文学作品を「読む」あるいは観る以外に，朗読やドラマ化など表現活動につなげる工夫はされていますか。

英語コミュニケーション

【履修条件・単位取得条件としての英語力】

・単位取得の要件として，一定水準の英語資格試験のスコアの取得（例えば，英検準1級，TOEIC L&R テスト730以上）などを設定されていますか。

【英語力】

・学生の「英語教育に資する英語運用能力」を強化するために，心がけていることや工夫をされていることはありますか。

・授業外で「英語教育に資する英語運用能力」をつける取組を大学でされていますか。

【その他】

・コミュニケーションを前提とした英語の指導のために，工夫されていることがありますか。

異文化理解

【世界の文化の多様性】

・様々な国・地域の生活習慣の相違点や共通点を伝える工夫として，授業で工夫されていること（教材，指導法など）はありますか。

【異文化交流】

・学生に「多様な文化的背景を持った人々との交流」を体験させるために工夫されていることはありますか。具体的にどのような交流体験ですか。

以上が，大学教員対象のインタビュー調査を行う際に聞き手が適宜参照できるよう事前に用意した質問項目である。

3.3　事例収集の結果

事例収集の結果の概要を，インタビュー対象者から提出された資料の一部と共に，以下に報告する。なお，実際にインタビューを実施できるメンバーの数が限られていたため，教科に関する専門的事項については，実際に事例収集する対象を「英語学」「英語文学」「異文化理解」の3つの領域に絞り込み，「英語コミュニケーション」についてはインタビューの実施を見送ることとした。

英語科の指導法

英語科の指導法に関するインタビュー調査は，英語科教育法を担当する6名（A, B, C, D, E, F氏）に対して行われた。A, B, C, D氏は国立の教員養成大学・学部，E氏とF氏は教員養成系ではない私立大学で教鞭を執っている。なお，A氏は小・中学校を，B氏は小・中・高等学校を，C, D, E, F氏は中・高等学校を対象とした英語科教育法を担当している。以下，6氏の実践を小項目に分類し紹介する。

【模擬授業の実施方法】

B氏

・毎年の履修者は1クラスにつき約60名に達し，非常に人数が多い。そのため，模擬授業は3つの教室に分かれて同時に行っている。各教室に4～5グループが入り，ゼミ生や院生のTAを配置している。学生たち主導の授業となる。ビデオは各教室に2台ずつ設置し，模擬授業を撮影している。

E氏

・模擬授業は教科教育法でも実施が必須となる活動だが，実施にあたってはいくつか課題もある。大学によっては大人数のために全員に模擬授業の機会を提供できなかったり，反対に人数が少なすぎることによる弊害もあるが，本学の場合は後者の課題がある。本学では，少ない年は2名のみ。今年度は比較的多く9名が履修している。小規模のため，生徒役になる学生が少ないことはデメリットである。実際の活動の場面を再現できないだけでなく，模擬授業を行った学生に対するフィードバックも十分に行うことができない。過去には，模擬授業担当学生の友人や部活動仲間に授業に参加してもらい，生徒役になってもらう試みも行なったことがある。教職課程ではない学生であり，必ずしも英語を専攻している学生ばかりではないので，授業者からわかりにくい説明があった場合には，わからないという素直な反応もあり，模擬授業担当学生には良い機会となった。

F氏

・履修者数は例年10名から20名程度だが，年により30名，40名になることもある。履修人数が多い場合には，指導案はマイクロティーチング後に提出させ，添削している。ALT等とのティーム・ティーチングでは，1人がALT役を担い，マイクロティーチングをしている。模擬授業は学生1人当たり5～10分間のマイクロティーチングを複数回実施する。クラスの人数により，回数は異なる。40人だと，2回できるかどうかというところである。大人数の場合，模擬授業はグループ活動をさせる工夫をしている。模擬授業の映像撮影はしていない。

【模擬授業の振り返り方法】

A氏

・学生の模擬授業には，板書し，説明し，その後リピートして導入終わりになる，長くわかりにくい活

動と説明が続く，練習段階が不足している，いきなり活動に突入する，誤りだらけの英語を使用する，などの特徴がある。また，総じて学生は，演繹・説明的，暗記的，文字言語中心の教え方をする傾向がある。そうした固定的な指導観を修正させ，児童・生徒の発達段階に合わせて教え方を調整できる柔軟性を育てることが教員養成において極めて重要であると考える。そこで，「予想授業演習」という取り組みを行っている。学生はまず，グループで模擬授業を計画し試行する。その後，現職教員による同じターゲット表現・目標の授業（またはビデオ）あるいは演示を観察させる。そのうえで，自分たちの授業試行と比較し，省察させるという試みである。刺激材としては「実際の教室での現職教員による授業の参観」「授業ビデオ」「大学授業での現職教員の演示」の3種類がある。「学生の授業計画・試行 → 現職教員による授業などの参観 → 質疑応答 → 省察課題」という手順で行っている。

B氏

・模擬授業を終えた後，授業中に学生たちにグループごとに研究室に来てもらい，自分たちの模擬授業映像を視聴させながら，20分ほど振り返りを行う。その後，担当教員がクラス全体に対してコメントをし，授業実演を行う。

C氏

・模擬授業の振り返りにインターネットによる映像配信を活用している。授業中に録画した模擬授業映像をYouTubeで限定公開し，履修者に視聴のためのURLをメールで一斉送信する。メールには教員による各グループの模擬授業内容へのコメントも記載している。履修者には，自分のグループの模擬授業映像を視聴した後に「振り返りレポート」を書いて提出させることもある。
・学生へのアンケート調査でも，62名の学生のうち60名が模擬授業の映像配信が役立ったと回答している。自宅や大学でパソコンを使って視聴した学生は8割以上で，スマホで視聴した学生が2割程度であった。映像配信が役立つと思った理由として，学生たちは授業後のアンケート調査に次のようなコメントを寄せている。

○自分が話す英語の振り返りに役立つ。文法や発音のミスの傾向を知って今後改めることができる。
○DVDを見られないPCでも簡単に見たり，ダウンロードしたりできるし，特定のアプリも必要ないから。
○その場にいるときは，間違っている英語を使っていても気がつかなかったりするので。
○やっている時は上手く進めていくのに必死だが，ビデオで客観的に見ると，いろいろな反省点が浮かび上がってくる。
○ちゃんと振り返りができる。自分を客観視できる。周りの反応もわかる。DVDだと面倒だけどスマホなら楽に見ることができる。
○どこでも半永久的に見ることができるから。 自分の姿を客観的に見られるから。
○自分の班以外の映像も見られるから。
○他人の授業の良い点，改善点にアクセスしやすくなるため。
○生徒目線を自身が体感して，教師目線と並行しながらフィードバックができるから。
○ポートフォリオとしての役割や単に資料として貴重だから。
○見たい時に見られるので，何回か見て授業の型を身につけるのに役立つと思うから。
○自分が思っていることと，客観視して確認する自分の行動・発言は異なっていることが多いから。

第3者目線での反省は改善に有効だと思う。

○自分が授業をしている様子は見ることができないので，生徒目線で自分は教師としてどのように見えているのかがわかる。

○実演しているときに気づかなかったところが見える。振り返りの材料になる（自分がいつ，どんなときに困ったか，など）。家の人も見られる。

○しっかりと声は出ているのか，ちゃんと教室を見渡せているのかわかるから。

○自分の授業を恥ずかしくても見返す動機づけになるから。

一方，役立たないと回答した学生の理由としては次のようなものがある。

○個人的な意見になるが，自分の悪い点や良かった点については成功体験・失敗体験として記憶に残りやすいので，他の人の良い点について考察する方が自分のためになると思う。

○振り返りは他人に管理されるものではないため。

また，「映像配信以外の方法で，模擬授業による学びをより深めるためにどのようなことを授業内外で行ったら役立つと思いますか？」という問いかけに対しては，以下のようなコメントが学生から寄せられた。

○この授業ですでにやっていますが，他の友人からのコメントカードはとても参考になる。

○振り返りレポートでは教師のほうで，自己評価のための項目を立てると何を注意すべきだったかわかりやすい。

○グループ全体ではなく，1人1人に向けたコメントシートがあった方が良い。

○OneNoteなど，複数人でドキュメントを編集できるサービスを利用した指導案の相互評価等。

○同じ題材をやっている現職の先生などの授業も見られるようにしてくれるとアイデアなどを比較できるため役立つと思う。

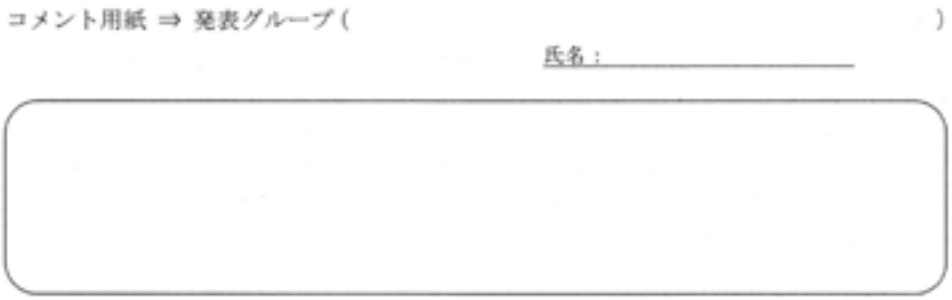
○グループで先生役と生徒役に分かれて実施し，一斉同時進行で実施して，クラス全体では映像を視聴することのほうが，振り返りの時間も長くとれると思う。

○GoProとかは撮影しながら，ポイントとなる箇所にタグをつけられるので，授業後に動画をすぐ見たらいいと思う。

○お手本となる授業の映像を家でも見られるようにしてほしい。

○グループメンバーと一緒ではなく1人で一から授業を組み立てる練習。

○英語教育法を受けている人では英語に慣れているので，他学科の人を生徒役に授業する。


コメント用紙 ⇒ 発表グループ（　　）

氏名：

《C氏使用：コメント用紙》

E氏

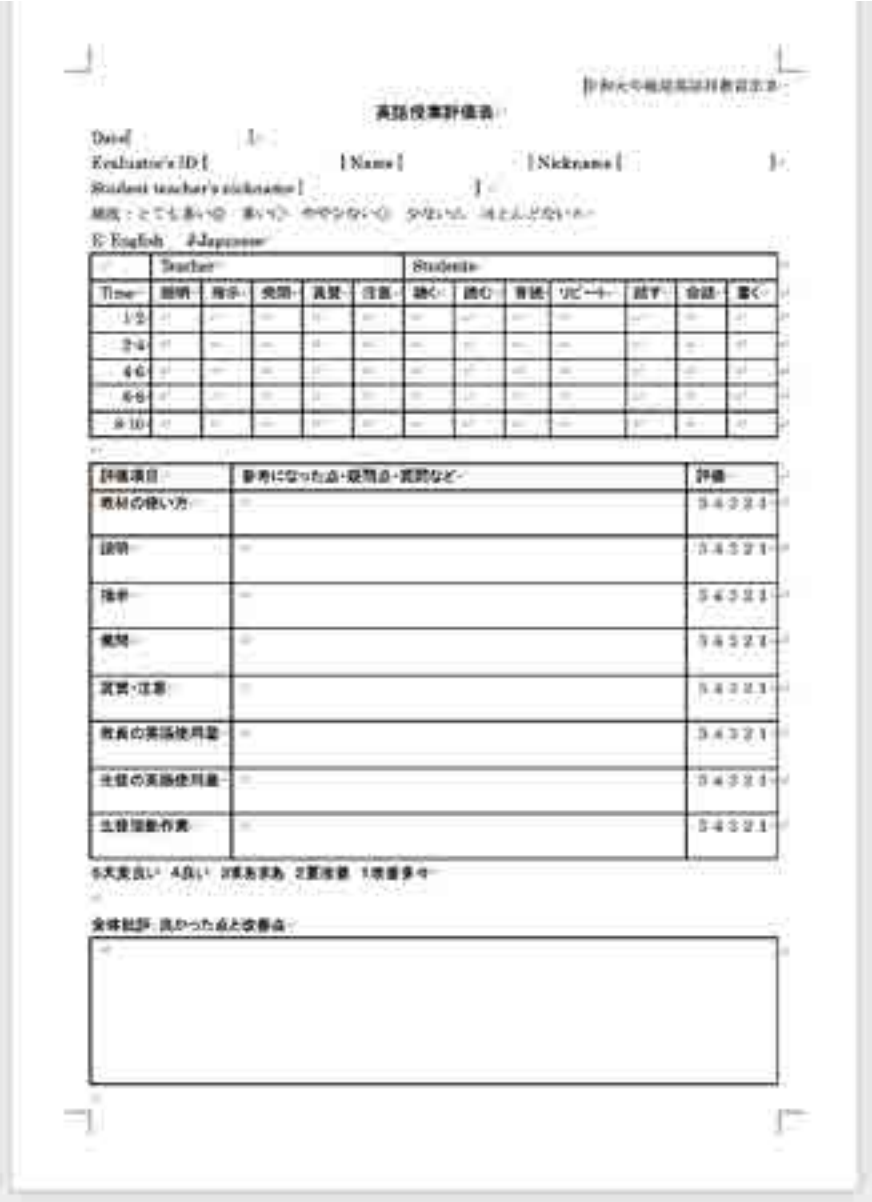
・履修者が少ないことはデメリットでもあるが，それをメリットに変える工夫をしている。まず，フィードバックである。できるだけ，授業参観者からは紙面によるフィードバックではなく，対面によるコメントをすることにしている。人数が少ないため時間は比較的十分取ることができる。授業を行なった学生は，まず自らの反省と課題をコメントする。その後，他の学生は指導案に残したメモをもとに質問する。授業担当学生は質問に回答するとともに，わからないことは全体に投げかける。次に参加者は授業についてコメントする。視線，姿勢，発話などかなり細かい部分にまで言及する。人数が少ない分，他者の目を気にせず発言できることはメリットと言えよう。最後に担当教員がコメント及び指導を行うとともに，全体にフィードバックすべきポイントについては全体に返すようにしている。場合により，担当教員が実演する。

・授業担当学生は，自分の模擬授業からコメントまでをすべて自身のスマートフォンに記録している。家庭では他者からのコメントをもとに自らの授業を振り返り，振り返りシートにまとめ，次回の授業で提出する。また，一度実施した模擬授業で問題のあった部分については次回，改めて再授業をすることができるのも少人数ならではのメリットである。

F氏

・授業中に問いを与え，グループで話し合い，全体にフィードバックさせることで学生同士の学び合いを促進するための工夫としている。全体にフィードバックする際，あとから発言する人（グループ）はそれまでの発表した人（グループ）が言ったことを繰り返してはならないというルールを作っているので，学生はみな素早く挙手する。

・「模擬授業評価表」を渡し，それを意識して授業させたり，実際に評価させたりしている。ALTとのTTの模擬授業では留学生を活用することもあるが，外国からのゲストを授業に招いたりもする。



《F 氏使用：模擬授業評価表》

【学習評価の指導】

F氏

・「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」は，英語学習や英語教育においてどのように考えたらよいか，また，CAN-DOとの関わり，カリキュラム・マネジメントなどと絡めながら議論することもある。

【模擬授業の評価】

B氏

・成績評価に関しては，以下の内容を2003年より実施している。テスト期間中に学生を研究室に呼び以下のパフォーマンスを評価することにしている。

① Oral Introductionをする（3 ～ 7分）。

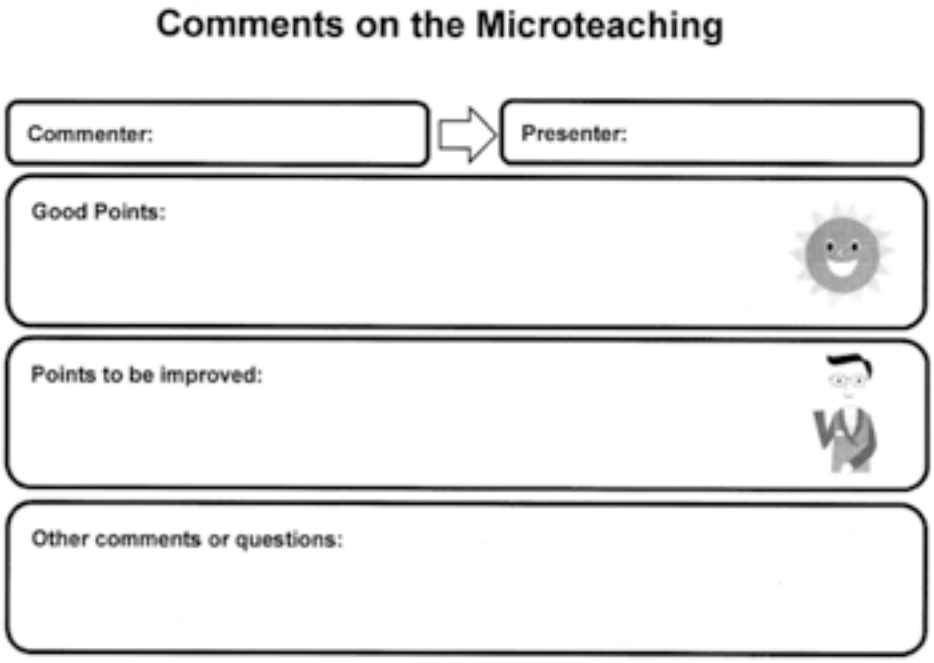
② 音読をする（20点満点）。

③ 学生が作成した教材を評価する。

D氏

・「自分のグループが担当した模擬授業（50分全体）について」という課題を出す。学生はまずDVD映像を視聴し，その後，授業内のディスカッション，コメントカードの記述内容，DVDの映像から得た学びについて記述する。その上で，模擬授業時と同じ単元を扱う授業1回分（50分全体）の指導案を新たに各自（1人ひとり）で作成する。

・上記の課題を遂行するに当たって，指導案には，教師の発話，生徒の典型的反応，例文，タスク・活動，ワークシート，板書計画などできるだけ詳しく記載するようにさせている。



《D氏使用：コメント用紙》

【使用教科書】

E氏

・自己の中学・高校教員時代に作成した教材教具を示して指導している。また，指導法について担当教員自身がまとめた資料を閲覧用に与えている。

F氏

・授業では，大修館書店の『英語授業ハンドブック＜中学校編＞』及び『英語授業ハンドブック＜高校編＞』をテキストして使用している。

【授業外での取り組み】

F氏

・学校現場訪問や授業見学はしていないが，語学教育研究所や英語授業研究学会，ELEC，大学主催など

の各種研究会に参加することを義務づけ，「研修会参加報告書」の作成を課題としてやらせている。

【英語力強化法】

F氏

・授業を英語で行え，英語でインタラクションできるようにするため，英語でディスカッションする機会を与えている。またEnglish CentralやALCのネットアカデミーなども紹介している。

【ICTの活用】

F氏

・教科書で扱う話題の背景や関連動画をYouTubeで見せている。昨今はYouTubeが素材になっているケースが増えてきているので，実物を見せる良さや本物の人の語りをモデルにする良さを伝えるようにしている。『ローマの休日』の1シーンを活用してアフレコ（post recording）をしたりすることもある。

・English CentralやALCのネットアカデミーなどを通常授業とどう絡めて活用するか，あるいは自習用として利用するにはどのような仕掛けが必要かなどを考えさせるようにしている。

《F氏使用：研修会参加報告書》

英語学

英語学に関するインタビュー調査は，英語学を専門とする3名の教員（G, H, I氏）の協力を得て行った。以下に，3氏から得た教員養成における英語学の授業の在り方や授業実践の事例について報告する。G氏は国立大学，H氏は私立大学，I氏は公立大学にそれぞれ勤務しているが，3大学ともに教員養成系大学・学部ではない。

【外国語科の授業に資する英語学的知見】

G氏

・教師が背景として知っておくべきことと，生徒に直接教えることは異なる。教師は「生徒に教えること」の範囲の知識だけでは当然不十分で，生徒から英語の文法や音声などについて「なぜ？」と問われた際にちゃんと説明することができるだけの知識を持っていることが望ましい。それゆえ，そういった幅広い知識を大学の英語学の授業を通して，英語教員志望者の学生に身につけさせることを意識して授業を行っている。

H氏

・英語の教職に必要な「英語の音声の仕組みを理解し，その知識を使って，英語の歴史・現状について学び，その過程で英文法の知識を深めること」ができるように，外国語（英語）コアカリキュラムに対応した英語学の教科書（『英語コアカリキュラム対応　英語の諸相―音声・歴史・現状―』，名古屋外国語大学出版会，2019年4月）を，教職の英語学の授業の教科書として使用している。

I氏

・将来教員となる学生の発音目標は個人によって異なるが，弱音節をはっきり発音しすぎることや連結の発音の仕方などの共通の問題を各自が意識し，改善することが重要であり，大学の授業においてもこういったことをしっかりと指導している。

【英語の音声の仕組み】

G氏

・英語の音声についても，発音と綴りの関係など，英語教師が自ら使っている英語についての「なぜ？」を理解していないことが多い。所謂フォニックスではカバーされていないことも多く，特に弱母音についての理解は重要である。

H氏

・フォニックスが世間でもてはやされているようだが，フォニックスは音声理解が前提であるはずなので，まずは調音点や調音法など音声の仕組みをしっかりと理解することが重要だと考えて指導している。

I氏

・英語教師は，生徒にモデルとして提示できるような正しい発音ができるようにならなければならない。学生には英文パッセージを学期の最初と最後に録音させ，自身の発音の変化を気づかせるようにしている。また，授業では当該パッセージの各文を毎回取り上げ，発音のポイントを教え，各文を録音させる。録音した英文は私がすべてチェックし，フィードバックを与えている。

【英語の文法】

H氏

・語用論や発話行為にまつわる面白いエピソードを絡めて授業をするなど，英文法は使うことを常に意識させて教えている。

I氏

・The Japan Timesの記事を選び，英語でスライドを作成し，プレゼンをし，英語によるQ&Aをやらせている。スライドの英語をチェックし，プレゼンを聞く側の学生には記事の要約を英語で書かせ，それを添削することで学生たちに英文法を定着させるようにしている。

【英語の歴史的変遷】

G氏

・英語の文法は数学と異なり，時代とともに変わっていく。歴史的な変化を知ることにより，現代英語の文法も絶対的，固定的なものでなく，地域差，個人差，時による変化があることを理解してもらいたい。

I氏

・英語の発音の変遷や，なぜ英語が語順に厳しい言語になったのかを知ることは，英語の教師になる人が身につける知識として重要である。

【国際共通語としての英語の実態】

H氏

・英語の教科書はあいかわらずアメリカ中心のように感じるが，学生には言語は平等であり，優劣はないことに気づいてほしい。

英語文学

英語文学に関するインタビュー―調査はJ氏，及び本科研プロジェクト主催「英語教員養成コアカリキュラム・研究フォーラム」（2019年9月22日実施）のシンポジウム「教員養成課程における英語文学の在り方」にご登壇いただいた髙橋和子氏（明星大学教授）と池田栄一氏（東京学芸大学名誉教授）の協力を得て行った。以下に，3氏から得た教員養成における英語文学の授業の在り方や授業実践の事例について報告する。

【外国語科の授業に資する英語文学的知見】

J氏

・テキストを読むこととはコンテクストを考えるということで，そうすることが創造性の涵養につながる。文学作品を読むことで，作品の文化的背景が想像力をとおして汲み取れる。

・文学作品を読んでそれをドラマ化することで登場人物に共感し，読みが深まる。ドラマワークショップの中に，ドラマ技法として，登場人物をより深く知るためのインタビュー（ホットシーティング）や，身体を用いた表現の活動（静止画）で登場人物の状況や心情などを考えるなど，英語授業で使える技法

や方法論が多くある。

髙橋和子氏

・教員養成学部において「英語文学」が目指すことの「理想」と「現実」を次のように考えている。

〔理想〕

① 英語で書かれた様々な文学作品に触れ，意味内容が理解できる。

② 必要に応じて先行研究や理論などを参照・援用しながら，文学作品を批判的に解釈することができる。

③ 各作品が描かれた背景や，そこに描き込まれた文化・思想を理解することができる。

④ 各作品が与えてきた／与える可能性がある影響について理解・考察することができる。

⑤ ①～④の資質・能力を踏まえて英語授業を実践し，各生徒のコミュニケーション能力を育成することができる。

上記が「理想」であるが，教員養成学部の「英語文学」履修者は，英語文学が主専攻とは限らない。また，授業時数も限られており，この理想を実現するにはハードルが高い。

〔現実〕

① 英語の検定教科書に掲載されている文学教材の特色を十分に生かして，英語授業を行うことができる。

② 学習者の状況（英語力・興味関心など）や学習内容に応じて，適切な文学作品を選び，その特色を十分に生かして教材化した上で，英語授業を行うことができる。

③ ①～②の資質・能力を踏まえて，各生徒のコミュニケーション能力を育成することができる。

・「英語文学」では，教科書の文学教材を活用する資質・能力育成を目指す授業がなされるべきである。その資質・能力には下記のようなものが含まれる。

1. 学習指導要領における文学教材の理解

1970年版『高等学校学習指導要領』では，「題材の形式は，説朋文，対話文，物語，伝記，小説，劇，詩，随筆，論文，日記，手紙，時事文などとする。」との記載があったが，次期『高等学校学習指導要領』では，「物語」のみに言及している。このことから「物語」が中心であることがうかがえる。中学校も同傾向である。

2. 物語の構造に関する理解（Hudson 2007; *Signature Reading* 2005参照）

①setting: when & where the story takes place

②characters: the people or animals who perform most of the action

③problem: the puzzle or issue that the characters must try to solve

④plot: what happens in the story; what the characters do to try to solve the problem

⑤solution of the problem: the ending, or conclusion of the story; how the characters finally solve the problem

3. 物語の特色に関する理解

①point of view（視点）：物語は，誰かの視点に従って話が進む。物語中の＜Ｉ＝作者＞とは限らない。

②tense（時制）：物語の現在は基本的に過去形で記述（Lodge 1992参照）

③有意味な文脈：話が進展していくにつれて文脈（context）を形成。豊かな文脈の中で英語学習が可能。（Lee and Liu 2011参照）

④多彩な読み方の可能性：＜客観的な読み方＞＆＜主観的な読み方＞が可能。特に後者の幅が広い。（Rosenblatt 1978参照）

4. 言語活動に関する理解

・＜客観的な読み＞と＜主観的な読み＞
　＜客観的な読み方＞＝十人一色の解答が出る可能性が低い
　＜主観的な読み方＞＝十人十色の解答が出る可能性が高い
・多彩な活動形態（精読と多読／個人，ペア，グループ活動）
・4技能・5領域の取り入れ方
・教科書で与えられている練習問題や活動を批判的に捉える力

5. 適正な評価を行う力の育成

・評価がしやすい点，評価が難しい点の理解
　評価が難しい点に対する対応方法：　＜主観的な読み方＞の評価方法

6. 個々の教材が持つ物語の構成・特色を，見つけ出す力の育成

・指導書などにおける物語の呼称＝混乱気味⇒　たとえ「物語」と記載されていなくても，物語の構成・特色を持った教材はある（伝記，インタビューなど）。

池田栄一氏

・「何を教えるか（what to teach）」と「いかに教えるか（how to teach）」とは不可分であるにもかかわらず，英語文学担当教員の「教授法」への意識が欠如しているために，大学の英語文学の授業がつまらないものとなっている。「文学授業の理論」とは別に，中高の現場で実践可能な具体的な「授業モデル」の構築が必要である。

　実践例 Harry Potterをどう教えるか？（学生・生徒に人気の教材を選ぶ）
　　授業冒頭にGuiding Questionsを提示する。
　　「Hogwarts Schoolはイギリスのどこにあるのか？」
　　「Hogwarts Expressはなぜ King’s Cross駅から出発するのか？」
　　⇒イギリスの鉄道網の地図から，行き先がScotlandであることを立証する
　　「漏れ鍋やダイアゴン横丁はロンドンのどこにあるのか？」
　　⇒ロンドンの地図から，歴史・地理・ファッションへと学生の好奇心を誘う

・外国語科の授業に資する英語文学においては，「文学テクスト」から「文化的コンテクスト」へ扱う範囲を広げることが大切で，「英語」だけで完結するのではなく，他教科（地理・歴史）との連携も意識するとよい。

・何より重要なのは，学生が感動し，いつもワクワクするような授業をめざすことである。「英文読解」という旧式の教授法から抜け出し，「映像テクストを組みあわせた立体的な授業」を大学の英語文学の授業で学生に体験させておくことで，学生が将来，英語教員となり，中・高等学校の授業内で英語文学を扱う際に，自分でも同じような授業実践ができる。

【文学作品】

J氏

・『トム・ソーヤの冒険』『不思議の国のアリス』『ピーター・パン』。映画化されているので，中学生にも馴染みがある。英語圏の児童文学として英語圏の子どもたちにも長く読まれ親しまれている。

髙橋和子氏

・適切な文学作品の選択とその教材化の際は，下記のような観点を考慮するとよい。

1. 作品の選び方

・いわゆるcanonから選ぶか否か？
・形式などに関する点（原文，retold版？／散文，韻文？）
・内容に関する点（異文化理解，平和教育，友情，生き方etc）

2. 教材化の方法

・作品全体 or 部分？
・問いの立て方（質問／発問）
・言語活動の行い方
・どこまでが授業内，どこまでが授業外？

池田栄一氏

・英語文学担当の教員は，例えばシェークスピアなどの自身の専門領域を学生に押しつけている場合が多いが，「教員が教えたい内容」よりも「学生が学びたい内容」を優先すべきである。学生が興味のある教材を選び，学生に「学びたい」というモティベーションを持たせることが重要である。

・教育効果のある映画，例えばアメリカ文化概論であれば，人種差別やジェンダー差別，移民問題などを扱っているような教材で，学生が主人公に感情移入できるようなもの。すぐれた作品さえ選べば学生を感動させることができる。私が授業で取り上げたのは，移民というテーマでは1950年代のアイルランドからアメリカに移った移民女性のブルックリンでの他の移民たちとの人間模様を描いた作品。移民の中でも社会階層と差別があること，本国と新天地の間で恋愛に心が揺れ動く姿，他の民族との結婚などをみて，同じように地方から出てきた学生たちは，同年代の主人公の生き方に感情移入する。差別をテーマにした際は，I Am Samを取り上げ，離婚と再婚が頻繁にあるアメリカ社会では様々な家族の形があることを学ぶ。知的障がいのあるシングルファーザーが親権を争うという話の中で，障がいは子どもたちだけでなく親にもありうること，また差別がどこで生まれるのか, Lucy（Samの子ども）を幸せにするためにはどうしたらよいかを周囲にいるみんなが考える姿など，日本でも身近な問題（障がい者差別とその対策）としてとらえられる。大切なのは学生が自分の問題として感動できるかどう

か。Mind（頭）とHeart（心）の両方で感動できる作品を選ぶことが大切。

・ハリー・ポッターは学生の興味関心に沿っているので，動機づけになる。ディズニー・プリンセスの変遷を初期の映画から最新のものまで扱う授業も，学生の関心は高い。プリンセスが歌う英語の劇中歌は，リスニングの教材としても有効。学生がシラバスを見ただけでその授業を履修してみたいという内容を扱うことが重要。

【朗読やドラマ化など表現活動につなげる工夫】

J氏

・ドラマ化することで，登場人物がまるでpop-up bookのように本の文字から飛び出してきて，身近に感じられ，共感できるようになる。それは内容理解後の朗読でもある程度，可能。ストーリーテリングを指導したほうがベターであると個人的には考えている。共感が異文化理解，人間理解につながる。

異文化理解

異文化理解に関するインタビュー調査は，同じ私立大学に勤務するK氏とL氏の協力を得て行った。K氏は教育学部所属，L氏は教育学部以外の学部に所属している。以下に，2氏から得た教員養成における異文化理解の授業の在り方や授業実践の事例について報告する。

【世界の文化の多様性】

K氏

・外国語を用いてコミュニケーションを図るとき，自文化を異なる視点から見たり，異文化間の誤解を仲介したりすることが大切になると考える。そこで，授業では，一例として，日本人に対する一般的なstereotypeを提示し，日本文化についてなじみのない人が，その思い込みをgeneralizationなのだと理解できるようにするには，どのような説明が必要か考えて英語で記述，発表させている。異なる時代や立場の人の考え方について理解を深めるのにdramaを行うのも有効である。

L氏

・授業は参加型で，学生がいろいろな立場に立って考える機会をもつようにしている。世界の文化の多様性を考えるときに，ステレオタイプで「この国はこう」と考えがちで，地域ごとの多様性が見えにくい傾向にある。そこで，その地域に住むミックスカルチャーの人々（途中から移住してきた方など）の声を聞いて，自分だったらどう考えるかをその立場に立って考えてディスカッションする。文化といえば3F（food, fashion, festival）にとらえてしまう可能性が高いので，もっと多様で流動的にとらえられるようにしている。オンライン授業をきっかけとして，ネット上にもいろいろな動画，企業があげている世界の食文化の教材などがあるので，こうした動画を活用し始めている。

・英語教職課程の必修科目になっている「国際理解とコミュニケーション」（4単位，週2回授業）は，2019年度の履修者が135名で1年生から4年生までが混在している。大人数クラスにおける工夫として，グループディスカッションを多く取り入れている。2，3週間に1度はグループを入れ替え，メンバーを変えているが，上級生との関わりの難しさなどがあり，検討している。

・オンライン授業では，必ず人の意見を見てコメントを書く。他の学生たちが何を考えているかを知り，自分の意見を持つ機会を作っている。

・授業では，矢代京子ほか『異文化コミュニケーション・ワークブック』（三修社）を教科書として使用している。

【異文化交流】

L氏

・授業にいるミックスカルチャーの学生たち（2020年の専門ゼミの場合にはベトナムルーツ，中国ルーツ，韓国ルーツ）が授業で語ることを通して，その語りを聞いた他の学生たちの視野が広がった。教室にいる学生が語ることが，まずは第一歩。

・2019年度は，タイの文化背景をもつゲストに講義してもらった。タイと日本とを行き来をしながら関西に暮らしている人で，関西弁で語ってもらい，彼から見えるタイと日本の社会を語ってもらった。その話を受けて，ミックスカルチャーの学生たちから順番に語ってもらい，多くの学生が身近に多文化社会を実感できる場を設けた。

・外国人のゲストなどが来ると，学生はみんな英語で話しかけがちだが，人によっては実はやさしい日本語で通じる場合も多い。英語教員になる人にも，ケースバイケースで柔軟性をもつことに気づいてもらいたい。本当の異文化理解は，その人とコミュニケーションを取れる最適な方法を探すことである。

3.4　まとめ

本調査では，「英語科の指導法」「英語学」「英語文学」「異文化理解」に関して，各大学で実際に行われている授業の様々な工夫について，その担当者に直接対面でインタビューをしたり，あるいは，Zoom（ビデオ会議システム）を活用したオンラインやメールでのやりとりを通して情報を集めることができた。実際にインタビューを実施できたメンバーの人数が限られ，また，コロナ禍によるさまざまな制約などもあったために，十分な量の情報が集まったとは言えないかもしれない。しかしながら，それぞれ非常に多忙な状況の中で対応していただけた大学教員の方々は，各担当授業の中で英語教員養成を強く意識したさまざまな工夫を施した取り組みをしており，次章「コアカリキュラムに対応したモデルプログラム」の「具体的なプログラム」を考察する上で，非常に有益な情報を得ることができた。

4. 授業シラバスの分析

第3節では，中・高等学校教員養成課程における外国語（英語）コアカリキュラム記載の学習項目を授業の中ですでに試行的に扱っている具体的事例を収集するために，大学教員対象のインタビュー調査を行ったが，ここでは授業シラバスからこういった情報を収集し，分析した結果を報告する。2019年度ウェブサイトで公開されているシラバスを収集し，その中から「教科の指導法」，「教科に関する専門的事項」それぞれの内容に目を通した。これらのシラバスはすべて，外国語（英語）コアカリキュラムの課程認定を受ける以前のものであったが，外国語（英語）コアカリキュラム記載の学習項目をすでに取り入れていたり，参考となるような実践内容が記述されていたりすることを期待しながら，作業を進めた。以下に「教科の指導法」，「教科に関する専門的事項」（英語学・英語文学・異文化理解）の順に，シラバス収集によって得られた情報を整理する。なお，大学教員対象の聞き取り調査同様に，教科に関する専門的事項の4つの領域のうち，「英語コミュニケーション」はシラバス収集の対象外としている。

4.1　英語科の指導法

現行の教育職員免許法施行規則においては，中学校英語教員免許取得の要件の1つとして，「英語科の指導法」に関する科目を8単位以上習得することが求められている。ほとんどの大学において2単位科目は90分授業として週1回開設され，半期15回で完結する方式が採られており，学生は2年間にわたって2単位科目を4つ「英語指導法Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ／Ⅳ」のような順番で履修するのが標準的なパターンである。時間数としては，90分授業が合計で60回分提供されることになる。この60回分の授業のシラバス構成の大きな枠組みとしては，(1) 前半（Ⅰ／Ⅱ）で主として指導法の理論を扱い，後半（Ⅲ／Ⅳ）で主として模擬授業などの実践的な内容を扱う，(2) 全体を通して学習項目別の構成とし，理論と実践をペアにして進めていく，(3) 前半で中学校での指導内容を扱い，後半で高等学校での指導内容を扱うというように，校種別に構成する，などの方法があるが，シラバス構成の具体は大学によってまちまちであり，また同じ大学でも教員によって異なるケースがあり，類型化することは難しい。

また，教育職員免許法施行規則において，高等学校英語教員免許の取得のために必要な「英語科の指導法」に関する科目の単位は4単位以上と定められているが，実際には高等学校英語教員免許取得のために各大学が求めている習得単位は4単位から8単位の幅がある。4単位を求めている場合，「英語科の指導法」の全科目（例えば，「英語科教育法Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ／Ⅳ」の4科目，各2単位）のうち，任意の2つの科目の単位を習得すればよい場合と，指定された2つの科目（例えば「英語科教育法Ⅰ／Ⅱ」）の単位の習得を求めているケースがある。前者の場合は，「Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ／Ⅳ」のどの組み合わせによる2科目においても，コアカリキュラムの項目が全てカバーされていなければならないが，後者の場合は指定された2科目の中でカバーされていればよいため，前者・後者でシラバス構成が違ってくるという事情もある。

シラバス構成において大学や授業担当教員による特色が見られるのが，模擬授業の設定・構成の原理である。具体的には，次のようなパターンがある。

(1) 言語材料に基づく構成
(2) 知識・技能に基づく構成
(3) 検定教科書の単元に基づく構成
(4) 指導法に基づく構成
(5) 活動・タスクに基づく構成
(6) 指導手順のフェイズに基づく構成

（1）言語材料に基づく構成としては，東京学芸大学の「中等英語科教育法Ⅰ」や愛知教育大学の「英語科教育法Ⅰ／Ⅱ」などが挙げられる。東京学芸大学では，次のような事例が見られる。

模擬授業（1）現在進行形
模擬授業（2）過去形
模擬授業（3）動名詞
模擬授業（4）不定詞
模擬授業（5）現在完了形
模擬授業（6）関係代名詞

（2）知識・技能に基づく構成としては，関西大学の「英語科教育法Ⅱ」において次のような事例がある。

語彙の指導法，マイクロティーチング（受講生の模擬授業）1
音読の指導法，マイクロティーチング（受講生の模擬授業）2
文法の指導法，マイクロティーチング（受講生の模擬授業）3
リスニングの指導法，マイクロティーチング（受講生の模擬授業）4
スピーキングの指導法，マイクロティーチング（受講生の模擬授業）5
リーディングの指導法，マイクロティーチング（受講生の模擬授業）6
ライティングの指導法，マイクロティーチング（受講生の模擬授業）7

（3）検定教科書の単元に基づく構成としては，玉川大学の「英語指導法Ⅰ／Ⅱ」や東京学芸大学の「中等英語科教育法Ⅱ」などが挙げられる。後者においては，次のように中学校各学年の検定教科書で扱われている題材を基にした構成で模擬授業が組まれている事例がある。

模擬授業（1）*Total English* Book 2 Lesson 6“The 3Rs in Germany and Japan”
模擬授業（2）*New Crown* Book 2 Lesson 5“Uluru”
模擬授業（3）*New Horizon* Book 2 Unit 4“Homestay in the United States”
模擬授業（4）*New Horizon* Book 3 Let’s Read 1“A Mother’s Lullaby”
模擬授業（5）*New Crown* Book 3 Lesson 6“I Have a Dream”
模擬授業（6）*Sunshine Book* 3 Extensive Reading 2“Mother Teresa”

（4）指導法に基づく構成としては，法政大学の“TESOL II ／ Teaching Methodology”や，東京学芸大学の「中等英語科教育法Ⅲ」の例が挙げられる。法政大学においては，次のような事例がある。

Micro-teaching（2）
1. The Grammar-Translation Method
2. The Direct Method
3. The Audio Lingual Method
4. The Silent Way

Micro-teaching（3）
1. Desuggestopedia
2. Community Language Learning（CLL）
3. Total Physical Response（TPR）
4. Communicative Language Teaching（CLT）

Micro-teaching（4）
1. Content-based Instruction
2. Content and Language Integrated Learning（CLIL）

Micro-teaching（5）

1. The Participatory Approach

2. Cooperative Learning

東京学芸大学においては，次のように高等学校の「コミュニケーション英語Ⅰ」の検定教科書の題材を，指定された指導法（アプローチ）で模擬授業させる例がある。

模擬授業（3）SHERPA 方式による授業

模擬授業（4）・（5）和訳先渡し式による授業

模擬授業（6）all in English による授業（内容理解中心）

模擬授業（7）all in English による授業（理解から表現へ）

（5）活動・タスクに基づく構成としては，同志社女子大学の「英語科教育法B」において次のような事例がある。

模擬授業と評価・振り返り①　中学校－ペアワークを取り入れた授業展開を考える

模擬授業と評価・振り返り②　高校－ペアワークを取り入れた授業展開を考える

模擬授業と評価・振り返り③　中学校－ピアチェックを取り入れた授業展開を考える

模擬授業と評価・振り返り④　高校－ピアチェックを取り入れた授業展開を考える

模擬授業と評価・振り返り⑤　中学校－プレゼンテーションを取り入れた授業展開を考える

模擬授業と評価・振り返り⑥　高校－プレゼンテーションを取り入れた授業展開を考える

模擬授業と評価・振り返り⑦　中学校－タスクを効果的に取り入れた授業展開を考える

模擬授業と評価・振り返り⑧　高校－タスクを効果的に取り入れた授業展開を考える

模擬授業と評価・振り返り⑨　中学校－生徒にいかに英語を使う機会を与えられるかを考える

模擬授業と評価・振り返り⑩　高校－生徒にいかに英語を使う機会を与えられるかを考える

（6）指導手順のフェイズに基づく構成としては，大妻女子大学の「英語科教育法Ⅲ」のシラバスにおいて，「模擬授業は大きく，①文法導入を伴うオーラル・イントロダクション　②文法解説・練習　③アクティビティ（言語活動）の3つの要素からなる。各学生が自ら模擬授業を計画し，発表する。」という原則に基づいて，次のような構成で模擬授業が組まれている事例がある。

一回目模擬授業の開始①（終了後質疑応答と授業構成についての解説）

一回目模擬授業の開始②（終了後質疑応答とオーラル・イントロダクションについての解説）

一回目模擬授業の開始③（終了後質疑応答と文法説明の仕方についての解説）

一回目模擬授業の開始④（終了後質疑応答とアクティビティ（言語活動）についての解説）

一回目模擬授業のふりかえりと，2回目模擬授業の準備開始。

二回目模擬授業の開始①（終了後質疑応答と教室英語についての解説）

二回目模擬授業の開始②（終了後質疑応答と教材準備についての解説）

二回目模擬授業の開始③（終了後質疑応答と学習者へのフィードバックについての解説）

二回目模擬授業のふりかえりと質疑応答

シラバス構成の違いによる学習効果の違いは，現時点では明らかになっていない。個々の授業における指導のアプローチ，学生の専攻や英語習熟度，クラスサイズ等，様々な要因が影響することが考えられる。また，日本の大学で一般的な「90分授業を週1回ずつ行う」というシステム自体の問題点も大きいと思われる。それぞれの科目（Ⅰ／Ⅱ／Ⅲ／Ⅳ）の授業を週2回ずつ行って半期で2科目が完結するようにしたり，一部の授業を集中開講で行ったりすることで学習密度を高めるなど，多様な実施形態を検討してもよいだろう。シラバス構成の違いが学習効果に与える影響を対照実験的なアプローチで検証す

ることは難しいが，アクションリサーチの手法で形成的評価と総括的評価を繰り返しながら多様なアプローチを試みる，あるいは，異なるシラバス構成で授業を行っている教員同士が知見を共有し合う，などの営みの積み重ねによって指導効果の検証が進んでいくことが望まれる。

4.2　教科に関する専門的事項

英語学

英語学に関しては，30大学の英語学関連科目のシラバスを収集し，外国語（英語）コアカリキュラム記載の学習項目に関連する授業実践の参考となるような記述があるかどうか，という観点から内容を確認した。

「英語の音声の仕組み」に関しては，神戸市外国語大学の「専攻英語1発音」のシラバスに，「教職を目指す学生にとっては発音記号を正しく読み，自ら教室で生徒に規範的な手本を示し，誤った生徒の発音に対する的確な指導ができるようになることを目標とする」と，科目の目標に教職を強く意識させる内容が明記されていた。授業ではその目標を達成するために，「教科書で理論を学ぶことと自分の声を録音分析することを組み合わせる」というユニークな実践を行っているようである。

「英文法」に関しては，北海道教育大学の「英文法概説」や北海学園大学の「英語学概論Ⅰ」，高崎健康福祉大学の「学校英文法論」，聖学院大学の「現代英文法」，千葉大学の「英語学概論Ⅰ」，長崎国際大学の「英語学」のシラバスで，履修学生が英文法について理解できるだけではなく，中学校や高等学校での指導を念頭に置きながら，学習者にわかりやすく英語の基本的な文法の現象を説明できること，英語教育での応用ができることを科目の目的・目標として，明記していた。

「英語の歴史的変遷，国際共通語としての英語」に関しては，東京学芸大学の「英語史概論」や「歴史英語学A」のシラバスの「ねらいと目標」に，「英語に関する歴史的な背景を知ることで，将来，英語を教える際に活用できるようにする」と明記されている。「歴史英語学A」では，さらに現代英語を学習していて一度は疑問に思う事例について，歴史的な視点からの説明ができる部分があることを，テキストを読んで理解をし，テキスト読了の後，変化の有様を歴史コーパスで検索することにより調査する，というユニークな手法がとられていた。

英語文学

英語文学に関しては，17大学の英語文学関連科目のシラバスを収集し，外国語（英語）コアカリキュラム記載の学習項目に関連する授業実践の参考となるような記述があるかどうか，という観点から内容を確認した。シラバスの中に教職と関連づけた記述があるものは多くはなかったが，下記の大学についてはそのような記述が確認された。

神戸学院大学の「英米文学Ⅰ」では，アメリカ・イギリス・オーストラリアの文学を取り上げているが，シラバスの「履修するに当たって」という項目には「教職科目であるので，厳しい授業になる（特に英語を「読む」点において）」という記述があり，ほぼ毎回，作品を事前に英語で読む課題を出すとの説明がなされている。また，創価大学の「英米文学概論」では，英米文学のうち，「主として英文学を対象とするが，英文学史とは異なり時系列 による歴史的なアプローチ中心ではなく，主として口承文学，詩，神話，演劇，小説などのジャンルに分けて英文学を俯瞰しつつ，具体的な作品読解を実践」するとの記載があり，この授業を履修することで「中学校及び高等学校における外国語科の授業に生かすことができる」ことを目指す。北海道大学の「英米文学演習Ⅰ」（講義題目：Hemingway’s Short Stories）では「授業の目標」を，「学部生を主たる対象とした入門的文学演習科目として，英語で書かれた文学作品の言語上の

意味を正しく理解し，且つ文学的表現力への基本的理解を深める。結果，英語が使われている国や地域の歴史・社会・文化について理解し，作品の重層的な解釈の発見のみにとどまらず，他の文学作品との関係性や，作家自身と作品の関係，そして文学的芸術表現形態について，いわゆる行間を読む能力をつけさせる。基本的だが，多層的な能力を養うことによって，中学校及び高等学校における外国語科の授業に生かすことができる。」とし，到達目標を「英語文学のアンソロジーにも掲載されているような，代表的な作品（詩，散文，演劇など）を複数選択し，それらの英語表現，国や地域の多様な文化，独自性などについて理解し，英語科教育に活用できる基本的知識と能力を演習形式により身につけさせる」と定めている。

異文化理解

異文化理解に関しては，18大学の異文化理解関連科目のシラバスを収集し，外国語（英語）コアカリキュラム記載の学習項目に関連する授業実践の参考となるような記述があるかどうか，という観点から内容を確認した。

科目内容と教職とのつながりの記述が顕著なのが，北海学園大学の「Cultural Perspectives in English Ⅰ（異文化理解論）」である。この科目のシラバスには，「本科目は，異文化理解能力の獲得に焦点を当て，教師が提示する課題に応える探求型授業である。科目は二段階に分けられ，第1段階（第1 ～ 7週）は，文部科学省の政策資料に示される世界共通語としての英語と文化的内容の教育についての発表活動に取り組む。受講者は，文科省検定済英語教科書における文化的内容を同定し，その指導のために適切な学習活動を設計し，グループでの発表を行う。第2段階（第8 ～ 15週）では，英語教育と異文化理解の連携を探索し，『英語教育は小学校の1年生から始めるべきか』についてのディベートを行う。受講者は，教師，及び，他の受講者から情報と支援を受けながら協働的な活動を行う。評価は，協働活動，発表，ディベートの取り組みにより行われる。」と記載されている。

藤女子大学の「異文化コミュニケーション」では，異文化集団間に生ずるコミュニケーション問題（特に日本人が行う異文化コミュニケーションの課題）に対する気づきを高めるために授業内で「異文化コミュニケーショントレーニング」を行い，創価大学の「比較文化Ⅰ」では，「バーンガ」と呼ばれるトランプを使った異文化コミュニケーション体感ゲームを行うとの記述がある。玉川大学の「English in Global Contexts」では，履修者の留学経験を振り返らせ，さまざまな地域・場面・状況で使用される英語の変種について発表活動やディスカッションを行う。大妻女子大学の「英米文化（映像・身体表現）」は，映画を通して俳優の身体や声を使った表現がコミュニケーションでどのように機能しているかを，実際に履修者が身体や声を使った演習を行うことで考察する授業で，授業の使用言語は英語である。

いくつかの科目では異文化理解をする際の素材の選定が独特で，大正大学の「異文化の理解Ⅰ」ではディズニーを，同じく「異文化研究の展開Ⅰ-B」ではジブリを中心としたアニメの比較研究を，「異文化研究の展開Ⅱ-B」では「ファンタジー，現代，ホラーをキーワードに物語的想像力について考察する」との記載がある。東京学芸大学の「アメリカ文化概論」では，「アメリカ文化を鮮やかに切り取った 7 本の映画（『クルーシブル』，『ダンス・ウィズ・ウルブズ』，『ブルックリン』，『フィラデルフィア』，『アイ・アム・サム』，『ドリーム』，『キューティ・ブロンド』）を」，同じく「イギリス文化概論」では，「イギリス文化を鮮やかに切り取った 7 本の映画（『マイ・フェア・レディ』，『英国王のスピーチ』，『インドへの道』，『ベッカムに恋して』，『ブリジット・ジョーンズの日記』，『ミス・ポター』，『ブラス！』）を」，「英語圏文化演習A」では「イギリス文化を鮮やかに切り取った 7 本の映画（『恋におちたシェイクスピア』，『プライドと偏見』，『リトル・ダンサー』，『マーガレット・サッチャー』，『ダイアナ―プリンセス最後の

日々』,『クィーン』,『ウェールズの山』）を，複数のキーワードを組み合わせて分析する」との記載がある。

外国語（英語）コアカリキュラム記載の学習項目の「異文化交流」に関連したものとしては，白百合大学の「異文化理解」で，学科TAや交換留学生とディスカッションをする機会を複数回設けている。武蔵大学の「異文化コミュニケーション論Ⅰ」では，「多様な文化的背景を持つ留学生や日本国内外で調査・研究活動をする大学院生とのディスカッションを通して，異文化での生活や調査研究の経験について学ぶ」機会を与えている。名城大学の「異文化理解」は，異文化理解の基本的な考えや手法を学び，オンラインで海外の学生と英語による実践的な協働学習をすることを通して異文化理解を深めることを目指す授業である。ユニークなものとしては，大正大学の「異文化の理解Ⅱ-C」がある。この科目では，「人と出会って異文化体験をする」旅レポートを最終課題とし，「心の欲する場所へ，旅立って，未知の体験」をすることを指示する。遠くへの旅や，泊まりがけの旅が無理な学生の場合は，近場の日帰り旅，今までに体験したことのないことを体験するという場合でも可としている。

また，異文化交流のための語学研修などを行う科目もある。大妻女子大学の「海外ボランティア」では，TOEFLを運営するCIEE（国際教育交換協議会）が実施するプログラムに学生を参加させ，カナダ・オーストラリア・ニュージーランドなどでホームステイをしながら，幼児教育・環境保護・動物保護・地域サポートなど，各種ボランティア活動を体験させる。日本福祉大学の「国際フィールドワークⅠ」は，教員（中学校及び高等学校 英語）の免許状取得のための必修科目で，フィリピン（メトロマニラ），マレーシア（ペナン），カンボジア（プノンペン，シェムリアップ），インド（カルナータカ州）など（2019年度研修先）の大学などで2月に実施される一連のフィールドスタディプログラム（事前学習・現地でのフィールドワーク・帰国後の報告書作成）で構成される演習科目となっている。

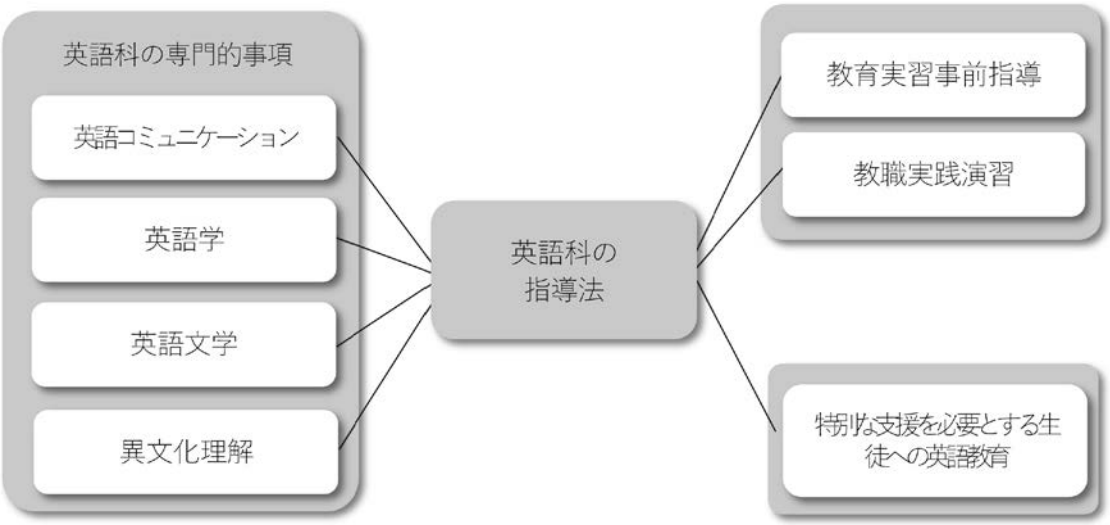
4.3　まとめ

本調査では，インターネット上で公開されている大学の「英語科の指導法」「英語学」「英語文学」「異文化理解」に関すると思われる科目のシラバスを多数収集し，その中から外国語（英語）コアカリキュラム記載の学習項目の指導に参考になると思えるような情報を取り出し，整理して提示した。インターネット上に公開されているシラバスの数は極めて膨大であり，現実的な対応として，シラバス収集作業を行う際に収集対象とする大学数を絞らざるを得なかった。さらに，今回収集したシラバスはすべて，外国語（英語）コアカリキュラムの課程認定を受ける以前のものであった。このような制約はあるものの，実際に収集したシラバスの内容に目を向けてみると，コアカリ記載の学習項目をすでに取り入れていたり，英語教員養成を意識した興味深い工夫が施されていたりするものもあり，次章「コアカリキュラムに対応したモデルプログラム」の「具体的なプログラム」を考察する上で，非常に有益な情報を得ることができた。

第２章　コアカリキュラムに対応したモデルプログラム

1. 包括的なプログラム

中等教育英語教員養成のためのコアカリキュラムを教員養成に有効に生かすには，学生が履修する各教職課程科目で扱う内容同士の連携や棲み分けが明確で，かつ，それぞれが有機的に結びついている必要がある。とりわけ重要なのが，（ア）「英語科の指導法」（8単位程度以上）と「英語科の専門的事項」（20単位以上）の指導内容の融合・連携，（イ）他の教職科目（特に「教育実習事前指導」と「教職実践演習」）における教科教育の位置づけの明確化，の2点である。（ア）によって，専門的事項の知識が教職にどのように資するのかを履修生は体験的に学ぶことが期待され，（イ）によって，「英語科の指導法」で扱う英語教育の事項と他の教職科目で扱う英語教育の事項とが，相互補完的な役割を担うことが可能になることが期待される。これらに加えて，重要でありながら英語教員養成課程で手薄になりがちな事項として，（ウ）「特別な支援を必要とする生徒への英語教育」を挙げる。これらを包括したプログラムによって，英語教育に必要な事項を教職課程全体として扱うことができる。以上の関係を図示すると，以下のようになる。



1.1　「英語科の専門的事項」と「英語科の指導法」

「英語科の専門的事項」と「英語科の指導法」の指導内容の融合・連携を図るためには，①英語科の専門的事項の授業の中で，中・高等学校での英語指導に役立つ内容や指導方法を工夫する，②英語科の指導法の授業の中で，英語科の専門的事項に関する知識を中・高等学校の英語授業に生かす方法を学ばせる，③それらを他の専門科目の中で扱う，④別途「融合科目」を設定する，などの方法がある。これらを適宜組み合わせて，縦割りでない，科目相互が有機的に結びついた教職課程カリキュラムを実現したい。

＜１＞「英語コミュニケーション」と「英語科の指導法」

教職課程履修生の英語力を高めるためには，「英語科の専門的事項」の科目における指導だけにとどまらず，全学的な取り組みが必要になる。この点については，「2.3　英語力向上（p.184）」に詳細に記載されているので参照されたい。

本項では指導技術面に着目し，「英語コミュニケーション」の各科目の授業において中・高等学校の授業で活用できる指導技術・活動・タスクを用いて指導することを提案したい。学生は，そうした指導を学習者の立場で体験することで，それを教育実習に生かすこと，そして現職教員になったときに授業に組み込んでいくことが容易になるだろう。もちろんそのためには，「英語コミュニケーション」科目担当者が，中・高等学校の学習指導要領，教員養成コアカリキュラム，中・高等学校の英語授業で有用な指導技術について熟知している必要がある。教職課程以外の通常の英語スキル科目と教職課程の「英語コミュニケーション」科目との決定的違いの1つはここにあると言ってもよい。英語教育専門教員が全ての「英語コミュニケーション」科目を担当することはできないが，これらの科目の目標設定，シラバスデザイン，教材選定，授業デザインなどのガイドラインを作成したり，各科目の授業内容をコーディネートしたりする役割を担うことで，教職に資する「英語コミュニケーション」科目の実現が期待できる。

「英語コミュニケーション」科目での指導例として，物語，説明文，ニュースなどを扱う際に，以下のような手順を念頭において，その都度いくつかの活動を取捨選択して組み合わせて指導することが考えられる。この指導手順は，そのまま中・高等学校の題材指導に生かすことができるだろう。

◆「英語コミュニケーション」科目における物語文など指導手順の例

Pre-reading Activities
1）Listening
2）Oral Introduction

In-reading Activities
1）大意把握読み（Skimming）
2）情報検索読み（Scanning）
3）フレーズ・リーディング（Phrase Reading）
4）予測（Prediction）
5）推測（Inference）

Post-reading Activities

A. Reproduction
1）音読（Reading Aloud）
2）パラレル・リーディング（Parallel Reading）
3）リード・アンド・ルックアップ（Read and Look Up）
4）文単位の反復（Sentence Repetition）
5）部分書き取り（Partial Transcription）
6）部分シャドーイング（Partial Shadowing）
7）日本語補助付きシャドーイング（Japanese Assisted Shadowing）
8）和文英訳（Japanese-English Translation）
9）シャドーイング（Shadowing）
10）ディクトコンプ（Dicto-Comp）／ディクトグロス（Dictogloss）
11）リード・アンド・ストップ（Read and Stop）
ペアワークで，生徒が文または文章の途中まで音読し，次に来るセンテンスをパートナーが再生する，

12）部分再生（Partial Reproduction）
13）再生（Reproduction）

B. Reproductionから Productionへの橋渡し

1）なりきり音読（Personalized Oral Reading）
　著者や登場人物になったつもりで，一人称に変換して音読する。
2）なりきりQ & A（Personalized Q & A）
　著者や登場人物になったつもりで，英語の質問に答える。
3）誤り訂正音読（Oral Reading while Correcting Errors）
　本文の一部の単語や情報を間違ったものに書き換え，それを修正しながら読み進めていく。
4）誤り訂正パラレル・リーディング（Parallel Reading while Correcting Errors）

C. Production

1）内容を要約して話す（書く）
2）内容を加えて話す（書く）
3）感想や意見を話す（書く）
4）話の続きを考えて話す（書く）

スピーチ，会話，ディスカッション，ディベートなどの産出活動においても，中・高等学校での英語指導を意識したトピックや指導手順を採り入れていくとよいであろう。

＜２＞「英語学」と「英語科の指導法」

英語教員にとって英語学の知識，とりわけ文法・語法や音声に関する正確で最新の知識は必須である。英語学専門教員と英語教育専門教員の知見を活かす指導の試みとして参考になるのが，東京学芸大学の教職大学院の科目「英語科の内容構成開発と実践A」である。この科目は，小・中・高等学校の英語教育で扱う文法事項について最新の言語学的知見を得るとともに，それらを児童・生徒に効果的に指導する力を身につけることを目標としており，英語教育専門教員と英語学専門教員のティーム・ティーチングで行われている。授業は2週を1セットとして，

(a) 第1週：履修生による指導案事前作成・模擬授業・ディスカッション
(b) 第2週：英語学専門の教員による講義・演習

で構成される。2019年度及び2020年度には，以下の文法事項を扱った。

①基本的な文型（SV/SVC/SVO）の指導
②基本的な文型（SVOO/SVOC）の指導
③現在進行形／未来表現の指導
④現在完了形／現在完了進行形の指導
⑤接触節／関係節の指導
⑥仮定法の指導

これは教職大学院の科目での実践例であるが，英語教育専門教員と英語学専門教員が協働して言語材料の指導に関する授業を組み立てていくことは，学部においても推奨されよう。

＜３＞「英語文学」と「英語科の指導法」

英語文学の科目の中で取り上げる作家・作品の中に，中・高等学校の英語教育で扱える作品を取り入れることを提案したい。ここではその1例として，Raymond Briggs の代表作 *The Snowman* の指導例を挙げる。*The Snowman* はもともと文字のない絵本であるが，これをもとに，台詞がなく映像と音楽だけか

ら構成されるアニメーション版，音楽とナレーションからなるCDが作られ，劇場版も制作され上映されている。以下のような手順で授業を行うことで，学生は中・高等学校の英語授業で生かせる指導技術を体験することができる。以下の手順すべてを授業担当教員が行ってもよいし，一部または全部を履修生に行わせてもよいであろう。

◆ *The Snowman* の冒頭から少年が雪だるまを作ろうと決めるまでのシーンの指導手順

Pre-reading

1）Listening
　CD版のナレーションを聞いて概要をつかむ。
2）Oral Introduction（by the teacher）
3）Watching Video
　DVDやBlu-ray版の映像見る。このときCDを同時再生し，ナレーションを聞きながら映像を見られるようにする。

While-Reading

4）Silent Reading
5）Reading Aloud（after the teacher）
6）Words and Phrases
7）Silent Reading and Memorization
8）Questions and Answers

Post-reading

9）Parallel Reading
10）Read and Look Up
11）Sentence Repetition
12）（Partial）Shadowing
13）Japanese-English Translation
14）Written Partial Reproduction
15）Retelling
　映像を再生しながら，映像に合わせてナレーションを加えていく。

なお，教材として作られた物語ではないauthentic materialsを中・高等学校の英語授業で扱うためには，検定教科書を扱う授業における時間捻出が一番の課題となる。特に高等学校の「コミュニケーション英語」の授業では，「検定教科書の内容を理解させるだけで精一杯で他のことを行う時間的余裕がない」という声をよく聞く。どうしたら時間捻出ができるかを，まず学生に考えさせたい。その上で，解決策として和訳先渡し方式の授業やTanabuモデルの授業などを紹介していくことができるであろう。

＜４＞「異文化理解」と「英語科の指導法」

「異文化理解」の科目で扱う内容の1つとして「英語が使われている国や地域の歴史，社会，文化」がある。「英語圏事情」と呼んでもよいであろう。英語圏事情について理解する過程で，あるいは理解した後のタスクとして，その内容を中・高等学校の英語教育で扱う方法を考える機会を学生に提供したい。ここでは，「異文化理解」の科目の中で，アメリカ合衆国の国歌“The Star-spangled Banner”を高等学校での英語教育に生かせる形で扱う方法を例示する。まず，国歌を扱う視点として，①成立の歴史，②他の国の国歌との比較，③愛国心，という3つの観点を設定し，授業においてこの順番で扱うことを想定する。

①成立の歴史

アメリカ国歌の旋律は有名なものであり，スポーツイベントの際に歌われるのを聞く機会も多いため，聞いたことがないという学生はほとんどいないであろう。しかしながら，その内容や成立の歴史については知らない学生が多いと思われる。アメリカ国歌の歌詞は，アメリカがイギリスと戦争を行っていた1814年に，戦いの様子を夜通し見ていた弁護士Francis Scott Keyによって書かれたもので，4つの連から構成されるが，通常謳われる第1連は，夕暮れに見えていたアメリカ国歌は，世が空けた今見えているか，見えていれば我々は戦いに勝ったのだ，旗は今でも見えているか，と問いかける内容である。この詩の言葉が，もともとイギリスで人気のあった別の曲の旋律に乗せて歌われるようになり，それが1931年に議会で正式に国歌として承認された。

この歴史を理解させる手立てとしては，授業担当教員による英語によるオーラルイントロダクションを行いたい。「異文化理解」科目の趣旨から，ここでのオーラルイントロダクションは大学生のレベルに合わせたものでよいが，中・高等学校の指導に生かせるような手法を取り入れ，関連する絵や写真を見せながら，また，学生たちに考えさせながら，やり取りを通して理解に導いていくことが望まれる。歴史を理解させたあとは，通常歌われる第1連の内容理解をさせたい。

②他の国の国歌との比較

続いて，イギリスなど他の国の国歌と比べてみるとよいであろう。イギリスで国歌として歌われる“God Save the Queen”は1番から3番まであるが，1番は女王を称える歌詞，2番は敵の撃退を望む好戦的な歌詞，3番は「女王に法を守らせたまえ」という立憲君主制の理念の体現する歌詞，という構成になっている。通常は好戦的な2番を除いて1番と3番が歌われる。米・英，そして日本の国歌の歌詞の比較を行ったあとは，他の英語圏の国々をはじめ，世界の国々の国歌を調べ学習で比較させてもよいであろう。

③愛国心

最後に，国歌や国家に準じる愛国的な音楽と愛国心との関連を学ばせたい。第1に，アメリカ国歌の歴史を扱った後，スポーツイベントでの国歌斉唱の動画などを見せると，その雰囲気がよくわかるであろう。第2に，スポーツイベントで国歌が歌われるようになった経緯も，平易な英語で説明するとよい。さらに，こうしたスポーツイベントでの国歌斉唱は日本でも一般的になりつつあり，本家と言えるのがアメリカであるが，実は本家のアメリカで手放しで歓迎されているわけではない事例として，2016年のアメリカンフットボールの試合で国歌斉唱時に起立しなかった選手について示すとよいであろう。これには人種問題が絡んでおり，アメリカの人種問題について触れることもできる。第3に，“God Bless America”など，アメリカの他の愛国的な曲を紹介するよいであろう。第４に，愛国心教育の例として，学校や議会などで唱えられる国歌と国旗への忠誠の誓い（Pledge of Allegiance）を扱うとよい。その経緯，言葉の変遷，そして“under God”という言葉にまつわる議論や裁判について触れることで，アメリカ文化の多面的な理解につながっていくことが期待される。イギリスについても，第2の国歌とも言える愛国的な歌詞を持つ“Land of Hope and Glory”を紹介し，大英帝国の領土と勢力の拡大を高らかに歌い上げている歌詞であることを理解させることができる。この曲は，ロンドンで毎年8週間にわたって開催されるクラシック音楽祭である「BBCプロムス」の最終夜で聴衆とともに歌われ，大いに盛り上がるのが常であるが，2020年度においては演奏しない方針をBBCが明らかにすると，首相も巻き込んだ議論が起こり，歌詞無しで演奏することに変更されたのち，最終的に歌われることになった。こうした事実を知ることで，イギリス内にも多様な意見が存在することにも目を向けさせることができる。また，これらを英語

で説明することで，単に知識だけでなく指導に生かすヒントを学生に与えることができるだろう。

1.2 「教育実習事前指導」「教職実践演習」その他の教職科目との連携

教育実習事前指導や教職実践演習の授業において教科教育の内容を扱う際に，授業担当者が何を扱うべきか迷うケースもある。ここでは，<1>教育実習事前指導において，実際の中・高等学校における英語の授業をイメージしやすくする指導を取り入れる，<2>教職実践演習において，年間を通した目標設定・指導計画・評価計画を考えさせる，の2点を挙げたい。

＜１＞中・高等学校における英語の授業をイメージしやすくする指導

教育実習事前指導においては，第1に，可能な範囲で中・高等学校の現職英語教員を講師として招き，指導を仰ぎたい。その際には，①現職教員が学生を対象に模擬授業を行う，②学生代表の模擬授業を現職教員が参観する，の2つの方法が考えられる。①においては，模擬授業実施後に質疑応答やディスカッションを行うとともに，それらを踏まえて，同じ単元の同じ個所を指導するための学習指導案を学生に作成させ，時間が許せば実際に授業を行わせるとよいだろう。また，現職教員の指導例をそのまま受け入れるのではなく，批判的に考察させることも重要である。②においては，学生の模擬授業について現職教員からフィードバックを得たりクラスでディスカッションをしたりするとともに，そのあと指導の改善案を作成させたり，改善案に基づいた模擬授業を行わせることが考えられる。

第2に，実習期間中には可能な範囲で他教科の授業も参観することを勧めるとよいであろう。英語科の授業運営には，英語科独自の部分と他教科と共通する部分がある。後者には，すべての教科に共通する部分と，一部の教科に共通する部分がある。他教科と比較することで，英語科の独自性と他教科との共通点の両方が見えてくる。それによって，中・高等学校の教育全体を通して注意すべきことと，複数の教科で特に配慮が求められること，そして英語科独自の工夫をしなければならないことが明らかになってくる。

英語の授業が他教科と最も異なる点は，挨拶や指示文などのクラスルーム・イングリッシュの使用や内容説明の際のオーラルイントロダクションなど，授業の多くの部分が英語で行われることである。一方，英語の授業が体育や音楽の授業の共通する点として，クラスメートの前でパフォーマンスをしなければならないことが多いことが挙げられる。体育の授業では，他の生徒の前で跳び箱を飛ぶ，鉄棒で逆上がりをする，マット運動をする，1500メートルを走る，50メートルを泳ぐ，などといったことがある。音楽の授業では，クラスメートの前で歌ったり，リコーダーを吹いたりする機会がある。そして英語の授業では，クラスメートの前で音読したり，スピーチをしたりする活動がある。これらの機会は，得意な生徒にとってはスポットライトを浴びてヒーローになれる至福のひとときとなりうるが，苦手な生徒にとっては一歩間違えば晒し者になって恥をかく屈辱的な時間にもなりうる。苦手な生徒も失敗を恐れずに積極的にパフォーマンスができる雰囲気づくりや，クラスメートの失敗をあざ笑ったりしないことを徹底する生活指導は，英語科だけでなく他教科との連携によって生まれうるものであり，その点でも他教科の授業参観の意義は大きい。

＜２＞年間を通した目標設定・授業計画・評価計画

4年次後期に開設される教職実践演習では，第1に，中・高等学校の英語教育での年間を通した目標設定・授業計画・評価計画を立てさせることを提案したい。「英語科の指導法」で実施する模擬授業では，1単元または1回の授業を単位として目標設定・授業計画・評価計画を立てることが多いが，現職教員に

なった場合には，まず年間指導計画を立てなければならない。その際に，学期や年間を通しての指導目標を設定し，それをもとに各単元の目標設定をするとともに時間配分を決めることになる。そして，指導の効果を測るための評価の時期・方法・規準を定めなければならない。教科書の各単元の指導内容も年間指導計画と密接に関わっている。例えば，教科書の題材を年間通して5回，4回，3回と繰り返し扱うラウンド方式で授業を行うためには，年間指導計画→各ラウンドの指導計画→各単元の指導計画→各授業の指導計画，という順に指導内容を詰めていくことが不可欠である。また，パフォーマンス評価を実施するためには，年間を見通して指導の中に産出活動を組み込んでいき，それを評価する機会を確保しなければならない。さらに，教科書外のauthentic materialsを取り入れる場合には，その時間を捻出しなければならない。特に高等学校の「コミュニケーション英語」の授業において，教科書本文の内容理解だけで手いっぱいで他のことを扱う時間的余裕がないという場合には，和訳先渡し方式やTanabu Modelなどを適宜取り入れて，時間を捻出する必要がある。教科書全体を見通した上で，①教科書本文の内容理解を重点的に行う単元，②教科書本文の理解に要する時間を短縮して産出活動に重点を置く単元，③教科書本文を扱う時間全体を圧縮してauthentic materialsを組み込む単元，などを割り振っていく必要がある。

第2に，学校行事の活用についても年間指導計画の中で考えさせたい。一つには，英語教育に資する学校行事の開催案を考えさせるとよいであろう。スピーチコンテスト，留学生交流会，あるいは英語劇，英語での合唱祭などのアイディアが出てくるかもしれない。行事が決まったら，その実現のために，その行事を年間のどこに位置づけ，そのための指導を授業のどこに位置づけるかを考えなければならない。もう一つには，修学旅行や文化祭など，既存の学校行事を英語教育に生かす手立てを学生たちに考えさせたい。中高生たちにこれらの準備段階において英語でプランを作成・発表させたり，終了後に英語で感想文を執筆・発表させたりするには，年間指導計画の中で時間捻出するという過程が欠かせない。

第3に，CLIL の実際を学ばせるため，学生に中・高等学校の他教科の科目を1つ選ばせ，その科目の学習指導要領と検定教科書をもとに年間の指導内容を確認させ，英語の授業に何をいつどのように取り入れられるかを考えさせてもよい。中・高等学校は教科担任制を採っているため，教科縦割りの指導や業務が多く，多忙な中で他教科のことを考える余裕はないことが多いが，こうした体験を学生時代にしておくことは，教師になってからも他教科への興味・関心を持ち続けるための一助となるのではないかと思われる。

教職実践演習において年間指導計画に基づいてこれらの指導を考えさせることで，4月から現職教員として長期的見通しに立った授業展開がしやすくなることが期待される。

1.3　特別な支援を必要とする生徒への指導

教科教育において「英語科の指導法」で手薄になりがちなのが，特別な支援を必要とする生徒への指導である。「中・高等学校教員養成課程 外国語（英語）コアカリキュラム中等教育コアカリキュラム」では，「英語の指導法」において「生徒の特性・習熟度への対応について理解し，授業指導に生かすこと」を求めているが，「英語の指導法」において実際に扱えるのは，習熟度への対応までであることが多いと思われる。一方，教職課程コアカリキュラムには「特別の支援を必要とする幼児，児童及び生徒に対する理解」という項目があり，教職課程の中で必ず扱うことになっているが，各教科の指導に対応しているわけではない。特別な支援を必要とする生徒への教科教育の手法については，どこかで扱わなければ，学生たちは何も知らないまま教員になって，その事態に直面して困ることになる。

＜１＞ 特別支援学校で学ぶ生徒たち

特別支援学校で学ぶ生徒たち，特に聴覚障害・視覚障害を持つ生徒たちへの対象の英語教育については，基礎的な理解ができるような指導を行いたい。聴覚障害や視覚障害の諸相を理解すること自体，多くの時間を要することであり，また，特別支援学校を訪問して授業を見学することも難しいケースが多いと思われるが，これらの学校での英語授業の様子をビデオで撮影させていただく，授業担当教員への取材から情報を得て学生に伝える，などの工夫があってよい。ただし，各学校や教員へ過重な負担がかからないように，こうした授業映像や取材データについては全国の大学の教職課程で共有できるような仕組みの構築が必要であろう。

＜２＞普通学級で学ぶ生徒たち

普通学級で特別な支援を必要とする生徒たちとして，ここでは，①発達障害を持つ生徒たち，②色覚障害を持つ生徒たち，③外国にルーツを持つ生徒たち，について述べる。

① 発達障害を持つ生徒たちへの英語教育

発達障害には，全般的な知的発達に遅れはないものの，言語能力（とりわけ読み書き）や計算能力の面で障害のある「（限局性）学習障害」（LD），社会的コミュニケーションや他人とのやりとりが苦手であるなどの特性を持つ「自閉症スペクトラム症」（ASD），活動に集中したり順序立てて活動に取り組んだりすることが苦手であるなどの特性を持つ「注意欠陥多動性障害」（ADHD）などがあり，そうした症状ないしは傾向を持つ生徒が普通学級に在籍することは珍しくない。いずれも英語科のみならず各教科の教育において合理的配慮の必要な生徒たちであるが，教員養成課程における教科教育の指導において，こうした特性を持つ生徒たちへの対応について十分な指導が行われているとは言えないのが現実である。

学習障害，なかでも読み書きを苦手とするディスレクシアの生徒たちへの配慮は，各教科の授業の受講や出された課題の遂行の様々なフェイズで必要になってくる。とりわけ英語のリーディング及びライティングの指導においては，特段の配慮を要するものである。しかしながら，教員養成課程の中でこれらの対応はほとんどできていないのが実情であり，コアカリキュラムにおいてもきちんとした位置づけを与えられていない。学会でも同様の事情があり，英語教育関係の学会大会や学会紀要で学習障害を持つ生徒への英語指導を扱ったものは少なく，他方，学習障害の学会大会等で英語教育が取り上げられることは少ない。

一方，自閉症スペクトラム症など，社会的コミュニケーションを苦手とする人への配慮は，社会全体として取り組むべき大きな課題である。高度に機械化が進んだ現代においては，職人芸的な仕事は機械に任せ，対人コミュニケーションが不可欠な仕事を人間が行う，という棲み分けが進みつつある。こうした傾向が強まるにつれて，対人コミュニケーションの苦手な人の活躍の場は狭められていく。教育現場においても，アクティブ・ラーニングが推奨される中，生徒がディスカッションやプレゼンテーションなどに従事する機会が今後ますます増えていくことが予想される。コミュニケーション能力の育成を目標に掲げる英語教育はその先頭に立っている感があり，一人で静かに英文を読んだり練習問題を解いたりすることは得意でも，対人コミュニケーションが苦手な生徒にとっては，英語の授業がますます辛い時間になっていく恐れがある。

教育学部であれば，特別支援教育の専門教員の協力を得て，支援の必要な生徒への対応について英語教育に生かせる知見を得たり，特別支援を専攻する学生を交えて英語教育における配慮を考える機会を設けたりすることも可能であろう。しかしながら，これらはどの大学でもできることではない。英語教

育専門教員が自ら開拓していかなければならない領域であるとも言えるが，一方で，学生とともに学んでいく姿勢も重要であろう。例えば，聴覚障害の生徒への英語指導を例にとると，学生に，調べ学習の課題を課すとともに，模擬授業において聴覚障害の生徒役を設定し，聴覚障害を持つ生徒がいることを仮定した指導を考えさせる，といった試みができるであろう。大学教員への研修機会の確保も重要課題である。研修と言えば，小・中・高等学校教員が対象で，大学教員は専門家の立場で講師として指導することが多いが，教員養成に携わる大学教員自身が，専門外のことを学ぶ研修の機会も必要である。

② 色覚障害を持つ生徒たち

色覚障害の割合は，男性は約20人に1人，女性は約500人に1人と言われており，男性の割合が高いのが特徴である。40人学級で半分の20人が男子生徒だとすると，1クラスに1人程度，色覚障害の男子が在籍していることになる。

現在の検定教科書では，色覚障害の生徒たちが見やすいように，専門家の協力を得てカラー・ユニバーサルデザインに基づいた配色が採用されている。教師による板書，パワーポイントなどのスライド，印刷教材などでの色使いにも色覚障害者への配慮が求められる。これは全教科に共通する配慮事項なので，本来，教職課程コアカリキュラムで実現すべき事項であろう。

③ 外国にルーツを持つ生徒たち

教職課程コアカリキュラムにおいて，「特別の支援を必要とする幼児，児童及び生徒に対する理解」の中に，「(3) 障害はないが特別の教育的ニーズのある幼児，児童及び生徒の学習上又は生活上の困難とその対応を理解する」という項目（一般目標）があり，到達目標として「1) 母国語や貧困の問題等により特別の教育的ニーズのある幼児，児童及び生徒の学習上又は生活上の困難や組織的な対応の必要性を理解している」が設定されている。

外国にルーツを持ち，日本語を母語としない生徒たちにとっての学校での英語学習については，他の生徒と学習開始時期が近いため，他の教科に比べて困難が少ないというケースがある一方で，未習熟の日本語を媒介言語としてもう1つの言語である英語を学ばなければならない点でハードルが高く，多くの学校や教師がこうした生徒の英語指導に多くの困難を抱えている現状がある。教職課程履修者は，日本の学校で学ぶ外国にルーツを持つ生徒の実態を知るとともに，文部科学省による『学校教育におけるJSLカリキュラム（中学校編）－英語科－』についてもしっかり学んでおく必要がある。

以上で示したような特別な支援を必要とする生徒への教科教育について，教員養成課程で明確な位置づけを与えることが必要である。「中・高等学校教員養成課程 外国語（英語）コアカリキュラム中等教育コアカリキュラム」の改訂時には，この視点が盛り込まれることが望まれる。

2. 具体的なプログラム

2.1　指導法に関する科目

＜１＞シラバス

以下の具体案は，第1章の内容をもとに，教科の指導法に関する科目（8単位標準）の授業の具体を示すことを目的として，独自に作成した提案であり，特定の大学の具体案を紹介するものではない。あくまでも具体案であるため，大学の状況に合わせて適宜修正したり，いくつかの具体案を組み合わせたりするなどの工夫が必要だろう。便宜上，以下では科目名を「英語科教育法Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ」（各2単位，1コマ90分を15回）としている。

◆具体案

【①先に理論をまとめて扱った後，実践を行う具体案】

英語科教育法Ⅰ

＜到達目標＞

学習指導要領に書かれた内容を理解し，学校英語の目標や授業のあり方について理解することができる。

＜授業計画＞

1	オリエンテーション（ガイダンス，英語教育の現状と課題，学校英語の目指すもの）
2	求められる英語教師像，自分の学習体験から学ぶ
3	授業研究－生徒の学習意欲を高める授業
4	学習指導要領と教科用図書（検定教科書）
5	中学校学習指導要領と中学校の英語授業
6	高等学校学習指導要領と高等学校の授業
7	小学校学習指導要領と外国語活動及び外国語の授業
8	学習到達目標に基づく授業の組み立て（CAN-DOリスト）の設定と指導計画
9	言語活動の考え方，英文法とコミュニケーション
10	音読指導
11	文字指導と音声指導
12	語彙・表現指導，辞書指導
13	第二言語習得に関する知識とその活用
14	外国語教授法と英語の授業
15	これからの英語教育の方向性，小中高の連携
評価	授業への参加（50%），課題（期末課題含む）（40%），小テストなど（10%）

【解説】

英語科教育法Ⅰでは，コアカリ学習項目の「カリキュラム / シラバス」を中心に授業を構成する。特に学習指導要領の内容の理解に主眼を置く。

英語科教育法Ⅱ

＜到達目標＞

授業のさまざまな場面において，生徒の実情に応じて適切な指導法を選択することができる。

＜授業計画＞

1	オリエンテーション（学習指導要領と英語の授業）
2	授業プランと展開（1）－指導計画と指導案
3	授業プランと展開（2）－授業の組み立てと授業の進行
4	各技能の指導方法（1）－聞くこと・話すこと（やり取り・発表）の指導
5	各技能の指導方法（2）－読むこと・書くことの指導
6	各技能の指導方法（3）－領域統合型の言語活動の指導
7	各技能の指導方法（4）－発音指導，音読指導
8	各技能の指導方法（5）－文法指導，ドリル，スピーチ指導
9	指導技術（1）－英語で進める授業，英語でのインタラクション
10	指導技術（2）－ペアワーク，板書とハンドアウト，ICTの活用
11	ALT等とのティーム・ティーチング
12	生徒の特性や習熟度に応じた授業，自学自習を促す指導
13	テスト（筆記テスト・パフォーマンステスト）と評価
14	試験問題作成について－問題作成演習
15	教科書と異文化理解に関する指導
評価	授業への参加（50%），課題（期末課題含む）（40%），小テストなど（10%）

【解説】

英語科教育法Ⅱでは，Ⅰで学んだことを基に，コアカリ学習項目の「生徒の資質・能力を高める指導」と「授業づくり」を中心に授業を構成する。

英語科教育法Ⅲ

＜到達目標＞

授業の目的を達成するための指導案をグループで協力しながら作成し，その指導案にそって生徒の言語活動を中心とした授業を行うことができる。

＜授業計画＞

1	よりよい英語授業とは，中学校の実践事例研究
2	指導案の書き方と見方，マイクロ・ティーチングの方法と準備
3	中学校　マイクロ・ティーチング－中学1年生文法事項
4	中学校　マイクロ・ティーチング－中学2年生文法事項
5	中学校　マイクロ・ティーチング－中学3年生文法事項
6	中学校　マイクロ・ティーチング－中学1年生教科書本文の内容理解
7	マイクロ・ティーチング－中学2年生教科書本文の内容理解
8	マイクロ・ティーチング－中学3年生教科書本文の内容理解
9	高等学校の実践事例研究
10	マイクロ・ティーチング－オーラル・イントロダクション
11	マイクロ・ティーチング－生徒とのインタラクション
12	マイクロ・ティーチング－教科書本文の内容理解
13	マイクロ・ティーチング－文法指導
14	マイクロ・ティーチング－言語活動
15	マイクロ・ティーチングのまとめ
評価	授業への参加（50%），課題（期末課題含む）（40%），小テストなど（10%）

【解説】

英語科教育法Ⅲでは，Ⅰ，Ⅱで学んだことを生かし，授業観察，授業体験，模擬授業を行いながら，自分で授業が作れるようにする。

英語科教育法Ⅳ

＜到達目標＞

授業の目的を達成するための指導案を作成した上で，その指導案にそって生徒の言語活動を中心とした授業を英語で行うことができる。

＜授業計画＞

1	マイクロ・ティーチングに向けてのガイダンス
2	指導案の書き方と見方，マイクロ・ティーチングの方法と準備
3	中学校　マイクロ・ティーチング－文法導入
4	中学校　マイクロ・ティーチング－文法定着のための言語活動
5	中学校　マイクロ・ティーチング－教科書本文の導入
6	中学校　マイクロ・ティーチング－教科書本文の内容理解
7	高等学校　マイクロ・ティーチング－教科書本文の導入
8	高等学校　マイクロ・ティーチング－教科書本文の内容理解
9	高等学校　マイクロ・ティーチング－題材を活用したコミュニケーション活動
10	教育実習校種　マイクロ・ティーチング－到達目標に即した授業作り
11	教育実習校種　マイクロ・ティーチング－文法導入
12	教育実習校種　マイクロ・ティーチング－文法導入
13	教育実習校種　マイクロ・ティーチング－文法定着のための言語活動
14	教育実習校種　マイクロ・ティーチング－教科書題材の導入
15	教育実習校種　マイクロ・ティーチング －教科書本文の内容理解
評価	授業への参加（50%），課題（期末課題含む）（40%），小テストなど（10%）

【解説】

英語科教育法Ⅳでは，教育実習で担当する授業ができる力を育成するために，マイクロ・ティーチングを中心に授業を構成する。

【②理論と実践をペアにして進めていく具体案】

英語科教育法Ⅰ

＜到達目標＞

学習指導要領の内容，これまでの英語教授法，第二言語習得に関する知識を理解し，それを授業づくりにどう生かすかを考えることができる。

＜授業計画＞

1	学習指導要領（英語教育の目標）
2	学習指導要領から見る小・中・高等学校の連携
3	英語教授法から見た学習指導要領①（文法訳読式教授法からCLT）
4	英語教授法から見た学習指導要領②（TBLT，Focus on form）
5	学習指導要領と小中高検定教科書
6	学習到達目標（CAN-DO）に基づく授業の組み立て

7	第二言語習得の3つの理論（インプット仮説，インタラクション仮説，アウトプット仮説）
8	学習指導要領（聞くこと）と英語の授業作り・授業観察
9	学習指導要領（話すこと）と英語の授業作り・授業観察
10	学習指導要領（読むこと）と英語の授業作り・授業観察
11	学習指導要領（書くこと）と英語の授業作り・授業観察
12	学習指導要領（文法指導）と英語の授業作り・授業観察
13	学習指導要領と英語の評価
14	教材選定の観点（異文化理解の指導）
15	まとめ
評価	授業への参加（50%），課題（期末課題含む）（40%），小テストなど（10%）

【解説】

英語科教育法Ⅰでは，「カリキュラム / シラバス」，「第二言語習得」，「授業観察」の項目を主に扱う。この段階では，学生に授業に対するイメージを持ってもらうために，8から12の授業観察は，文部科学省の「mextchannel」の授業ビデオを視聴する。

英語科教育法Ⅱ

＜到達目標＞

英語科教育法Ⅰで学んだ理論，知識をもとに，実際にマイクロ・ティーチングを行いながら，中，高等学校の英語の1時間の授業の組み立て方，様々な技能を育成する言語活動，指導技術の習得ができる。

＜授業計画＞

1	英語で進める授業，英語でのインタラクション
2	教材研究，ICT等の活用，生徒の特性や習熟度に応じた指導
3	聞くこと・話すこと（やりとり・発表）の指導，音声指導
4	授業体験，マイクロ・ティーチング
5	読むこと・書くことの指導，文字指導
6	授業体験，マイクロ・ティーチング
7	領域統合型の言語活動の指導
8	授業体験，マイクロ・ティーチング
9	文法・語彙・表現の指導
10	授業体験，マイクロ・ティーチング
11	ALT等とのティーム・ティーチング
12	授業体験，マイクロ・ティーチング
13	異文化理解の指導
14	授業体験，マイクロ・ティーチング
15	まとめ
評価	授業への参加（50%），課題（期末課題含む）（40%），小テストなど（10%）

【解説】

英語科教育法Ⅱでは，「生徒の資質・能力を高める指導」，「授業づくり」，「授業体験」の項目を主に扱う。コアカリの項目について学んだら，その次の時間では，授業体験，授業観察を通して，授業作りの具体を学び，イメージを持たせる。

英語科教育法Ⅲ

＜到達目標＞

英語科教育法Ⅰ，Ⅱで学んだ知識，理論，指導技術等を生かして，中，高等学校の教科書を使った授業を組み立て，マイクロ・ティーチングを行うことができる。

＜授業計画＞

1	学習到達目標に基づく授業の組み立て　教科書分析
2	学習指導案の作成
3	マイクロ・ティーチング（文法事項導入）中学校
4	マイクロ・ティーチング（文法事項導入）高等学校
5	マイクロ・ティーチング（文法事項定着のための言語活動）中学校
6	マイクロ・ティーチング（文法事項定着のための言語活動）高等学校
7	マイクロ・ティーチング（教科書本文の導入）中学校
8	マイクロ・ティーチング（教科書本文の導入）高等学校
9	マイクロ・ティーチング（教科書本文の内容理解）中学校
10	マイクロ・ティーチング（教科書本文の内容理解）高等学校
11	マイクロ・ティーチング（単元末の言語活動）中学校
12	マイクロ・ティーチング（単元末の言語活動）高等学校
13	観点別学習の評価・評価規準の設定
14	パフォーマンス評価
15	まとめ
評価	授業への参加（50%），課題（期末課題含む）（40%），小テストなど（10%）

【解説】

英語科教育法Ⅲでは，Ⅰ，Ⅱで授業づくりについてイメージを掴んだことを生かし，自分で模擬授業を行う。また，行った授業をどのように評価に生かすか，学習評価についても学ぶ。

英語科教育法Ⅲの別パターンとしては，学生がⅠ，Ⅱで学んだ知識，理論を生かして，まずマイクロ・ティーチングを行い，次の時間に自分のマイクロ・ティーチングを振り返り，改善案を作るという方法もある。以下がその例である。

＜授業計画＞

1	学習到達目標に基づく授業の組み立て　教科書分析
2	学習指導案の作成
3	マイクロ・ティーチング（文法事項導入）中学校
4	授業の振り返りと改善案作成
5	マイクロ・ティーチング（文法事項導入）高等学校
6	授業の振り返りと改善案作成
7	マイクロ・ティーチング（文法事項定着のための言語活動）中学校
8	授業の振り返りと改善案作成
9	マイクロ・ティーチング（文法事項定着のための言語活動）高等学校
10	授業の振り返りと改善案作成
11	マイクロ・ティーチング（教科書本文の導入）中学校
12	授業の振り返りと改善案作成
13	マイクロ・ティーチング（教科書本文の導入）高等学校
14	授業の振り返りと改善案作成
15	観点別学習の評価・評価規準の設定，パフォーマンス評価
評価	授業への参加（50%），課題（期末課題含む）（40%），小テストなど（10%）

英語科教育法Ⅳ

＜到達目標＞

英語科教育法Ⅰ，Ⅱ，Ⅲで学んだ知識，理論，指導技術等を生かして，教育実習での授業を想定し指導案を作成し，模擬授業を行い，振り返り，改善し，より良い授業を行うことができる。

＜授業計画＞

1	学習指導案の作成
2	模擬授業の計画と準備，教材研究・ICT等の活用
3	観点別学習状況の評価・評価規準の設定
4	模擬授業実施（中学校）（1）言語活動を中心に
5	模擬授業実施（高等学校）（1）言語活動を中心に
6	振り返り，模擬授業（1）の改善
7	改善した模擬授業実施（中学校）（1）言語活動を中心に
8	改善した模擬授業実施（高等学校）（1）言語活動を中心に
9	授業観察（自分の授業との比較）
10	模擬授業の計画と準備，教材研究・生徒の特性や習熟度に応じた指導
11	模擬授業実施（中学校）（2）教科書本文を活用して
12	模擬授業実施（高等学校）（2）教科書本文を活用して
13	振り返り，模擬授業（2）の改善
14	改善した模擬授業実施（中学校）（2）教科書本文を活用して
15	改善した模擬授業実施（高等学校）（2）教科書本文を活用して
評価	授業への参加（50%），課題（期末課題含む）（40%），小テストなど（10%）

【解説】

英語科教育法Ⅳでは，「模擬授業」，「授業観察」，「学習評価」についての項目を主に扱う。

【③校種ごとに行う具体案】

英語科教育法Ⅱで中学校，Ⅲで高等学校を扱うシラバスも可能である。これについての具体例は，『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成28年度報告書』（p.147）を参照のこと。

＜２＞指導内容

英語科の指導法については8単位程度を想定し，コアカリキュラムで指導項目が定められている。各大学では英語科教育法4科目を設定し，それぞれ2単位科目（1コマ90分を15回）として，合計で60回の授業の中で全ての項目を扱う場合が多いと考えられる。この限られた時間の中で，学生たちが実践的な指導力を身につけるために，さまざまな工夫が求められることになる。コアカリキュラムで示されている指導項目は多岐にわたるため，扱う項目に軽重をつけることが前提になる。また，どの項目に関しても教室での指導を前提にしているため，教員からの講義だけで終わらせることなく，講義から得た知識を中学校や高等学校の英語の授業でどのように応用していくのかを考える場面を設定することも不可欠であり，その工夫が求められる。さらに，教室をイメージした学習を行うために，学生が事前課題として授業の映像を視聴したり，具体的な指導法についての課題図書を読んだりしたうえで講義に参加し，学生同士のディスカッションなどを行うことによって，各項目の理解を深めていくことも必要であろう。

以下，本報告書の第2部第1章の英語科の指導法を担当している教員対象アンケート結果，及び大学教

員を対象としたインタビュー調査結果，さらに本研究グループで英語科の指導法を担当している教員の実践例も踏まえて，コアカリキュラムの項目ごとに工夫できる点をまとめていくこととする。

◆カリキュラム／シラバス

【学習指導要領】

・学習指導要領を事前課題として熟読させ，授業内では理解を深めるためのディスカッションを行ったり，授業映像を視聴させたりする。
・指導案を執筆させる中で，適宜，学習指導要領を参照させる。

【解説】

限られた時間の中で，学習指導要領に示された内容を網羅して解説する時間を確保することは不可能である。また，教員からの解説だけでその趣旨を理解したり，具体的な授業での指導イメージを持ったりすることも難しい。そこで，『中学校学習指導要領解説 外国語編』『高等学校学習指導要領解説 外国語編』を事前課題として熟読させた上で，教員がポイントを絞って解説を加えたり，学生同士で理解を深めるためのディスカッションを行ったり，学習指導要領の趣旨を踏まえて実践されている授業映像を視聴したりすることなどが考えられ，そうした複合的な工夫によって講義の時間の効率化を図ることができるだろう。特に，大学在学中に新しい学習指導要領が告示されたり施行されたりする場合には，学習指導要領の歴史や主たる改訂の要点や流れについて比較しながら解説をしたり，その趣旨を踏まえた授業実践を映像で紹介して具体化することなども考えられる。また，実際の検定済教科用図書（以下，教科書）を用いて指導案を執筆させる中で，学習指導要領を常時参照させることで指導し，理解を深めさせることも可能である。

【教科用図書】

・学習指導要領改訂前と後の教科書を比較分析させることで，現行版教科書の特徴を学ばせる。
・複数の教科書を使用して模擬授業を行わせる。
・教科書の編集委員経験者を外部講師として招き，教科書作りについて講話してもらったり，模擬授業に参加してもらったりする。

【解説】

学習指導要領が反映された教科書について理解し，その活用方法を知ることは不可欠である。現在使用されている教科書について詳しく分析をすることは当然であるが，現行の学習指導要領改訂前の教科書と比較分析をすることで，現在の教科書の特徴を具体的に知ることもできるだろう。中学校の教科書については6種類ということ，そして難易度にも大きな差はないため，基本的には1つの教科書の3学年分を使用することで，指導内容や教科書の構成についての概要を知ることができる。しかし，教育実習に向けては，各自が実際に使用する教科書を用いて模擬授業を行うことが必要となるであろう。また，高等学校の教科書に関しては種類が多いことに加え，難易度も大きく異なるものが用意されているため，複数の教科書を使用して模擬授業を行うことも考える必要があるだろう。教科書の編集の意図などについて詳しく知るためには，教科書の編集委員を務めている教員が授業を担当したり，編集委員の方を外部講師として授業に参加してもらったりすることなども有効な手段である。

【目標設定・指導計画】

・目標設定や指導計画を立案させる際に，言語活動を意識させる。
・作成した学習指導案を学生同士で検討させる機会を設ける。

【解説】

なぜ指導計画が必要なのか，どのように指導目標の設定を行うのかを理解するためには，指導目標をどのように言語活動として具体的化させるかを考えさせることが必要であろう。学生が指導案を作成する際には学習到達目標を記述するが，授業の展開の中において，その目標が達成できているかの評価を行う言語活動が適切に設定されていない場合も多くみられる。この言語活動を意識して設定することにより，ゴールからのバックワードデザインを考える機会となる。このことは，CAN-DOリストから，中長期的な指導計画を考える際にも参考になる考え方を身につけることに寄与するであろう。学習指導案については，教員からの添削指導にとどまらず，学生同士で検討させる機会を設けることで，指導案を客観視して見る目を養い，自分が指導計画を作成したり，指導案を書くための力をつけたりすることにつながるであろう。

【小・中・高等学校の連携】

・地域の小学校を訪問し，授業見学や学習支援ボランティアなどを体験させる。
・小学校と中学校の授業映像を視聴し，校種による違いを比較分析させる。
・それぞれの校種で使用している教科書を大学内で閲覧可能にする。

【解説】

校種間の連携に関しての課題としては，小学校外国語での学びを踏まえて中学校や高等学校での授業を行うための知識や指導技術の育成があげられる。小学校教員養成課程を持つ大学においては，中高課程とともに小学校課程の指導法の講義を履修することも考えられるが，そうではない大学においてはさまざまな工夫が求められる。

履修学生の数が少ない場合には，地域の小学校を訪問して授業見学を行ったり，学習支援ボランティアなどを体験したりすることによって，小学校での授業の様子を知る機会を設けることが可能であろう。履修学生の人数が多い場合には，小学校の授業映像と中学校や高等学校の授業映像を視聴することで，校種間による目標設定や授業の進め方の違いなどについてディスカッションを行い，意識させることなどが必要となる。特に，小学校と中学校で同じ言語材料（can，want to，過去形など）を指導する場面を比較することなどは，指導方法の違いを知る有効な手段となる。また，実際に小学校で指導している教員を外部講師として招き，話を聞くとともに授業体験の機会を設けることなども，学生にとっての学びの機会となる。

授業観察や授業体験以外にも，それぞれの校種で使用している教科書研究を行うことも必要である。教職課程の学生が，小中高の全ての校種の教科書に触れる場所を学内に設けておくことが必要であろう。

◆生徒の資質・能力を高める指導

4技能5領域の指導については，それぞれに共通する指導の工夫が多く，授業の中においては統合的に指導する場面が中心となるため，合わせて記述していくこととする。

【聞くことの指導】
【読むことの指導】
【話すこと（やり取り・発表）の指導】
【書くことの指導】
【領域統合型の言語活動の指導】

・学生自身がこれまで受けてきた英語の授業を振り返らせ，互いの経験を比較させたうえで，授業中に行う活動を考えさせたり，模擬授業を行わせたりする。
・教科書本文を利用して様々な種類の発問を作成させる。
・現場の教員（付属校を持つ大学の場合は付属校の教員など）を講師として招く。
・ディベートなどの活動を学生たちに体験させ，その様子を録画したものを視聴させる。

【解説】

学生たちは，自分たちが中学校と高等学校で受けてきた英語の授業の概念に縛られがちであり，新しい学習指導要領で示されている内容に沿った指導形態をイメージできない場合が多く見られる。このため，学習指導要領を読み込んだだけの学習では，教室での指導方法の具体化を行なうことは難しい。そこで，学生自身がこれまでに受けてきた英語の授業を振り返る時間を設け，求められる授業作りや指導法，言語活動の在り方などと比較させながら学習を進めることが考えられる。そこであげられた相違点などをもとに，授業中に行なうコミュニケーション活動などを学生自身に考えさせ，模擬授業で実践してディスカッションを行なうなどの機会を設けることが必要であろう。また，「読むこと」の意味を捉えさせるために，教科書本文の事実発問を作成するトレーニングに加えて，行間を読む推論発問などを学生が作成し，模擬授業の中で実践させることも必要となる。

50分の授業の中での各技能の扱いについての理解を深めるために，学生自身が教科書を用いて，授業のどの場面でどのように知識を与え，その知識を技能として活用する場面をどのように作るかを考えることによって，具体的な指導方法を提案させるという実践例もある。教育実習を前に指導する場合には，付属校を持つ大学であれば，学生の多くが教育実習を行なう付属中学校や付属高等学校の英語教員から事前に助言をいただいたり，地元の公立学校で豊富な経験を持つベテランの教員から指導をいただいたりする機会を設けることも有効であろう。

高等学校の科目である「論理・表現」での指導に備えて，英語のディベートを学生自身に体験させ，自分たちのパフォーマンスを映像として録画し，活動後にそれを授業用に作成したWeb上のサイト（YouTubeのチャンネルや，大学が提携しているWebサービスなど）にアップして学生が閲覧できるようにし，自分たちのパフォーマンスをモニターして，指導に生かすように活用することもできるだろう。

【英語の音声的な特徴に関する指導】

・「音声学」の授業で学んだ理論を振り返りながら，聴解練習，発音練習，模擬授業に取り組ませる。

【解説】

学生自身が英語のモデルとなる発音ができている場合でも，生徒に対しての発音指導の方法と知識を持ち合わせていない場合も多い。英語の音声的な特徴に関する指導については，「音声学」や英語の発音に特化した授業の中で，英語の音素の音声的特徴を理解した上で聴解して耳を鍛え，さらに実際の練習や録音演習を通して，理論にとどまらず体感的に定着させるような指導を行うことも必要となるであろう。

【文字に関する指導】

・小学校で行われている文字指導について学ぶ機会を設ける。

【解説】

音と文字の関係でつまずく生徒が多い現状を踏まえ，フォニックスについての知識を学ぶ場を用意することも有効であろう。特に，音声に慣れ親しんできた小学校英語をどのように中学校でつないでいくかを理解するためにも，小学校での学習状況を指導する必要がある。

【語彙・表現に関する指導】

・単語を文脈で捉えていく学びを体験させる。
・学生自身が辞書を活用しながら英作文する体験を通して，中高における辞書指導について考えさせる。

【解説】

単語集を暗記し，小テストをすることで単語や表現を覚えてきたという学習経験を持つ学生が多いのが現状である。教科書本文を活用し，単語は文脈で捉えていく学びを学生自身に体験させるとともに，辞書の活用方法についても，大学での講義中に，学生自身が辞書を使って調べ，英文を作っていくなどの工夫が必要になってくる。

【文法に関する指導】

・正しい文法知識を理解し活用する時間を確保する。
・教科書を用いた文法の導入方法を学ばせる。
・言語活動を通して文法を学ぶ体験をさせたり授業映像を見せたりすることで，解説以外の文法指導のイメージを持たせる。

【解説】

文法の用語や用法の知識を持ち合わせていても，実際にコミュニケーションで活用できる文法力を身につけていない学生も多く見られる。まずは，教師として生徒を指導するための語法や使用方法についての理解と活用を扱う授業時間を確保することが必要であろう。また，文法は教科書本文の中で生徒に出会わせるという意識を持たせるために，教科書を用いた導入方法について，実演あるいはDVDで紹介したり，指導案を作る段階で個別指導をしたり，学生同士で討議させたりすることが必要である。特に，文法を定着させるための言語活動の行い方などは，複数の映像を見たり授業体験をしたりすることで，手厚い指導が求められるところである。

【異文化理解に関する指導】

・留学等を通して海外の人との交流経験がある学生には，それを活かした指導法を考えさせる。
・海外での異文化体験を持つ外部講師を招き，ワークショップ等を開催する。
・学内の留学生を授業に招き，交流の機会を設ける。

【解説】

学生自身が体験的に異文化に触れる機会を確保するための様々な工夫が求められる。個人で留学等の

経験を持つ学生は限られているのが現状である。学部科目や大学内の国際交流プログラムなどで海外でのフィールドワークを経験させる機会がある場合には，それを踏まえた異文化理解の指導法を考えさせる機会を確保できるだろう。

学生に実際に海外での体験をさせることが難しい場合には，映画やドラマを通じて，文化的側面から指導するなどの機会を設けることが考えられる。また，海外での異文化体験を持つ外部講師を招聘してワークショップを開催したり，学内の留学生との交流の機会を設けたりするなどの工夫が求められるであろう。

【教材研究・ICT等の活用】

・ICTを活用した授業を学生たちに体験させる。
・模擬授業のテーマとして「ICTの活用」を取り上げる。
・大学内の環境設備を整える。

【解説】

ICTの活用については，授業のどの場面での活用が有効かについての知識に加え，学生自身がICT使う体験，そしてICTを使った授業を受ける体験を持つことが極めて重要である。そのため，指導者自身が教職課程の授業中に積極的にICTを活用するとともに，ICTの活用を模擬授業のテーマとして設定して使う場面を設けることが必要であろう。学生が模擬授業などで電子黒板やデジタル教科書を常時使用できる環境整備も必要であろう。

【英語でのインタラクション】

・生徒の発話を引き出すためのインタラクションを，学生たちに生徒役として体験させたり，授業映像を視聴させたりする。

【解説】

学生自身の体験から，読むことの指導を「日本語訳や日本語による解説」と捉えている学生にとって，英語で行なう授業を「英語による解説」と誤解している場合も多い。その対応策として，日本語の使用を一切禁止する英語科目を教職課程の履修科目中に設置し，学生自身に英語を使いながら学ぶ体験をさせることで，指導法の学びにつなげることを目指した実践を行なっている例がある。そうした中で，英語使用の主体は生徒であることを理解し，生徒の発話を引き出すためのインタラクションの方法を体験的に指導する必要がある。そのため，実際に教科書を用いた指導例を，指導者が教師役になって授業体験をさせたり，映像を使って紹介したりすることにより，英語でのインタラクションを中心とした授業の進め方の具体的なイメージをつかませたい。

【ALT等とのティーム・ティーチング】

・模擬授業で「ティーム・ティーチング」をテーマとして取り上げる。
・学内に在籍している留学生に，ALT役として模擬授業に参加してもらう。

【解説】

模擬授業をペアにして行なうようにし，1人が日本人教師役，もう1人がALT役として役割分担を行な

い，体験的にそれぞれの役割をつかませている例は多い。また，学内に在籍している留学生の協力を得て，授業でのALT役として模擬授業に協力してもらうことも考えられる。

【生徒の特性や習熟度に応じた指導】

・模擬授業で生徒役をする学生たちに，あらかじめ生徒役の特徴を割り振り，模擬授業を受けさせる。

【解説】

教育実習を経験した学生たちからは，「大学で行う模擬授業では生徒役が大学生のため計画通りに進行することが多いが，教育実習で指導する生徒たちは多種多様な生徒が混在していて，模擬授業のようにはうまく行うことができない」という声を聞く。そこで，模擬授業を行う際に，生徒役の学生に事前に生徒の特徴を決めて行うことができる。奇数月生まれの学生は英語が得意な生徒，偶数月生まれの学生は英語嫌いの生徒などと決めておき，模擬授業の中でも，個々の生徒の特性に応じた指導を行なうように意識させる。

◆授業づくり

【学習到達目標に基づく授業の組み立て】

【学習指導案の作成】

・指導案の例を配布し，それを真似して指導案を作成させる。
・各学生が作成した指導案を受講生全員で検討，討議する機会を設けたうえで，書き直させる。
・修正後の指導案を受講生全員で共有できるようにする。

【解説】

事前に用意した学習指導案や，英語科教育法関連のテキストに掲載されている学習指導案をモデルとし書き方をまねしながら，模擬授業を前提として，提示した指導案とは異なる単元を教科書から指定して作成させる。モデルをもとに学習到達目標を立てたり，指導の流れを記述したりすることで，指導目標と授業の展開を関連させたポイントを押さえることから始める。そして，それに基づいて模擬授業を行い，もう一度指導案に戻って協議を行うことで，指導案の改善を図ることができる。

それぞれの学生が指導案を書いて提出した段階で，受講生全員で検討し，討議し，修正した後に再提出させることで，書いた本人に加えて，他の学生も自分の指導案を書く際のヒントを得る機会を提供することが可能になる。修正した指導案を印刷してファイルに閉じて閲覧できるようにしておいたり，共有PCやクラウド上の共有フォルダなどに保存しておいたりすることで，その後の指導案を書く際に常に参照してよりよいものを書くという習慣づけを行うことができる。この際，数年分の指導案を見られるようにしておくことで，同じ単元を過去の卒業生がどのように指導したかを検討する機会とすることもできる。

◆学習評価

【観点別学習状況の評価，評価規準の設定，評定への総括】

・指導書や研究授業等の指導案に掲載されている評価規準をモデルとして示す。

・実際に評価規準を自分で作成させたうえで，指導目標や指導計画とのつながりを意識させる。
・現役の教員を外部講師として招き，講義してもらう。

【解説】

教科書の特定の単元を指定し，その学習内容を十分に理解した上で，指導書にある評価規準や，実際に中学校や高等学校で行なわれた研究授業等の指導案に書かれた評価規準を学生に示し，評価規準と授業での指導の関係を検討させることが考えられる。こうした学習を踏まえ，学生が担当する教科書単元についての評価規準を自分で作成し，指導目標と授業での活動，そして評価につながるように意識させる。また，実際に授業を行なっている現役の英語教員を外部講師として招聘し，その講師が作成した評価規準と実際に行なっている授業との関係を講義してもらうことも，学生のイメージを具体化させることになるだろう。

【言語能力の測定と評価（パフォーマンス評価等を含む）】

・定期考査の問題を作成させ，お互いに解答したうえで適切さについて議論する。
・実際に学校で実施された定期考査を見る機会を設ける。
・大学の英語の授業で学生が行ったスピーチなどの映像を使って評価の練習をさせる。

【解説】

学習評価についての概要を理解させた後に，教科書の単元を指定して定期考査の問題を個人やグループで作成させ，他の学生が実際にその試験に解答してみて，その適切さについて議論することで，言語能力の測定の方法についての理解を深める機会にできる。実際に学校で実施された定期考査を見て，グループで検討する機会も貴重なことである。指導と評価の一体化ができている試験から学ぶことはもちろんのこと，良問と悪問について検討させたり，多肢選択式テストにおける不適切な選択肢の修正をさせたりすることもできる。

パフォーマンステストについても，CAN-DOリストによる指導目標と評価の観点から，どのようなテストを行なうことが適切かを検討させたい。パブリックスピーチを扱う大学での英語の授業などにおいて，学生が実際に行なった即興のスピーチなどを録画し，クラス全体で映像を見て振り返り，評価の観点についてディスカッションをしたり，レポートを書いたりする機会を設けて，評価の在り方を検討させるという実践例もある。

◆第二言語習得

【第二言語習得に関する知識とその活用】

・第二言語習得理論に依拠した指導法や指導技術を取り上げる。
・学生自身のこれまでの外国語学習と第二言語習得の理論を結び付けて考えさせる。
・第二言語習得関連の文献で取り上げられている授業例を，模擬授業で実演させることで体験的に学ばせる。

【解説】

第二言語習得に関する知識を獲得させるために，母語習得と外国語習得における相違点を対比したり，

第二言語習得理論と過去の教授法を対比させたりして，それらの長所・短所を論じさせ，学生自身に考えるきっかけを与えることが有効であろう。第二言語習得に関する知識の習得にあたり，チーム基盤型学習（Team-Based Learning: TBL）を取り入れて授業を実施している例もある。チーム基盤型学習とは，学生がチーム内でメンバーとディスカッションを行うことと，チーム同士でディスカッションを重ねることが中心となる学習方法である。

英語科の指導法で第二言語習得研究を扱う意味は，教室での指導に役立つ知見を得ることである。そのため，第二言語習得理論に依拠している指導法や技術については明示的に解説をしたり，外国語習得の基礎知識を，応用言語学の理論に基づいて説明したりすることも，内容に応じて取り入れられる。理論を実践へと活かしていくために，学生自身のこれまでの外国語学習と関連付させて理論の理解を促したり，言語習得論の知見を教室指導にどう活かすかについてグループ討議を行ったりすることもできる。さらには，第二言語習得関連の文献で取り上げられている授業例を，模擬授業において学生に実演させ，どのように指導に反映させていくことができるかを体験的に学ばせることも有効な手段であろう。

◆授業観察

【授業観察を通して学生の学びを促進させるための具体案】

・予習課題として授業映像を視聴させた上で，授業中にディスカッションする機会を設ける。
・授業研究会などへの参加を促す。

【解説】

実際に中学校や高等学校で行われている日常の授業を，大学の英語教職課程履修生がまとまって集団で見学に行く機会を設けるのは難しいだろう。そこでいくつかの方法が考えられる。まずは，実際に行なわれている授業の映像を，講義の中で視聴することである。ただ，50分の授業全体を講義時間で視聴した場合には，授業時間の多くの部分を使用することになる。そこで，共有フォルダに入れておいた映像を，それぞれの学生が予習課題として視聴してくることも有効な手段であり，この場合には，いわゆる反転学習のように，講義内では，学生によるディスカッション等に多くの時間を割くことが可能になる。最近は，生徒の肖像権の関係から実際の授業映像を撮影することが難しい場合も多い。そこで，市販されている授業研究用の英語教育映像を，オンデマンド式で用いることもできる。こうした映像には，授業についての解説も合わせて用意されているため，学生にとっては映像視聴とともに授業のねらいなどについての理解を深めることも可能となる。映像という点では，様々な英語教育関係の研究会で，映像による授業研究を行なっているので，学生にこうした研究会への参加を促し，そこでの学びをレポートで提出させている例もある。学生数が多く，全員の学生を研究会に参加させることが難しい場合には，大学主催で卒業生を招き，その卒業生が実際の学校で行った授業映像等を見せる機会を設け，大学での指導の一環として研究会を行っている例も報告されている。

◆授業体験

【授業体験を通して学生の学びを促進させるための具体案】

・授業担当者が教師役となり，受講生に生徒役として授業を受けさせる。
・現職の教員を外部講師として招き，受講生を相手に授業をしてもらう。

【解説】

学生自身が生徒役になって授業を体験する機会を持つことも必要である。授業担当者が教師役になって，中学校や高等学校の授業の一部分を行ってみたり，50分の授業全体を行ってみたりすることが，一番現実的な方法であろう。授業担当者による授業体験をさせるのが難しい場合には，中学校や高等学校の現場で教えている指導経験豊富な教員を外部講師として招いて模擬授業をしていただいたり，卒業生の若手教員に大学の授業に来てもらって，後輩たちのために授業をしてもらったりすることも考えられる。

＜３＞模擬授業

模擬授業は，講義で学んできたさまざまな指導法を頭で理解するだけでなく，実践に移す場でもある。また，教育実習で生徒の前に立ち授業をすることを想定した，本番前の実戦練習である。それゆえに，外国語コアカリキュラムの中でも模擬授業の重要性が強調されている。

しかし，模擬授業の重要性を認識しつつも，教職課程の学生数により模擬授業の実施が困難な場合や，模擬授業の時間を十分に確保できないなどの課題があるのも事実である。本研究の調査によれば，模擬授業の実施回数は学期に1～2回程度，という回答がもっとも多かった。また，1回あたりの模擬授業の長さについては，30分～40分程度の模擬授業を実施している場合もあるが，大抵は10分～20分程度で授業の一部分の模擬授業を行う，という回答がもっとも多かった。模擬授業の実施回数，授業時間ともに十分と言える数字ではない。

また，模擬授業を実施するにあたり作成する指導案については，担当教員の指導をどこまでするべきかなど，教科に関する指導法の授業を担当する教員の役割についても課題は山積みする。以上の観点から，本項では，模擬授業の実施方法，模擬授業後の省察方法，さらに指導案の作成について具体例を示しながら論じることとする。

◆模擬授業実施方法

【受講者数に合わせた模擬授業実施の具体例】

・大人数の場合の模擬授業実施方法
・少人数の場合の模擬授業実施方法

【解説】

前述したように模擬授業実施の可否は，履修人数に大いに影響を受ける。ここでは，大人数の場合と少人数の場合について，それぞれ具体的な模擬授業実施方法を提案する。

・大人数の場合の模擬授業実施方法

人数が多い場合には，全員に模擬授業を体験させようとすれば，一人当たりが模擬授業に割ける時間が当然少なくなってしまう。極端な話になるが，仮に90分の授業を３時間分模擬授業に割り当てている場合，100人の履修者がいて全員が模擬授業をしようとすれば，計算上では一人当たり2.7分しか時間を割くことができない。したがって，このように履修者が多い場合にはグループ単位での模擬授業実施などの工夫が必要となる。本研究調査の結果，3年次は3～4人グループで50分，4年次は個人で15分，のように段階を踏んで模擬授業を実施している大学もあった。さらに，前期と後期の授業のつながりを意識して，前期に個人で文法事項導入のマイクロティーチングを行い，後期にグループで50分の模擬授業

を実施している例もあった。

特に，マイクロティーチングを行う場合には，50分間の授業を細分化し，それぞれのパートごとに10分程度の細切れで実施する方法もある。具体的には，帯活動，文法指導，語彙指導，読解指導，定着のための練習の指導，発信の指導などに分けて練習する方法である。パートに特化した授業をする場合は，学生の授業形態に多様性が生ずることにより，さまざまな指導法を体験することになり，指導法の幅が広がるというメリットもある。文法指導を例として取り上げよう。例えば，関係代名詞を統一文法項目として模擬授業を実施すれば，学生の人数分のさまざまなアプローチを体験できる。一方，学生一人ひとりに異なる文法項目を取り上げるようにすれば，文法項目の多くを網羅し，広く指導法を学ぶ機会となる。

・少人数の場合の模擬授業実施方法

履修人数が少なければ模擬授業の時間を充分確保できる，というメリットはある。一人が経験する模擬授業数が多くなる。一人当たりの割り当て模擬授業時間も増える。場合によっては50分間の授業を複数回実施することも可能となる。しかし，人数が少ないことは必ずしもメリットだけとは言い難い。大学によっては，履修者が数人という場合もある。模擬授業は教員役の学生が一方的に行うものではなく，生徒役の学生とのインタラクションがあって初めて成り立つものである。生徒役の学生の呟きや誤った発言を拾い上げることで，臨機応変な対応も学ぶことができるわけだが，人数が少ない場合は生徒役の学生が不足する。優秀な生徒や理解の遅い生徒，授業態度の悪い生徒などを演じる学生がいないことで，臨場感のある模擬授業とならないことはデメリットと言える。本研究のアンケート調査では，「大学生を相手にしているため，中学生や高校生の英語のレベルを意識して授業をすることが難しい」という声があった。英語を専攻する学生は英語が得意なため，授業者の拙い説明でも理解できてしまう。この点を解消するために，教職課程以外の学生，できれば英語を専攻としない学生のボランティアを募り，生徒役として模擬授業に参加してもらうことを提案したい。他専攻の学生の中には英語を苦手とする学生も少なからずいるので，教師役の説明が不十分であれば，「わからない」とはっきり言うことができ，教師役の学生にとっては自分の授業を振り返る良い機会ともなる。

◆模擬授業の振り返り

【自己評価及び相互評価を含む，さまざまな振り返りの具体例】

・授業者が自己評価する。
・授業者がスマートフォンで授業を録画し，振り返る。
・模擬授業映像をYouTubeなどにアップロードし，授業者及び生徒役の学生に視聴させる。
・生徒役の学生が授業者に対してコメントする。
・生徒役の学生が模擬授業を評価する。
・学生からのコメントを元にディスカッションを行う。
・教員およびTA，先輩が助言する。
・ケーススタディで生徒対応を考える。

【解説】

・授業者が自己評価する。

授業の振り返りに当たっては，まず授業者本人が自身の授業を振り返り自己評価することが肝要である。授業準備が十分であったか，生徒役学生の反応がどうであったか，指導案の目標や展開に沿った授業を行うことができたか，など，自分の授業の反省点を自分の言葉で述べることは非常に重要である。問題意識を持って授業に臨まなければ，自身の授業の良し悪しを見極めることはできない。

・授業者がスマートフォンで授業を録画し，振り返る / 模擬授業映像をYouTubeなどにアップロードし，授業者及び生徒役の学生に視聴させる。

自己評価では，客観的に自身を振り返ることも重要である。スマートフォンを使って自分の授業を撮影する方法が非常に簡単である。最近のスマートフォンは性能も良く，非常にクリアな映像とともに音声もはっきりと録音される。教室内に三脚などを用意し，スマートフォンをセットし，授業者の準備が整ったところで生徒役の学生がビデオのスタートスイッチを押すだけである。

撮影後の映像を自分で視聴することが基本であるが，担当教員が映像を，授業履修者だけが視聴できるYouTubeにアップロードし，それを視聴する方法もある。その際，観点項目を参考に振り返りを行うと，反省点を次の授業に活かしやすい。観点項目例としては，「教師の発話量と生徒の発話量を比較する」「教師の英語使用量と日本語使用量を比較する」「姿勢，視線，話し方，板書や教材提示の方法などを分析する」などが挙げられる。評価項目を数値化し，記録することで，自身の授業の成長が見え，次の授業へつながることになる。

・生徒役の学生が授業者に対してコメントする / 生徒役の学生が模擬授業を評価する / 学生からのコメントを元にディスカッションを行う。

学生同士のピアフィードバックは効果的な振り返りである。同じ立場のため，授業者の状況がよくわかり，問題点を共有しやすいというメリットがある。ただし，闇雲に感想を述べるのではなく，良い点，改善点を理由を示しながら忌憚のない意見を述べることが肝要である。大人数の授業では模擬授業そのものの時間を確保することすら困難であるので，フィードバックに充分な時間を割くことができないこともある。その際はコメントシートに記入し，それを授業者に渡すことで時間的問題を解決することができる。

共通する課題があれば，それを取り上げ話し合いの場を設けることができれば，より効果的である。ディスカッションを通して，より良い授業を構築するための理解を共有することができるようになる。

・教員およびTA，先輩が助言する。

先達の助言は，最も意味のあるフィードバックとなる。特に，TAや教育実習を経験した先輩の助言は具体的かつ現実的であるため，貴重な内容を含み，課題に対して示唆に富むことが多い。4年生は教育実習を経験しているだけに，的を射た発言が期待できる。また，クラスメイトや教員には相談することが憚られる事項については，個別に対応することができれば，模擬授業者には心強いアドバイザーとなる。

・ケーススタディで生徒対応を考える。

本研究のアンケート結果からは，模擬授業で経験したことと教育実習で目の当たりした実際の児童・生徒の様子との乖離を課題として挙げている記述が多く見られた。このことから，ディスカッションでは想定される事柄をケーススタディとして取り上げ，具体的指導法を考えることは極めて重要である。中高の教育現場では，教師は英語の学習指導だけに関わるわけではない。生徒指導を担わなければなら

ないこともある。しかし，両者は異なる指導ではなく密接に関係している。例えば，誤った解答をした生徒に対しては，リキャストなど言語習得上の訂正のみならず，心に寄り添った指導が必要になる。英語が得意でないにもかかわらず勇気を出して発言した生徒が誤った解答をした場合，誤りを指摘しただけでは，その生徒の成長には繋がらない。教師は誤答をどう取り上げ，対応すべきなのか，ブレインストーミングすることは非常に有効な活動となる。ケーススタディは，模擬授業内に見えた課題や，学生同士の話し合いの中で出現した問題を元にすることが望ましい。

◆指導案の作成方法

【指導案作成及び添削の具体例】

・都道府県の指導案例を参考にする。
・先輩の指導案を参考にする。
・相互添削，TAによる添削を導入する。

【解説】

指導案には決まった書式があるわけではない。指導案作成の際は，大学が用意したフォーマットを使用することもあれば，教科に関する指導法の授業のテキストに掲載されているフォーマットを活用する場合もある。実際に教育実習に行っても，大学で学んだ形式で作るよう指導される場合もあれば，実習先の中高あるいは都道府県（市区町村）で決まった書式の用意がある場合もある。したがって，指導案作成の際には，汎用性の高いものを作る必要がある。具体的な方策を以下に述べる。

・都道府県の指導案例を参考にする。

学生が教育実習を行う自治体の教育委員会のホームページから指導案例を取り出し，それを参考にして記述する方法がある。例えば，東京都の場合であれば，「東京都教職員研修センター」のホームページ（http://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/08ojt/helpdesk/plans/chu/ei.html）から，中学校の指導案例をダウンロードすることができる。神奈川県の場合には，「神奈川県立総合教育センター」のホームページ（http://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/snavi/kyouzaisnavi/shidouan.html）からダウンロードが可能である。指導案作成に当たっては，公開された指導案を模倣するところから始め，書き振りや指導案に用いられる頻度の高い語句や表現を学ぶことは非常に重要である。ともすれば，指導案作成に時間を割きすぎ，授業準備が疎かになりがちな模擬授業を目にすることもある。多くの指導案を読み，それらを比較すると，そこから学ぶことは多い。自分の授業の全体像を描きやすい指導案を探し，それを改良することで自身のオリジナル指導案を作成することができれば，そのことが自信につながり，満足のいく模擬授業をすることにつながることになる。

・先輩の指導案を参考にする。

教育実習の締めくくりには，多くの場合，研究授業が行われる。実習から戻った時点で，先輩たちが作成した指導案を収集し，指導案例として蓄積することは，後輩たちの指導案作成時に貴重な資料となる。

・相互添削，TAによる添削を導入する。

完成度の高い指導案が，授業不安の軽減に直結していることは言うまでもない。しかし，完璧な指導

案作成のために添削すべきかどうかは議論の余地がある。履修者が多い場合には，一人ひとりに対して詳細に添削して返却することは多大な労力となる。また，何をもって完璧というかについては，明確なガイドラインはない。そこで考えるべきは，添削指導ありきの指導案作成ではなく，初めから完成度の高いものを目指して指導案を作成させることである。そのためには，前述のとおり，良い指導案やある程度完成した先輩の指導案を模倣し，なぞる形で作成することが一番効果的である。指導案は，学生自身が思考し，筋道を建てながら作成しなければ，自分のものとして定着することはない。したがって，指導案の添削は基本的に最小限にとどめ，教員がすべきことは，不十分な部分の指摘と助言と考える。しかし，間違いのない指導案を作成する努力は必要であり，その場合には以下のような方策が考えられる。

①学生同士による相互添削あるいはグループ内添削：字句修正や不適切な表現など，文書そのものの添削を行う。また，授業の流れや指導手順についても，より効果的な指導法を検討する。学生同士の添削を通して，他者の良い点を学び，自身の指導案を再検討し，自身の指導案をより良いものにする機会となる。

②先輩あるいはTAによる添削：①で完成させた指導案について，教育実習を経験した先輩やTAから指導を受ける。①のプロセスを経ているため，大きな修正箇所はないであろうと推察される。経験を生かした助言は，非常に有意義なフィードバックとなる。

◆まとめ

本項では，模擬授業に関連した事項について，事例を紹介した。いずれの事例も，各大学が抱える課題に照らして取捨選択することが望ましい。模擬授業は講義で学んだ指導法や知識を実践に移す場である。座学で理解した内容も，自身で咀嚼し，実行することは意外と容易なことではない。その意味において，模擬授業は失敗が許される場である。思うようにできなかった部分は必ず振り返り，次回の模擬授業では同じ過ちはしないような段階的な成長が求められる。一方，実習期間中は失敗は許されない。協力いただいている学校や，指導してくださる先生，そして何よりその場にいる生徒たちの貴重な時間を使って実習していることを考えなければならない。そのためには，まず学生自身がその責任を把握し，指導法を考えることが重要である。その上で，同じ学びの場にいる仲間と研鑽を積み，改善に努めなければならない。完成度を高める努力をすることで，模擬授業が教育実習につながる，真の学びの機会となるのである。

2.2　専門的事項に関する科目

＜１＞シラバス

【英語学】

1	英語教師に必要な英語学的知見とは何か
2	英語の音声の仕組み
3	英語の音と綴りの関係
4	英語の音声と英語学習者の発音矯正（分節音）
5	英語の音声と英語学習者の発音矯正（超分節音）
6	英語の語彙
7	英語の文構造
8	英文法とコミュニケーション
9	中・高校生の英文法にまつわる素朴な疑問にどう答えるか
10	英語の歴史的変遷（古英語・中英語）
11	英語の歴史的変遷（初期近代英語・後期近代英語）
12	英語の歴史から考える英文法の「なぜ」
13	国際共通語としての英語（英米の英語の特徴）
14	国際共通語としての英語（世界のさまざまな英語の特徴・実態）
15	再度，英語教師に必要な英語学的知見とは何かを考える
評価（例）	①小テスト25％，②プレゼンテーション課題 25%，③議論への積極的な参加25％，④課題レポート25%

【解説】

中・高校生に英語を教える際に役立つ英語学的知見を身につけるために，外国語（英語）コアカリキュラムに含まれる3つの学習項目（「英語の音声の仕組み」「英文法」「英語の歴史的変遷，国際共通語としての英語」）について，教職を意識した内容を扱う。授業担当者は，中・高等学校で使用されている検定教科書に可能な限り事前に目を通しておくなどして，中・高等学校での英語授業に資する英語学的知見とは何かを考察し，それらが効率的に学ぶことのできるシラバス内容としたい。英語学の中でも，専門分野の異なる教員が複数で担当するオムニバス方式や，ティーム・ティーチング方式での授業実施もありうる。

授業では単に学生に言語学的知識を一方的に与えるのではなく，その知識を中学校や高等学校の英語の授業のどういった場面で活かすことが可能かを常に意識させ，そういった視点でペアやグループでディスカッションを行わせるなど，学生が能動的に学習に参加するよう留意したい。

外国語（英語）コアカリキュラム対応の英語学の概論書としては，『英語コアカリキュラム対応　英語の諸相―音声・歴史・現状―』（川原功司著，名古屋外国語大学出版会）がある。また，『コアカリキュラム対応　小・中学校で英語を教えるための必携テキスト』（中村典生監修，東京書籍）の231 ～ 259ページも，中学校における英語教育に関する英語学的知見についてまとめてある。このようなテキストの章立てに沿って，各回の授業で担当教員が，各学習項目の概要を解説した上で，教職とリンクさせるような発問をし，議論させることもできるであろう。あるいは，テキストの指定範囲は常に授業外で読むように指示を出しておき，授業では学生にテキストから学んだことを個人・ペア・グループで発表させたり，ディスカッション・トピックを用意させて，それについて議論する時間を十分確保するなどの反転授業方式で授業を行うことも一案である。

【英語文学】

1	英語教師に必要な英語文学的知見とは何か
2	テクストの基本構造を読む
3	テクストの物語内容を読む
4	テクストのディテールを読む
5	テクストの全体構造を読む
6	文学作品と映画から学ぶ多様な文化：*Pride and Prejudice*（Jane Austen）
7	文学作品と映画から学ぶ多様な文化：*Hamlet*（William Shakespeare）
8	文学作品と映画から学ぶ多様な文化：*Alice's Adventures in Wonderland*（Lewis Carrol）
9	文学作品と映画から学ぶ多様な文化：*Harry Potter* シリーズ（J.K. Rowling）
10	文学作品と映画から学ぶ多様な文化：*The Great Gatsby*（F. Scott Fitzgerald）
11	文学作品と映画から学ぶ多様な文化：*The Grapes of Wrath*（John Steinbeck）
12	文学作品と映画から学ぶ多様な文化：*Stand by Me*（Stephen King）
13	検定教科書で取り上げられた英語文学（イギリス文学を中心に）
14	検定教科書で取り上げられた英語文学（アメリカ文学を中心に）
15	再度，英語教師に必要な英語文学的知見とは何かを考える
評価（例）	①プレゼンテーション課題 30%，②議論への積極的な参加40%，③課題レポート 30%

【解説】

英語で書かれた文学を通じて，中・高等学校で英語を自信を持って指導できるように，学生の英語力，教養，指導技術を向上させることを意識した授業を行う。外国語（英語）コアカリキュラムに含まれる3つの学習項目（「文学作品における英語表現」「文学作品から見る多様な文化」「英語で書かれた代表的な文学」）について，教職を意識した内容を扱うようなカリキュラム内容とし，担当する大学教員の専門領域に偏り過ぎないように特に留意する必要がある。授業形態としては，学生が教員の講義を一方的に聞くだけでなく，学んだ内容をもとに英語でディスカッションをしたり，エッセイを書いたりするなどの表現活動を含めることで，より多角的に英語文学や文化を捉えさせることができる。

中学校および高等学校の学習指導要領には，教材に関して，「英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活，風俗習慣，物語，地理，歴史，伝統文化，自然科学などに関するものの中から，生徒の発達の段階や興味・関心に即して適切な題材を効果的に取り上げるものとし，（後略）」という記述が配慮事項として掲載されている。学生にはこういった観点に特に留意させた上で，中・高等学校での英語授業の教材として文学作品を利用する可能性を考えさせたり，実際に文学作品を用いて教材を作らせたりするといった，授業に役立つ具体的な活動を取り入れることが望ましい。

【異文化理解】

1	英語教師に必要な異文化理解とは何か
2	自らの異文化体験を語る
3	検定教科書における異文化コミュニケーションの場面・状況
4	映画から学ぶ異文化（ディズニー映画）
5	映画から学ぶ異文化（『英国王のスピーチ』『ブリジット・ジョーンズの日記』など）
6	映画から学ぶ異文化（『フォレスト・ガンプ』『父親たちの星条旗』など）
7	映画から学ぶ異文化（海外の映画で描かれた日本人・日本文化，『ベスト・キッド2』など）
8	異文化交流会：交換留学生の出身国・地域の歴史・文化・社会
9	検定教科書で扱われている国・地域の歴史・文化・社会を調査する

10	検定教科書で扱われている国・地域の歴史・文化・社会の調査結果の発表・議論
11	国歌から学ぶイギリスの歴史・文化・社会（*God Save the Queen*）
12	国歌から学ぶアメリカの歴史・文化・社会（*The Star-Spangled Banner*）
13	多言語なニッポンを考える
14	異文化交流会：交換留学生が抱く日本人・日本文化・日本社会の謎に答える
15	再度，英語教師に必要な異文化理解とは何かを考える
評価（例）	①プレゼンテーション課題 30%，②議論への積極的な参加40%，③課題レポート30%

【解説】

中・高校生に英語を教える際に役立つ異文化への理解や異文化適応能力などを身につけるために，外国語（英語）コアカリキュラムに含まれる3つの学習項目（「異文化コミュニケーション」「異文化交流」「英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化」）について，教職を意識した内容を扱う。社会や世界との関わりの中で，他者とのコミュニケーションを行う力を育成する観点から，外国語やその背景にある文化の多様性及び異文化コミュニケーションの現状と課題について学んでいくが，こういった内容は単なる座学ではなく，学生が直接体験として異文化に触れ，自分とは異なる文化を背景に持つ人々との交流を通して学べるようにカリキュラムを構築することが重要である。さらに英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化を通じて，英語による表現力への理解を深め，中学校及び高等学校における外国語科の授業に資する知見を身につけさせることを目指す。

＜２＞英語学

【英語の音声の仕組み】

中・高等学校の英語教員として，音声指導が適切に行うことができるように，英語音声の様々な特徴（各音素の調音箇所・調音方法，音変化，アクセント，リズム，イントネーション，綴りと発音の関係など）を理解するとともに，生徒が誤った発音をした際に効果的な発音矯正指導ができるよう，学生自身が正しい英語発音を獲得できるための練習などが必要である。下記のような授業での取り組みの工夫を取り入れたい。

- 日本人英語学習者が英語を発音している音声を複数聞き，その特徴を確認するとともに，なぜそのような発音の特徴を持つのかをペアやグループで議論する。
- コミュニケーションに支障をきたす日本人英語学習者の発音の問題を特定し，それを矯正するためにはどのような音声指導が有効かについてペアやグループで議論したり，議論の結果をクラス全体で発表したりする。
- 中学校や高等学校で使用されている検定教科書の英文からいくつかを選び，実際に学生に中学生や高校生に読み聞かせをするという想定で音読した音声ファイルを課題として提出させる。提出する前に自身の英語発音と英語母語話者のモデル音声との聞き比べをさせ，自身の発音上の課題を考察させたり，他の学生とお互いの音声を聞いて，矯正すべき点を指摘し合うなどの演習を行う。
- 学生自身の英語発音を録音したものをPraatなどの音声分析ソフトで可視化し，英語母語話者による発音と比較するなどして，学生に自分の発音の特徴や癖を客観的に捉える機会を与える。
- 発音記号を見て，正しい英語音声で発音できるような訓練を行う。授業でIPAカード（川原繁人・平田佐智子・桃生朋子，慶応義塾大学言語文化研究所）を使って，学生にゲーム感覚でIPAを楽しく学ばせる。

・英語の発音と綴りの関係について，中学生や高校生が「なぜ？」と疑問に思うであろうことを列挙し，そのような疑問にどのように答えていくかを考察する。『英語の文字・綴り・発音のしくみ』（大名力著，研究社）や後述する英語史に関する書籍などで調べ学習をし，その成果をクラス全体で発表する活動を取り入れたりする。

【英文法】

中・高等学校の英語教員として文法指導が適切に行うことができるように，指導すべき文法項目を的確に理解することが重要である。学生自身が中・高等学校で学んだ基礎的な英文法に関しても，誤解をしていたり，知識が不正確であったりすることも多いので，正確な知識を身につけるとともに，その知識を英語の苦手な中学生や高校生に対してもわかりやすく説明できるようになることが期待される。下記のような授業での取り組みの工夫を取り入れたい。

・中学校や高等学校で扱われる英語の文法項目を列挙し，その中から特に日本人英語学習者にとって理解や使用が難しいと思われる項目を選び，自分が中・高等学校の英語教師だったらどのように説明をするかを考え，ペアやグループで共有する。その後，中学校や高等学校の検定教科書で当該の文法事項がどのように説明されているかを確認し，学習者に対するよりよい英文法の説明とは何かを考察させる。
・学生自身が中学生や高校生の時に感じた英文法についての疑問を列挙し，ペア・グループでその疑問に答え合う活動を行う。
・検定教科書の英文法の解説ページや学習者向けの英文法の参考書で，中・高等学校で学ぶ文法事項がどのように説明されているのか，説明の中でどういったイラストや図表が使用されているかなどを調査する課題を課し，発表させる。
・中・高等学校の検定教科書の各文法事項を扱う際に用いられている例文を調査し，それが学ぶ上で適切な例文かどうかを吟味させる。
・授業の中で英文法にまつわる疑問を提示し，学生に *The Grammar Book: Form, Meaning, and Use for English Language Teachers, Third Edition*（Larsen-Freeman & Celce-Murcia, National Geographic Learning）や *Practical English Usage*（Swan, M., Oxford University Press）などの信頼できる文法書を実際に使わせ，回答を考えさせる演習を行う。
・中・高等学校の検定教科書で使用されている実際の英文を使って，その文構造を考えさせ，ペアやグループで一緒に確認作業を行う。

【英語の歴史的変遷，国際共通語としての英語】

中・高等学校の英語教員として，英語という言語の特徴と捉え，中学生や高校生の英語にまつわる疑問に対して的確に説明できるように，英語の音声，文字，語彙，文法の歴史的変遷について基礎的な知識を得るとともに，英語圏及び世界で国際共通語として使われる英語の実態について理解させる。大学の授業では下記のような取り組みの工夫を取り入れたい。

・英語の歴史を扱っているDVD（BBC制作の *The Story of English* など）を視聴し，英語の歴史的変遷を映像を通して理解させる。
・『英語の歴史から考える英文法の「なぜ」』（朝尾幸次郎，大修館書店）や『英語の「なぜ?」に答える は

じめての英語史』（堀田隆一，研究社）などの参考文献から，中・高等学校で学ぶ文法項目を歴史的観点からわかりやすく説明できるものを整理してレポートとしてまとめたり，クラス全体にプレゼンテーションをする課題を課す。

・*the Speech Accent Archive*（https://accent.gmu.edu/）やTEDなど無料で世界の英語の変種を聞き比べることができるインターネットサイトや，『アジアの英語』（柴田真一，コスモピア），『「世界の英語」リスニング』（里井久輝，アルク），『改訂第2版 CD3枚付 英語で聴く 世界を変えた感動の名スピーチ』などの音源付きの書籍を活用し，国際共通語としての英語を実際に聞かせる機会を与える。

・ドラマや映画で英語が国際共通語として使用している場面を視聴させ，使われている英語の特徴やコミュニケーション方略などについて確認したり，議論したりする。

【参考図書】

英語学については，下記の書籍が参考になる。

・『英語コアカリキュラム対応　英語の諸相―音声・歴史・現状―』（川原功司，名古屋外国語大学出版会）
・『コアカリキュラム対応　小・中学校で英語を教えるための必携テキスト』（中村典生監修，東京書籍）
・『英語学と英語教育の接点』（中川直志編著，金星堂）
・『英語学を学ぼう―英語学の知見を英語学習に活かす―』（高橋勝忠，開拓社）
・『グローバルコミュニケーションのための英語学概論』（井上逸兵，慶應義塾大学出版会）
・『改訂新版　初級英語音声学』（竹林滋・清水あつ子・斎藤弘子，大修館書店）
・『英語の音声を科学する』（川越いつえ，研究社）
・『入門英語音声学』（服部範子，研究社）
・『英語発音指導マニュアル』（東後勝明監修・御園和夫編集主幹，北星堂）
・『英語教師のための音声指導Q & A』（内田洋子・杉本淳子，研究社）
・『コミュニケーションのための英語音声学研究』（山根繁，関西大学出版部）
・『英語発音の指導』（有本純・河内山真理・佐伯林規江・中西のりこ・山本誠子，三修社）
・『英語の文字・綴り・発音のしくみ』（大名力，研究社）
・*The Grammar Book: Form, Meaning, and Use for English Language Teachers, Third Edition*（Larsen-Freeman & Celce-Murcia, National Geographic Learning）
・*Practical English Usage*（Swan, M., Oxford University Press）
・*The Cambridge Guide to English Usage*（Peters, P., Cambridge University Press）
・『総合英語FACTBOOK これからの英文法』（大西泰斗，桐原書店）
・『総合英語One』（金谷憲総合監修，アルク）
・『英語の歴史から考える英文法の「なぜ」』（朝尾幸次郎，大修館書店）
・『英語の「なぜ?」に答える はじめての英語史』（堀田隆一，研究社）
・『英語史で解きほぐす英語の誤解』（堀田隆一，中央大学出版部）
・『英語教師のための英語史』（片見彰夫・川端朋広・山本史歩子編，開拓社）
・『知っておきたい英語の歴史』（安井稔・久保田正人，開拓社）
・『「世界の英語」リスニング』（里井久輝，アルク）
・『アジアの英語』（柴田真一，コスモピア）
・『改訂第2版 CD3枚付 英語で聴く 世界を変えた感動の名スピーチ 』（平野次郎解説，鈴木健士翻訳，KADOKAWA）

・『教員のための「国際語としての英語」学習法のすすめ』（大坪喜子，開拓社）
・『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』（塩澤正・吉川寛・倉橋洋子・小宮富子・下内充，くろしお出版）
・『英語教育のための国際英語論』（柴田美紀・仲潔・藤原康弘，大修館書店）

＜３＞英語文学

【文学作品における英語表現】

中・高等学校の英語教員に求められる英語の読解力を，英語で書かれたさまざまな文学作品を読んで理解し，多様な英語表現を学ぶことで，向上させる。授業では「文学テクストが持つ様々な特徴，言葉使いの巧みさや繊細さ，解釈の奥深さ，創造性，話の展開の面白さ，心に訴えかけるテーマなど」（久世恭子『文学教材を用いた英語授業の事例研究』ひつじ書房）に目を向けられるような効果的な発問や課題を学生に与える。大学の授業では下記のような取り組みの工夫を取り入れたい。

・英文和訳作業や文構造の解析，テクストの全体構造把握やその修辞性の理解を深めるための作業を組み合わせるなど，学生に課す作業が単調にならないようにする。
・髙橋和子氏（明星大学教授）が提案するように，中・高等学校の検定教科書で扱われている文学教材を活用し，使用されている英語表現を通して，その「構造」や「特色」を見つけ出すような課題を課し，ペア・グループやクラス全体で議論をさせたり，発表活動を行わせたりする。
・文学作品を読む際には，単に受け身的な読解作業で終わるのではなく，朗読のような表現読みをさせたり，ドラマ化させるなど，できるだけ表現活動を取り入れるようにする。
・授業を担当する大学教員の専門領域に偏らないよう，小説，詩，戯曲，随筆，ファンタジー，児童文学，自伝，日記などさまざまなジャンルに触れさせる学習機会を与え，それぞれで使用されている英語表現の特徴などを考察，議論，発表させる。
・文学作品のオリジナルとretold版の英語表現を比較させ，その共通点や相違点を探り，パラフレーズやretold，要約の仕方について議論する。

【文学作品から見る多様な文化】

英語で書かれた文学作品を読んで理解することを通して，それぞれの作品の時代的，社会的，文化的背景や，そこに描かれている人々の生活や価値観について学ぶとともに，多様な文化への理解を深めることを目指す。また，文学作品を中・高等学校における「異文化理解」の教材として活用するという視点から見ると，どのような活用法が考えられ，どのような配慮が必要かといったことも議論させるとよい。大学の授業では下記のような取り組みの工夫を取り入れたい。

・池田栄一氏（東京学芸大学名誉教授）が提案するように，中・高等学校での英語授業に資する英語文学においては，「文学テクスト」から「文化的コンテクスト」へ扱う範囲を広げることが大切であることから，「英語」だけで完結させずに，他教科（地理・歴史）との教科連携も意識する。例えば，「ハリー・ポッター」を扱った授業においては，「Hogwarts Schoolはイギリスのどこにあるのか？」「Hogwarts Expressはなぜ King’s Cross駅から出発するのか？」といった発問を学生に投げかけ，イギリスの鉄道網の地図から，行き先がScotlandであることを立証したり，「漏れ鍋やダイアゴン横丁はロンドンのどこにあるのか？」という発問の後，ロンドンの地図を提示し，歴史・地理・ファッショ

ンなど学生の興味のある文化的情報を紹介する。

・池田栄一氏（東京学芸大学名誉教授）が提案するように，「英文読解」という旧式の教授法から抜け出し，「映像テクストを組みあわせた立体的な授業」を大学の英語文学の授業で学生に体験させておくことで，学生が将来，英語教員となり，中・高等学校の授業内で英語文学を扱う際に，自分でも同じような授業実践ができるように導く。例えば，「ハリー・ポッター」シリーズを教材とした場合には，小説に登場するイギリス文化の諸相（階級制度，学校制度，パブリック・スクール，スポーツ，鉄道制度，カントリーハウス，新聞メディアなど）を取りあげ，映画版を観ながら，階級，ジェンダー，人種などの観点から分析したり，小説と映画版との違いについて考察させたりする。

・『トム・ソーヤの冒険』『不思議の国のアリス』『ピーター・パン』など，学生にとってなじみがあり映画化されているものを教材として活用する。映画版とオリジナル作品とを比較させ，時代的，社会的，文化的背景や，人々の生活や価値観がどのように描かれているのかを調べる課題を出したり，議論をさせたりする。

【英語で書かれた代表的な文学】

英語で書かれた代表的な文学について，歴史的背景を含めて理解させる。文学作品の鑑賞を通して，人間・自然・社会についての洞察を深め，豊かな感受性を育むとともに，学んだ内容をもとにディスカッションをしたりエッセイを書いたりすることで，思考や感情を共有し学び合うことが推奨される。さらに，中・高等学校における「読むこと」の教材として代表的な文学作品を利用する可能性を考えたり，その文学作品を利用した教材作成の演習を行うなど，中・高等学校の英語科の授業に資する活動を取り入れることが推奨される。大学の授業では下記のような取り組みの工夫を取り入れたい。

・初回の授業で学生と話し合ったり，アンケートをとったりして，これまでに学生がどのような英語文学の代表的作品を日本語または英語で読んできた経験があるのか，学生が学びたい代表的文学作品は何なのかを把握する。授業ではその結果に基づいて，適宜，学生が読んできた作品と関連した発問や解説を行うように工夫する。また，毎年，履修学生に上記のようなアンケートなどを行うことによって，授業で扱うべき文学作品の選択について，いわゆるcanonから選ぶか否か，オリジナル作品を扱うのか，retold版を扱うのか，また，授業内でどのような題材内容（異文化理解，平和教育，友情，生き方など）を扱うのかといった視点などから考察を重ね，調整していく。

・大学の授業の中で，代表的な文学作品の作品全部を読ませるのか，部分を読ませるのか，どのような発問を投げかけるべきか，どこまで授業内で読ませたり活動をさせたりし，どこまでを授業外で扱うのかという教材化の方法について吟味を行う。それとともに，今度は学生に，中・高等学校の英語教員の立場で中学生や高校生に当該作品を教材として活用した場合に上記の観点からどのような指導を行うことが望ましいかについて，ペア・グループやクラス全体で議論させる。

・教員自身の専門領域の作家の作品を授業の教材として学生に押し付けるのではなく，英語文学のアンソロジーにも掲載されているような代表的な作品をできるだけ複数選択して，学生に触れさせるようにする。

【参考図書】

英語文学については，下記の書籍が参考になる。

・『日本の英語教育における文学教材の可能性』（髙橋和子，ひつじ書房）

・『世界の英語と社会言語学』（ヤムナ・カチュルー，ラリー・E・スミス，慶應義塾大学出版会）の第10章「世界の英語文学をコンテクスト化する」（pp.247-266）
・『文学教材を用いた英語授業の事例研究』（久世恭子，ひつじ書房）
・『教室の英文学』（日本英文学会（関東支部）編，研究社）
・『アメリカ文学入門』（諏訪部浩一責任編集，三修社）
・『イギリス文学入門』（石塚久郎責任編集，三修社）
・『ヘミングウェイで学ぶ英文法』（倉林秀男・河田英介，アスク出版）
・『ヘミングウェイで学ぶ英文法2』（倉林秀男・今村楯夫，アスク出版）
・『ハリー・ポッター Vol.7が英語で楽しく読める本』（クリストファー・ベルトン，コスモピア）※同 Vol.1 ～ Vol.6も既刊
・『最も危険なアメリカ映画「國民の創世」から「バック・トゥ・ザ・フューチャー」まで』（町山智浩，集英社インターナショナル）
・『アメリカ文学と映画』（杉野健太郎責任編集，三修社）
・『イギリス文学と映画』（松本朗責任編集，三修社）

＜４＞異文化理解

【異文化コミュニケーション】

英語は，イギリス，北米，オセアニアなどの英語圏だけでなく，世界で国際共通語として広く用いられている。実際に世界で英語を使用している人の割合を見ると，英語を母語としている人よりも，英語を第二言語や外国語としてグローバル・コミュニケーションの際に使用している人のほうが圧倒的に多いのが現状である。中・高等学校の英語の教員が生徒たちに異文化コミュニケーション能力を身につけさせるためには，自ら世界の文化の多様性や異文化コミュニケーションの現状と課題を知ることが必須である。「異文化コミュニケーション」を扱う大学の授業では，日本の文化，英語の背景にある文化やその他のさまざまな文化，異文化コミュニケーション理論といったさまざまな観点から，中学校や高校で英語を教える際に役立つと思われる内容を意識し，下記のような取り組みの工夫を取り入れたい。

・これまでにさまざまな異文化コミュニケーションを実際に体験した人々をゲスト・スピーカーとして招き，その時の写真や映像などとともに，異文化コミュニケーションの楽しさ・難しさなど，彼らの生の声を学生に聞かせる。授業を履修する学生の中にも，これまでに海外留学などで異文化コミュニケーションを体験したり，あるいは日本国内にいながらも留学生のホストファミリーやボランティアとして異文化を背景に持つ人々と交流した経験を有する者がいると思われるので，彼らの協力を得ながら，ペア・グループやクラス全体で異文化コミュニケーションについて，具体的な事例を通して理解を深めさせたい。
・中学校や高校で使用されている英語の検定教科書に描かれている異文化コミュニケーション場面を収集・調査させ，そこで使用されている英語表現や題材について整理・発表させる。
・異文化コミュニケーション能力を身につけるためには，自国の文化について客観的に深く理解しておくことが重要であるため，日本における風俗・習慣や日本人の見方・考え方の特徴を改めて考える機会を与えたり，海外のドラマや映画などで日本人が登場する場合を視聴し，日本人や日本文化に対するステレオタイプについて議論させる。

【異文化交流】

異文化への理解を深め，異文化コミュニケーション能力を身につけるためには，座学だけではなく，様々な文化的背景を持った人々と実際に交流する機会を持つことが非常に重要である。大学の授業においても，多様な文化的背景を持った人々との交流を通して，文化の多様性及び異文化交流の意義について体験的に理解させるようにしたい。大学の授業では下記のような取り組みの工夫を取り入れたい。

・大学に在籍している交換留学生や，近隣に居住・勤務している外国人などをゲスト・スピーカーとして授業に参加してもらい，英語を使ったインタビュー活動を行う。
・授業内での異文化交流活動がさまざまな誓約で実現できない場合もありうる。そのような場合は，上記の異文化交流の活動を授業外の課題として学生に課し，その結果を授業でグループ・メンバーと共有したり，クラス全体へのプレゼンテーション形式で発表させたりすることも一案である。授業外で異文化を背景とする人達へのインタビューなどを行わせる際には，事前学習として，どのような質問をすべきか，また，どのような質問内容が特定の文化的背景を持つ人々にとってタブーであるかなどを議論させておくとよい。
・インターネットを活用し，実際に海外に居住する人々とテレビ会議をしたり，SNSによるやり取りをさせる。その際，ただ単に交流して終わらせるのではなく，事後に振り返りの機会を必ず設けることで，異文化コミュニケーションで留意すべきことを整理・発表させる。

【英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化】

言語を学ぶ際，当該言語圏の歴史・社会・文化を学ぶことは極めて重要である。英語が国際共通語として用いられている現代においては，英語圏をはじめ，英語が使われている様々な国・地域の歴史・社会・文化について理解することが求められる。中・高等学校で使用されている英語の検定教科書においても，英語圏に偏ることなく，世界の様々な国・地域の人々について題材として取り上げられることが多くなってきており，このような題材を将来英語の教員として指導の際に効果的に扱うことができるための視点や教材活用力を養っておく必要がある。大学の授業では下記のような取り組みの工夫を取り入れたい。

・中学校や高校で実際に使用されている検定教科書を用いて，どのような国・地域がどのように取り上げられているのかを把握させた上で，グループごとに異なる国や地域の歴史・社会・文化について調べた内容をプレゼンテーションさせたり，ディスカッションさせたりする。
・池田栄一氏（東京学芸大学名誉教授）が提案するように，教育効果のある映画を異文化理解の教材として使用する。例えば，アメリカ文化について考察させるには，宗教，人種差別やジェンダー差別，移民問題，司法制度などを扱っている映画を，イギリス文化について考察させるには，階級，ジェンダー，人種，帝国主義などに関連する映画を教材として用いたりすることができる。
・ドラマや映画以外にも，日本人に馴染みのある英語の歌の歌詞などを通して，その国・地域の歴史・社会・文化を考えさせるきっかけとすることができる。例えば，日本人であればアメリカ合衆国の国歌*The Star-Spangled Banner*を耳にしたことのある人が多いと思われるが，その歌詞が伝える内容や，どのような経緯を経て国歌として採用されたかについては知らない学生が多いと思われる。著名な歌手が米国国歌を歌唱している映像はインターネット上に多数掲載されているので，著作権などにも留意しながら，授業で活用して視聴させたり，マクヘンリー砦に掲げられた星15個，縞15本

の当時の星条旗を提示して，現在使用されている星条旗との相違点を考えさせたり，後に米国国歌の詩となる「マクヘンリー砦の防衛」を読解させるなどして，アメリカ合衆国の歴史・社会・文化について考察するきっかけとしたい。

・「異文化交流」同様，多様な文化的背景を持った人々にゲスト・スピーカーとして授業に参加してもらい，彼らの目から見る日本人・日本社会・日本文化について語ってもらったり，彼らの自国の歴史・社会・文化について視聴覚資料などを使いながら話をしてもらうこともできるであろう。

・中学校や高校で使用されている英語の検定教科書を活用し，どのような国・地域の歴史・社会・文化が題材として扱われているかについて調べ学習を行わせ，その結果について日本語または英語で発表させる。

【参考図書】

異文化理解については，下記の書籍が参考になる。

・『異文化理解入門』（原沢伊都夫，研究社）
・『異文化コミュニケーション・ワークブック』（八代京子・荒木晶子・樋口容視子・山本志都・コミサロフ喜美，三修社）
・『英語世界のことばと文化』（矢野安剛・池田雅之編著，成文堂）
・『多文化社会がやってきた―世界の言語政策Q&A』（河原俊昭・山本忠行編，くろしお出版）『史料で読む　アメリカ文化史』（全5巻）（亀井俊介・鈴木健次編集代表，東京大学出版会）
・『アメリカ文化55のキーワード』（笹田直人・野田研一・山里勝己編，ミネルヴァ書房）
・『今のアメリカがわかる映画100本』（町山智浩，サイゾー）
・『映画で学ぶ英語の世界』（酒井志延・小林めぐみ・烏山淳子・土屋佳雅里，くろしお出版）
・『イギリス文化55のキーワード』（木下卓・窪田憲子・久守和子編，ミネルヴァ書房）
・『イギリス文化史』（井野瀬久美恵編，昭和堂）
・『グローバル社会における異文化コミュニケーション―身近な「異」から考える』（池田理知子・塙幸枝編，三修社）
・『今そこにある多言語なニッポン』（柿原武史・上村圭介・長谷川由紀子編，くろしお出版）
・『英語とつきあうための50の問い：英語を学ぶ・教える前に知っておきたいこと』（杉野俊子・田中富士美,・野沢恵美子編，明石書店）

2.3　英語力向上

中学校や高等学校等で英語教育に携わる教師には，プロとしての高い英語力（英語のコアカリキュラムで明記されている目標はCEFR B2レベル以上）が要求される。そしてその英語力は，自身が英語の母語話者・非母語話者と英語を用いてコミュニケーションを円滑に行えるための英語力のみならず，英語という外国語の習得の途上にあり，さまざまなレベルの英語運用能力を持つ中学生や高校生等の英語習得を効果的に促すことに資するように，英語表現を臨機応変に調整できる力でなければならない。高等学校においては，2009年度版学習指導要領（2013年度施行）から「授業は英語で行うことを基本とする」ことが求められており，中学校においても，2017年度版学習指導要領（2021年度施行）で授業を英語で行うことが基本であると明記され，教師が授業において英語を生徒とのコミュニケーション・ツールとして積極的に用い，生徒が英語に触れる機会をできるだけ多くし，生徒にできる限り多くの英語を使わせることが期待されている。

このような英語教師に求められる高度な英語力を，「英語科に関する専門的事項」の「英語コミュニケーション」の科目のみで獲得することは極めて難しく，中学校や高等学校等の教員養成に関わる大学においては，「英語科の指導法」やその他の「英語科に関する専門的事項の科目」だけでなく，教養科目や専攻に関する科目の授業や，授業外での取り組みと連携させることが重要である。本項では，指導法や専門的事項の授業内での取り組みとそれ以外の取り組みに分けて具体例を示す。

◆指導法・専門的事項の科目での取り組み

【指導技術の一環として，授業を行う際に必要となる英語運用能力を扱う具体例】

・クラスルーム・イングリッシュの定型表現を定着させる。
・ティーチャー・トークの技術を身につける。
・リキャストの演習を継続的に行う。

【解説】

授業内で生徒に与える指示の表現は定型のものが少なくないが，授業を英語で行うことができるためには，このような英語の定型表現，いわゆるクラスルーム・イングリッシュの使用が自動化されていることが不可欠となる。「英語科の指導法」の授業などで，英語授業で特に使いこなして欲しいクラスルーム・イングリッシュのリストを配布して，授業の帯活動として発音練習したり，ペアで瞬時に日本語から英語に変換する練習を一緒に行ったり，小テストを行うなどして，学生が集中して覚える機会を設けたい。また，クラスルーム・イングリッシュのさまざまな表現をコンパクトにまとめた書籍など（『現場で使える教室英語』（吉田研作・金子朝子監修，三修社），『新版 教室英語表現辞典』（染谷正一著，大修館書店），『大修館　英語授業ハンドブック』シリーズ（金谷憲編集代表，大修館書店），『教室英語ハンドブック』（高梨庸夫ほか著，研究社）も数多く出版されているので，参考図書として履修学生に紹介するとよい。クラスルーム・イングリッシュは暗記ができていたとしても，実際の英語授業を行う際に適切な場面・状況で即座に使いこなせることができていなければ意味がないので，マイクロティーチングや模擬授業で学生が教師役となって実際に何度も使わせる体験をさせておくことが非常に重要である。

生徒の英語力の習得に資するような「英語による英語の授業」を行うためには，上記の「クラスルーム・イングリッシュ」のような定型表現が使いこなせるだけでは不十分である。「英語科に関する専門的事項」の「英語コミュニケーション」の全体目標にも記載の通り，「生徒に対して理解可能な言語インプットを与え，生徒の理解を確かめながら英語でインタラクションを進めていく柔軟な調整能力」を伴う英語力を身につけることが必要である。英語での模擬授業では，生徒役となる学生に，中学生や高校生になりきった演技をするように指示をし，中学生・高校生が理解し難い英語表現で教師役の学生が指示・説明を与えた際には，その表現の難易度が適切でないことを明示的・暗示的に伝え，教師役の学生に生徒が理解可能なレベルまで英語表現を調整させるようにするとよい。このようなティーチャー・トークの技術を身につけるためには，場数を踏むようにする必要があるため，学生が英語教師役になって英語で授業をする機会をできるだけ多く確保したい。ある大学では「英語科の指導法」の授業の最終試験として，履修者全員に英語によるオーラル・イントロダクションを課している。

また，英語科に関する専門的事項を学ぶ「英語コミュニケーション」はもとより「英語学」，「英語文学」，「異文化理解」の授業において，英語でのプレゼンテーションやディクテーションを行う機会を多数設け，その際に聞き手にとって理解しやすい英語表現とは何かを常に意識させ，各自のパフォーマンス

の様子をモニターしたり，自己評価する機会も与えるようにするのも一案である。

リキャスト（recast）は，生徒の発話を修正して正しい発話を促すための訂正フィードバックの一種である。例えば，生徒が英語でI go to Kyoto yesterday.のような誤った言語形式を使用した際に，教師がその言語形式について明示的に訂正したり，誤りの指摘をすることはせずに，Oh, you went to Kyoto yesterday.と応答し，誤った言語形式を修正した発話を生徒に聞かせることで，生徒に自身の発話に誤りがあったことの気づきを与えるフィードバックである。リキャストは第二言語習得において有効なフィードバックと考えられており，英語で英語を教える際の指導技術としてぜひとも学生に身につけさせたい。効果的なリキャストができるようになるには，生徒の誤った発話を聞いて，すぐにその誤りに気づき，瞬時に正しい言語形式での発話に変換することができる英語力を獲得しておく必要がある。上記のティーチャー・トーク同様，指導法・専門的事項の科目で扱う活動に英語で行うものを多く取り入れ，相手の発話の意味内容のみならず，使用された言語形式にも意識を向けるような演習を行っておくとよい。

【将来，英語の授業を行う際に生徒に行わせることが想定される英語の言語活動を体験させる具体例】

・生徒に指導することができるよう，スピーチ，プレゼンテーション，ディベート，ディスカッション，エッセイライティングなどを学生に体験させる。

【解説】

スピーチ，プレゼンテーション，ディベート，ディスカッション，エッセイライティングなど，実際に中学校や高等学校等の授業で生徒に英語で行わせる活動を，大学の授業内で体験させる例である。中学校や高等学校の英語教師となることを志望している学生の中には，自身が中学生や高校生の頃にこれらの英語でメッセージを発信する活動を体験したことがないという者も多い。2018年版高等学校学習指導要領（2022年度施行）では「話すこと（やりとり）」，「話すこと（発表）」，「書くこと」の3つの領域を中心とした発信能力の強化を図るために，特にスピーチ，プレゼンテーション，ディベート，ディスカッション，エッセイライティングなどを扱う選択科目の「論理・表現Ⅰ」等の新設がなされることが記載されており，特に将来高校の教師を志望する学生は，これらの活動を実際に指導できることが必須となる。そのため，指導法・専門的事項の科目で扱う活動に，学生の英語による発信能力を向上させるものの多く取り入れることで，学生の英語力を向上させると同時に，将来の指導に役立つ体験をさせることができると考える。ある教員養成大学では「英語科の指導法」の授業内で英語による即興ディベートを履修者に体験させていた。50人規模のクラスサイズであるが，8グループ程度に分け，各グループにICレコーダーを1台マイク代わりに配布し，授業担当教員がタイムキーパーとなり，全グループが同時進行で即興ディベートを行っていた。録音したディベート音声はオンライン上で履修者全員が何度も聞くことができるようにし，学生には自分自身がディベートで使用した英語の表現や論理展開などの振り返りをさせていた。

【指導法・専門的事項の科目で英語資格検定試験の受験を課す具体例】

・資格検定試験での一定水準以上のスコアの取得を科目の履修登録の要件とする。
・資格検定試験での一定水準以上のスコアの取得を科目の単位認定の要件とする。
・資格検定試験の代わりとなる授業内で実施可能な英語力診断テストの受験をさせる。
・e-learningシステムでの資格検定試験対策学習を課題とする。

【解説】

指導法・専門的事項の授業科目に実用英語技能検定（英検），TOEIC L &Rテスト，TOEFL iBTテスト，IELTS等の英語の資格検定試験を何らかの形で取り入れる例で，これらの資格検定試験での一定水準以上のスコアの取得を科目の履修登録の要件としたり，単位認定の要件としたりするものである。日本教育大学協会外国語部門が英語の教員養成に関わる国立大学法人に調査依頼した結果をまとめた「中・高等学校養成段階における英語力要件設定に関する調査報告」（2020年3月8日発表。依頼した54組織のうち33組織より回答。回収率61％）によると，「英語科の指導法」の履修登録の要件として，「実用英語技能検定（英検）2級以上」や「TOEIC L &Rテスト600点以上」，「TOEFL iBTテスト62点以上」，「IELTS5.0以上」が掲げられていたり，「英語科の指導法」の単位認定の要件として，「実用英語技能検定（英検）2級以上」や「TOEIC L &Rテスト730点以上」，「TOEFL iBTテスト70点以上」，「IELTS5.5以上」が掲げられていた。スコアは大学によっても，また，同じ大学内でも科目や学年によって異なる場合があったが，いずれの場合も，このような英語力に関して資格検定試験における具体的なスコアを学生に明示することで，英語力向上のための学習に力を注がせようとしていることがわかる。

また，多くの資格検定試験は大学の授業時間内で受験することが，試験時間の長さや試験会場環境から難しいことが多いため，これらの資格検定試験の代わりとなる授業内実施の可能な英語力診断テストの受験をさせる場合もあった。ある教員養成大学では「英語科の指導法」の90分授業内でVELCテスト（金星堂）の受験を履修者全員に課していた。VELCテストは日本人大学生の英語力を診断するために開発されたテストで，試験時間が70分（55分の短縮版もある）であり，授業時間内に実施が可能である。VELCテストのスコア結果には換算によってTOEIC L &Rテストの予測スコアも表示されるため，授業担当の教師や学生にとっても獲得されたスコアから英語力を把握することが容易である。この教員養成大学では学生の獲得したテスト結果を学生の許可を得て，学生が教育実習を行う大学附属の中学校や高等学校の実習指導教員にも伝え，大学，教育実習校，教育実習生が教育実習を実際に行う前から実習生の英語力についての把握・指導ができるような体制をとっていた。

資格検定試験を活用した英語力向上の試みはVELCテストのような受験時間の短いテストを代用することで可能ではあるが，多くの大学では授業時間内に問題演習や受験を行うのが困難であるため，e-learningシステム等での授業外学習を課題とする事例が多い。e-learningシステム等は教室での授業に比べ，学生にとって学習する時間・場所に融通が利き，便利である反面，学生の自己学習管理に任せ過ぎた結果，計画的に英語学習が進まずに停滞してしまうことも起こりうるため，定期的に進捗状況を教師が確認したりするなどの対策を考えておくとよい。また対面授業の場合もe-learningの場合も，学生によっては一生懸命に英語学習を継続しているものの，肝心の資格検定試験のスコアの伸びになかなか反映されず，結果として学生の学習意欲減退につながることもある。その場合は，例えばTOEIC受験者に身の丈に合ったジュニア版であるTOEIC Bridgeを受験してみるように助言し，そのスコア結果を学生の英語力の診断や今後の学習計画立案に役立てるのも一案である。

これまで述べてきたように，指導法・専門的事項の科目で英語資格検定試験の受験を課すことにより，英語力向上を目指すことは可能であるが，この英語力はあくまで一般的な英語運用能力であって，前述したティーチャー・トークやリキャストなどができる英語力と完全に一致するものではない。英語の教員養成においては，一般的な英語力の向上だけでは不十分で，「教師として英語を教える上で必要となる英語力」を鍛えるための演習が不可欠である。

◆指導法・専門的事項以外での取り組み

免許法上の科目の授業以外でも，各大学のカリキュラム下に設定された教養科目や専攻に関する科目の授業において，また，授業外に各学科・学部や大学として設けた特別講座や海外研修プログラムを有機的に組み合わせることで，将来的に英語教員を目指す学生の英語力を向上させることが可能である。

【他の科目との連携の具体例】

・教養科目や専攻に関する科目として開講されている英語関連科目で英語力向上に取り組む。
・教養科目や専攻に関する科目で英語の資格検定試験の学習を行う。
・資格検定試験での一定水準以上のスコアの取得を「教育実習」を行うための要件とする。

【解説】

英語教師に求められる高度な英語力を学生に獲得させるためには，「英語科の指導法」や「英語科に関する専門的事項の科目」だけでなく，教養科目や専攻に関する科目の授業と連携させたカリキュラムを構築することも有効である。英語の発信能力を強化することは，卒業後に英語教師を志望する学生のみならず，すべての学生にとって，就職活動やグローバル化がさらに加速することが確実な今後の社会で生きていく上で不可欠と言えることから，全学生が卒業要件として必修となる大学の英語科目の中で，スピーチ，プレゼンテーション，ディベート，ディスカッション，エッセイライティングなどを扱うことの意義は大きい。英語教師を目指す学生は「英語科に関する専門的事項の科目」としての「英語コミュニケーション」での学びと，全学必修科目や自身の専攻に設けられている英語科目での学びを通して，グローバル社会の中において英語で自信を持って発信することのできる英語力の獲得を目指したい。

ある教員養成大学は教養科目として開講されている英語科目として，「英語集中演習」という名称の日本語使用厳禁の英語漬けのトレーニングを1週間程度，集中授業形式で開講している。毎日，朝から晩まで英語オンリーで過ごし，英語を使ってディスカッション，スキット作成，英語の歌の書き取りなど，さまざまな活動を行う。またこの大学では「英語集中演習」のTAをやることで単位を取得できる「英語指導実践演習」も開講している。TAはまさに「英語で英語を教える」ことを集中的に学び，「英語教師に必要とされる英語力」を鍛えることができる。

近年，多くの大学が教養科目や専攻に関する科目の中で英語の資格検定試験受験に向けた学習を行わせている。これは世間一般にグローバル企業と認知されている大企業に限らず，数多くの企業・団体が今後ますますグローバル化されていく社会において，世界に通じる英語力を有する人材を求めていることが要因の1つとなっている。また在学期間中あるいは大学卒業後に海外の大学・大学院への留学を目指す学生はTOEFL iBTテストやIELTSなどへの学習意欲が高い。TOEICなど英語の資格検定試験で一定水準以上のスコアを獲得していることは，就職活動において非常に有利に働くため，多くの大学が学生の英語資格検定の取得の後押しをするような英語教育に力を入れたカリキュラムを構築してきている。

また，学生が中学校や高校等で英語の「教育実習」を行う際の要件として，英語の資格検定試験の一定水準以上のスコア取得を設定している大学もある。先に紹介した日本教育大学協会外国語部門の調査結果によると，ある国立の教員養成大学では「実用英語技能検定（英検）準1級一次合格以上」や「TOEIC L&Rテスト730点以上」，「TOEFL iBTテスト80点以上」，「IELTS6.0以上」を「教育実習」を行うための要件としている。

【授業外での取り組みの具体例】

・英語力向上講座を開催する。

・国内・海外研修プログラムを実施する。

【解説】

授業外での取り組みとして英語力向上講座と海外研修プログラムの例を挙げる。先述した大学の授業の一環として英語の資格検定試験を活用する以外にも，キャリア教育の一環として大学として学生の英語力向上を狙った英語の資格検定試験対策講座を設けたりする場合が少なくない。大学によっては一定以上の水準のスコアを学生が獲得した場合に，インセンティブとして受験料を免除したり，大学の広報媒体にその学生の結果を大きく掲載するなどして，学生の英語力向上のための学習意欲を喚起しようとする試みが見られる。

国内研修プログラムとしては，高校生を大学キャンパスに招いて，高校生相手に朝から夕方まで1日中，日本語厳禁の英語プログラムを学生に企画・運営させたりして，英語の指導力と英語力を同時に鍛えるものがあった。海外研修プログラムでは学生にとって魅力的なさまざまな語学研修を企画し，ESL環境での生活や学びを通して，学生の異文化適応能力や英語力向上を目指す。

◆まとめ

中学校や高等学校等で英語教育に携わる教師にとって，常により高度な英語力を獲得するための生涯にわたる学びは必須と言える。学生には教員養成の段階から，一般的な英語力のみならず，「英語で英語を教えるための英語力」を向上させることの意義を十分に理解させ，それを学ぶ機会を授業の内外で十二分に得られるような環境を整えることに大学は力を注ぐべきである。

3. これからの教員養成・採用・研修に向けて

3.1　はじめに

大学の中等教育教員養成課程において，学生が習得すべき知識・技術は多岐にわたる。教科の指導法に関する科目と専門的事項に関する科目に加え，全学的な学習支援体制の構築が必要である。一方で，優れた教員の育成は大学で完結するものではなく，教員になってからの指導経験と継続的な学びによって実現されるものである。その学びをサポートする効果的な研修プログラムを，行政は責任を持って提供しなければならない。また，資質・能力を備えた人材を採用するためには，妥当性・信頼性の高い採用試験を実施しなければならず，加えて，採用試験で求められる知識・技術は大学における学びにも影響を与えうることから，望ましい波及効果のある試験であることも重要である。このように，優れた教員の育成には，養成，採用，研修の全てにおいて，改善のための叡智の結集とたゆまぬ努力が不可欠である。

3.2　教員の養成

大学における教員養成課程で英語教員養成コアカリキュラムに提示されている項目全てを網羅するためには，授業時間，クラスサイズ，学習環境，使用できる教材資源などのさまざまな制約に対処しながら指導にあたる必要があり，授業担当者には不断の努力と工夫が求められる。

教職課程の全科目に共通して今後期待される実践として，オンラインの活用が挙げられる。本項では，オンラインの活用について，<1>教員養成課程におけるオンラインを利用した指導，<2>中・高等学校のオンライン授業を見据えた指導，の2つの観点から論じたい。

＜１＞教員養成課程におけるオンラインを利用した指導

2020年度は，新型コロナウィルス感染症（COVID-19）への対応のために国内外の教育機関でオンライン授業が大規模に導入された点で，歴史に残る年度と言えるだろう。国内では，COVID-19の第一波に対応する緊急事態宣言が解除された後も，多くの大学で全面的ないしは本格的なオンライン授業が年間を通して続けられた。十分な準備時間を確保できない中での教職員による懸命な試行錯誤が功を奏し，大学及び大学教員はオンライン授業実施に関する豊富なノウハウを短期間で身につけつつあるように思われる。もちろん，対面授業での指導内容をすべてオンラインに置き換えることはできず，オンライン授業にはおのずと限界があるが，一方でテクノロジーの発展に助けられ，「かなりのことはオンラインでできる」という実感を多くの大学教員が得ることができたのではないだろうか。COVID-19の収束後も，オンラインによる指導は少なくとも部分的には定着していく可能性が高い。教員養成においても，オンラインによる学習を効果的に取り入れた指導が期待される。

例えば，英語科の指導法をはじめとする教員養成科目で使用された各種教材や映像などを大学のサーバーにアップロードしておけば，学生はいつでも参照することができる。また，教室での模擬授業の代替として，学生各自に生徒役不在の「エアー模擬授業」を実施・撮影してもらい，その映像を YouTube などに限定公開し，学生同士が視聴し合ってコメントする，という試みがあるが，こうした実践は，対面授業復活後も模擬授業時間の不足を補う方法として有効であろう。履修生の人数が多く，教員が全ての映像をチェックしてフィードバックを与えることが難しい場合でも，管理者として学び合いの場を提供するという役割を担うことはできる。学生の英語力の向上についても，授業だけでは限界があるので，指導者・管理者をきちんと配した上での e-learning の活用が望まれる。

＜２＞中・高等学校のオンライン授業を見据えた指導

感染症の有無に関わらず，授業や授業外学習におけるオンラインの活用は，今後中・高等学校でも積極的に行われていく可能性がある。オンライン授業の普及を後押しすると思われるのが，急ピッチで進められているICT環境の整備である。

文部科学省は，2019年6月に「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策（最終まとめ）」を発表し，Society 5.0 時代の到来を見据えて，教育現場でICT環境を基盤とした先端技術や教育ビッグデータを活用する意義と課題や今後の方策を示した。また，2019年12月には「GIGAスクール構想」を発表し，「1人1台端末」や高速大容量通信ネットワークの活用などを基軸とする「令和の学びのスタンダード」の実現に取り組んでいる。昨年よりCOVID-19の感染拡大を受けて，GIGAスクール構想は当初の予定を前倒しして進められている。学習者用デジタル教科書の導入も本格化しつつあり，2019年4月には「学校教育法等の一部を改正する法律」及び関連法令が施行され，紙の教科書を主たる教材として使用しながら，各教科の授業時間数の2分の1未満の範囲で，学習者用デジタル教科書を併用することができるようになった。さらに，2020年12月にはこの「2分の1未満」という制限を撤廃する方針が文部科学省によって示された。ICT環境の整備と学習者用デジタル教科書はオンライン授業との相性が良いため，今後のオンライン授業の拡大に弾みがつく可能性が高い。

パンデミックをはじめ，対面授業が困難になる事態に備え，常にオンライン授業ができる状態にしておくことは危機管理上も推奨されるであろう。対面授業とビデオ通話を組み合せたハイフレックス型（HyFlex: Hybrid-Flexible）授業は対面とオンライン受講の両方に対応しているので，感染症の感染状況悪化などの緊急事態が生じたときにフルオンラインへ切り替えることも比較的容易である。

オンライン授業は，感染症対応だけでなく，通学に困難を抱える生徒への対応にも役立つ。病気，怪我，障害，引きこもりなど，さまざまな事情で対面授業の受講が困難な場合に，オンライン受講という選択肢が与えられる意義は大きい。

中・高等学校のオンライン授業に対応するため，COVID-19が収束した後も敢えて教員養成課程においてハイフレックスなどの授業を体験させることも必要であろう。

3.3　教員の採用

＜１＞教員養成コアカリキュラムにもとづく試験の実施

教員採用試験は都道府県及び政令指定都市が独自に作成しているが，2022年の試験（＝2023年度採用試験）からは教職課程コアカリキュラムと英語教員養成コアカリキュラムに基づく課程で学んだ学部4年生が受験することになる。その際の教員採用試験は，両コアカリキュラムの内容を踏まえたものである必要があるだろう。

教員養成と教員採用試験の関係は，高等学校教育と大学入試の関係と類似している点がある。大学入試には，学習指導要領に沿って高等学校で学んだ内容がどれだけ身についているかを測る「到達度テスト」（achievement test）としての側面と，大学が「望む人材を選抜する」ためのテストとしての側面がある。かつては後者の意味合いが強く，学習指導要領を逸脱した難問・奇問が出題されるなどの弊害が指摘され，学習指導要領に則った基礎学力テストとして1979年に全国の国公立大学及び産業医科大学を対象とする「大学共通第一次学力試験」（共通一次試験）がスタートした。その後，制度変更を経て1990年には「大学入学者選抜大学入試センター試験」（センター試験）に名を変え，私立大学も利用可能になり，2021年には「大学入学共通テスト」に生まれ変わることとなったが，学習指導要領に基づく到達度テストとしての位置づけは変わっていないと言ってよいであろう。一方，大学が独自に行う個別試験は，学習

指導要領を踏まえつつ，筆記試験・実技試験・面接試験などを通して，各大学が「望む人材を選抜する」意味合いの強い試験であると言える。大学入試はこのように，到達度テストとしての共通テストと，望む人材を選抜するための個別試験から成り立っている。

こうした枠組みを教員採用試験に当てはめるとすれば，全国共通の一次試験でコアカリキュラムに基づいた学修の到達度を測り，二次試験で各自治体が地域のニーズに応じた人材選抜を行う，という形が考えられる。この制度設計は，検討に値するだろう。それによって教員採用試験は，大学での学びの到達度テストとしての比重がより高い試験になることが期待できる。

＜２＞教員免許の国家資格化の動き

上記のことと関連して，教員免許の国家資格化の動きについて述べる。国家資格化は2015年5月に自由民主党の教育再生実行本部の配布資料で記載され，2020年6月には萩生田光一文部科学大臣が講演で「学校の先生こそ，本当は国家資格の方がいいのではないか」と述べ，国が教員免許を交付すべきだとの考えを明らかにした。

大学側でも，2019年に日本教育大学協会の研究グループが教員免許の国家資格化の提言をしている。日本教育新聞（インターネット版 2019年10月28日 1面記事）によると，4年制大学の学部卒業生の場合，①全国共通の一次試験の合格→ ②自治体や学校法人が実施する二次試験の合格→ ③2年間の実務経験→ ④国家試験の合格，という段階を経て教員になることが構想されている。一方，教職大学院の場合，修了と同時に国家資格が得られ，全国共通の一次試験と自治体・学校法人の二次試験に合格すれば教員になれる（すなわち，2年間の実務経験と国家試験の受験が免除される）。2019年11月には，同協会主催のシンポジウムが開催された。日本教育新聞（インターネット版 2019年11月25日 1面記事）によると，同協会のワーキンググループは10月に同協会の役職者に提案への賛否などを尋ねるアンケートを実施し，149人から回答を得，回答状況は次のようであった。

「現行の教員免許制度」について「早急な変更・修正が必要」が37％，「必要だが時期尚早」が48％，「見直す必要はない」が13％。「国家資格化への移行」については「全面移行を検討すべき」が30％，「現行制度と併存導入」が34％，「望ましくない」が30％だった。教員免許制度の早急な見直しを求める人ほど，国家資格化を望む傾向にあった。

一方，自由記述では「ハードルが上がり，教員になる人がますます減少する」「制度を変える前に，教員の待遇改善や環境整備を行うべき」とする意見もあったという。

パネルディスカッションに参加した文科省総合教育政策局の柳澤好治・教育人材政策課長は，協会からの政策の提案を歓迎した上で「制度を変えるには，どのようなメリットがあるのかよく考える必要がある」と導入には慎重な見方を示した。

教員免許の国家資格化などの動きを注視しつつ，より良い教員採用試験の在り方について学界からも積極的に発信していく必要があるだろう。

3.4　教員の研修

英語教員の養成コアカリキュラムと同時に，英語教員の研修コアカリキュラムも作成された。しかしながら，教員養成コアカリキュラムが大学の教職課程認定の基準として使用され，各大学の教職課程はコアカリキュラムに沿ったものであることが求められているのに対して，教員研修コアカリキュラムに

そうした拘束力はない。各自治体がコアカリキュラムに基づく研修を積極的に行うことが望まれる。

教員研修においても，オンラインの活用が期待できる。オンデマンドの講演映像の視聴，Zoomなどを使った同期型のオンライン研修などによって，研修へのアクセスは大きく改善されるであろう。

3.5　おわりに

教育の質を上げるには，教員の勤務上の過重負担を軽減することが不可欠である。少人数クラス化，「ブラック部活」の解消，雑務の軽減などが課題であるが，ここではクラスサイズに関するOECDのデータや政府の方針について記載する。

日本の公立小学校においては，現在の1クラスの上限は1年生が35人，2～6年生が40人であるが，全学年にわたって学級編成を35人に引き下げる法案が2021年2月に閣議決定され，2021年度から5年かけて1クラスあたり35人に引き下げることとなった。一方，中学校のクラスサイズは上限が1クラス40人，高等学校のクラスサイズは標準が1クラス40人である。萩生田光一文部科学大臣は閣僚折衝後の記者会見で，「中学校においても少人数学級の必要性はあると思っていますので，そういった努力を続けていきたいと思っています。」と述べている。

ところで，OECDが2020年9月に発表したデータ Education at a Glance によると，2018年の1クラスあたりの児童生徒数と教員1人当たりの児童・生徒数は以下のようになっている。

	1クラス当たりの児童生徒数		教員1人当たりの児童生徒数	
	小学校	中学校	小学校	中学校
日本	27	32	16	13
OECD平均	21	23	15	13

（OECDのデータをもとに作成）

日本の小・中学校のクラスサイズは OECD 平均を大きく上回る一方で，教員1人当たりの児童生徒数は平均値に近い。1クラス当たりの児童生徒数と教員1人当たりの児童生徒数の食い違いについて，日本経済新聞（2020年11月4日 インターネット版）は，「日本は1クラスあたりの担任外教員が多いのが背景にある」とし，次のように述べている。

> 財務省は10月26日の財政制度等審議会でこのデータを指摘した。文科省は翌27日に「担任外教員は特別な支援が必要な児童・生徒への対応に充てている」と反論した。いじめ認知件数や，日本語指導の必要な児童・生徒の急増を挙げた。国際比較の評価は食い違う。

より良い教育環境の実現のためには，平均値だけでなく，詳細な分析に基づく対応が必要である。クラスサイズと指導効果の関係についても，多面的で客観的なデータに基づいた綿密な分析・考察が待たれる。